二次元ドリームマガジン

11年目も激しさそのまま、お値段もそのままで!

cover illustration by トモセシュンサク

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

立ち読み版

大好評連載&読み切り小説

きらら☆キララ
魔法少女ってたいへん!
さかき傘×浅沼克明

守護聖女プリズムセイバー
空蝉×くまっち&船虫

蒼井村正×或十せねか
狩野景×緑木邑
あらおし悠×牡丹
089タロー×露田米
斐芝嘉和×gALL

大人気えっちマンガ&カラーマンガ

ぱふぇ
琴慈／NO.ゴメス
TAKE／こうきくう

オーク、触手、魔獣、巨大蟲——
おぞましき化け物たちがヒロインを襲う!

今号の特集 いしゅかん

異種姦

特別付録:ピンナップポスター

トモセシュンサク
冷泉／いるまかみり

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

vol.61
2011 12

DIGITAL EDITION
デジタル版

対怪人犯罪特殊部隊ポリスティア

小説：山本沙姫
イラスト：ブッチャーU

「……ふむ、半径五〇〇メートル以内に反応はなし、か……」

長い茶髪を一本に束ねた美女が、右手でレーザーガンを構えて人気のない街を行く。顔に付けた、多機能センサーを内蔵したゴーグルに映し出される情報を読み取りながら。

「もしかして、このボクに恐れをなして逃げ出したのかな？　なーんてね……」

肩や腰まわりに、特殊強化アクリル製の装甲を取りつけた、ハイレグ状の濃紺のラバースーツに身を固めた彼女は、大きく張り出した洋梨型のバストと、自重で歪むことなく美しい曲線を描いたヒップが目を引く。

さらに、女体の柔らかさを際立たせる、キュッと引き締まったウエストを持つ娘の名は、久世護。

男っぽい名前に反して、まだ無邪気な可愛らしさを残す彼女は、ビースト・マンと呼ばれる異形の犯罪者から市民を守るために結成された特捜チーム、「M・C・S・U（Mutant Crime Suppression Unit）」の優秀な隊員である。

そして、まだ二十一歳という若さながらも特級捜査官の位にある美貌の戦士には、もう一つの名前があった。

コードネーム・「ポリスティア」。数多くの危険なビースト・マンを捕らえ、時には消去してきた凄腕捜査官の名を聞けば、どんな凶悪犯でも怯え、震え上がると言われている。

「でも、あいつはそんなに逃げ足は速くない。まだ近くにいるはずね。絶対に捕まえてやる……」

捜査中に軽口を叩く癖があり、ふざけた性格に見られがちな一面もあるが、市民を守るために悪に挑む熱い心は本物だ。今も指名手配犯発見の通報を受け、慎重にその行方を追っている。

「この俺を捕まえるだと!?　生意気なぁっ！」

ガボオッ！

すると突然、足元からドスの効いた声が響くと共に、マンホールの蓋が勢いよく跳ね上がった。

ビジュッ！　ビジュルルルッッッッ！

「えっ！　きっ、きゃああっっっ！」

続けて、饐えた匂いを放つ粘液を纏った、赤紫色の怪物が飛び出してくる。その全身から生えた、タコの足に似たおびただしい数の触手に、護はムチムチと張りのある肉体を押さえられてしまった。

「ククク、M・C・S・Uの捜査官が逆に捕まるとは、こりゃ実に愉快だねえ」

下品な笑みを浮かべつつ、背後から抱きついてきたのは指名手配ナンバー二〇〇八、コードネーム・オクティオン。

これまでに何百人もの若い女性をさらっては、望まざる子種を押しつけてきた連続強姦魔。ポリスティアが追ってきた凶悪犯だ。

「オ、オクティオン！　お前を、逮捕……くぁっ！」

咄嗟に銃口を向けて怪物を制止しようとするものの、全身に絡みついた触手に自由を奪われ、思うように動けない。

「こんな小娘に、仲間が何人も消されただと？　信じられねえなぁ」

噂に聞く強敵を難なく捕らえ、余裕綽々の醜悪な性犯罪者は、獲物が動けないのをいいことにその艶かしい身体を思うままに弄ぶ。

ぐにっ、ぐにゅっ、ぎちゅっぎしゅっ……。

「いっ、痛い……くぅっっっ……」

巨大なマシュマロを彷彿とさせる、柔らかな乳房が鷲掴みにされ、形が歪むほど力任せに揉み扱かれる。

ぺちゅっ、ぺしゅっ、ぺちぺちぺちっ……。

さらに剥き出しの太腿を、湿った生温かい触手で撫で回してきた。敏感な乙女の柔肌の上を静電気に似た痺れが走り、背筋がゾクゾクと震える。

「ひぃっ！　やっ、やめろおっ！　ボクに……さっ、さわるなぁっ！」

怯える捕らわれの乙女に追い討ちをかけるように、両足がM字型に広げられ、硬くいきり立った男根が、股間の前にこれ見よがしに滑り込んできた。

表面にボコボコと血管を浮き立たせた醜肉が、薄いラバー越しに乙女の丘を擦る。

（こ、こいつは……）

今までに出くわした、ビースト・マンの性犯罪者が引き起こした悲劇が脳裏をよぎった。

身を汚され、もっとも大切なものを奪われ、あげくの果てに人ならざるものを産み落とさせられた若い娘たち。今、同じ不幸が目前に迫る現実に、心が凍りつく。

「いっ、いやぁ――っっっっ！　だめぇ、うぐっ!!」

必死に泣き叫ぶ護の口は、ベタベタと生臭い液体にまみれた太い指で塞がれた。そして、乙女の秘園めがけて、邪な淫欲の塊が迫る。

（もう……だめ……）

ヒュンヒュンヒュン……。

だが、ケダモノの男根を押し込まれる寸前に、どこからともなくサイレンが聞こえてきた。ポリスティアからの定時連絡が途絶えたことで、異常事態を察知した仲間が救援に向かってきたのだ。

（た、助かった……）

「チッ、うるさいのが来たか。まあ、続きは俺のア

退魔委員長本城寺静音

小説：山本沙姫
イラスト：白家ミカ

「いくら退治してもキリがない、このままじゃ……」

夕闇迫る放課後の教室に、一人の少女がペタンと座り込み、あたりの様子をうかがっていた。

ボロボロになった白い制服から覗く、きめ細かい柔肌を両手で隠して。

「足さえ挫いてなければ、こんな奴、何てことないのに……」

やや高めの一七〇センチオーバーの身長に、九〇近くあるDカップのバストと、同等の大きさのヒップ。それに、括れの目立たないポッチャリしたウエストと、ムチムチ張りのある太腿という、まだ一〇代にしては大人びた身体つきの少女。

その艶かしい色香を放つ肉体に反して、低い鼻とふっくらとした幼げな顔付きに加え、クリクリとよく動く大きな茶色の瞳が、初々しい可愛らしさを醸し出す。

「いったい、どこに隠れているの……」

艶やかな黒いポニーテールを束ねる真紅のリボンと、腕に巻いた青い腕章がトレードマークの少女の名は、本城寺静音。

ここ、私立要女子学院の規律と秩序を守る風紀委員長である彼女には、ごく一部の人しか知らないもう一つの顔があった。

学院内に出没する魔物を退治するために結成された、退魔委員会の委員長という顔が。

「もう、誰も傷つけさせない。なんとしても奴を倒してやる！」

一週間ほど前から学内で頻発している、いたいけな女学生の身体を鞭打ち、胎内に肉欲の塊を思うままにぶちまけるという、痛ましい暴行事件。

卑劣な犯罪の陰に、魔物の気配を感じ取った勇敢な退魔師少女は、その住み処が取り壊しも間近な旧校舎にあるのをつきとめ、一人乗り込んできていた。

しかし姿を見せず、透明感のある薄紫色をした軟体を伸ばして攻撃してくる敵は、思いのほか手強い。

ビシュッ！　パシィッ！

「きゃあっ！」

天井や床、さらに壁に開いた無数の穴から飛び出してくる柔肉の鞭が、乙女のふくよかな身体を激しく叩く。

ピシィッ！　ビシィッ！　ビシィッ！

「あっ、ひっ、あうっ！　くうっ……」

シンと静まった空気を切り裂き、目にも止まらぬ速さで振り下ろされる蛇のような物体は、柔軟性があるわりには表皮が固く、トラックのタイヤのよう。

おまけに先端付近に並んだ突起物が引っ掛かり、一打ちごとに着衣がビリビリと裂かれていく。

濃紺のストッキングはすでに穴だらけ。膝上一〇センチの短いスカートも、腰まわりを隠す役に立たないほどズタボロに。

そして上着は胸元が、中に付けた幼顔に不釣合いな黒いレースのブラまでもが大きく引き裂かれている。下着の役目を果たせなくなった黒紐の上に、高く起立した大きめの乳首が飛び出し、その根元がキュウキュウと締め付けられた。

ビチンッ！　ベヂンッ！

「くぅっ、い、今は……集中しないと……」

いくら踏み込んで早々に、不意打ちを食らって足を痛めたとはいえ、静音は邪な魔物の攻撃をただその身に受け続けてきたわけではない。

唯一魔物を倒せる武器、己が霊力を封じ込めた護符を放ち、襲い来る肉鞭を何十本も切り落としていた。

だが次々と生えてくる軟体に対して、それはまさに焼け石に水。元を断たない限り、この戦いに終わりはない。

バシン！　バシバシバシンッ！

「ひぃっ！　ほっ、本体は……どこ……」

しかし肉の鞭の出所を探る退魔師少女の集中力は、息つく間もないほどの連続攻撃で削がれてしまう。

ベシィッ！　ドビュッ！　ドプドフドプッ！

「うぐぅっ、く、臭い……」

それに時折、軟体の先端が縦割れに開き、ツンと鼻を突く塩素臭交じりの白濁液を吐きかけてくる。

（これって、やっぱり……）

いかに男を知らぬ生娘とはいえ、我が身に塗りつけられる汚物と、亀の首の如き括れのある肉鞭の先端が何を意味している物なのかはわかる。

そう、これこそが、多くの女学生を痛めつけ、辱めてきた魔物の男根そのものであった。

（早く、退治しないと。こんなの……耐えられない……）

バシッ！　ビシッ！　ブリュッドププッ……。

柔らかな肉体を四方八方から鞭打たれ、ほんのりと赤く火照った素肌に汚液を吐きかけられつつも、静音は懸命に憎き敵の本体を探る。

「……！　そっ、そこかっ！」

すると、不意に見上げた天井の大穴から、ルビーのようにギラギラと輝く二つの目玉が、こちらを食い入るように見つめているのを見つけた。

「みんなの仇め！　食らえっ！」

シュキィィィンッ！

多くの友を傷つけた宿敵の姿を捕えた退魔師少女は、手元に残された二枚の護符を勢いよく投げつける。

ザグッ！　ザシュッ！

著者近刊
好評発売中！
お嬢様は妄想厨!?
「お嬢様は妄想厨!?
幼馴染といちゃエロ性活」
決戦に挑む聖女ルリナを魔物と化した想い人の
触手魔姦が蹂躙する!!
守護聖女
prism saber
プリズムセイバー
乙女たちの散華
最終話 結実
小説 NOVEL 空蝉（うつせみ） 挿絵 ILLUSTRATION くまっち＆船虫（ふなむし）
原作 ORIGINAL Lusterise

「てぇぇいっ！」
ザシュゥッ――！
ウェーブがかった長髪がなびくと同時に、両手で握る柄に重い衝撃が伝わる。これで五体目。どこからともなく現れ迫り来る異形の怪物を倒しながら、少女はひとり、駆けていた。
『気を抜くな、ルリナ。我々は、すでに敵のテリトリーに脚を踏み入れている』
堅物らしい物言いで忠告をくれる相棒――所持するピースに込められた「突き進むもの」エストゥファンの意思に頷き、まず乱れた呼吸を整えることに専念する。無論、周囲への注意は怠らぬまま。
「……珠優ちゃんは、だいじょうぶかな」
『信じるのだ。友を。信じる力が、戦いに臨む身の糧となる』
千晶の家からの帰途で別れて以降、珠優とは連絡がつかない状態が続いている。おっとりとして穏やかな性根の、おおよそ戦いなどには向かない親友の身を案ずる暇すら与えられず、異形どもは次々と襲いかかってきた。
連中が珠優のところへも襲来している可能性は高い。――が、今は相棒の言うとおり。親友を信じる他、手立てはない。
「ふぅ……っ」
肺に残る息を吐き尽くし、呼吸を完全に整える。改めて周囲を見渡せば、いつの間にか見たことのない景色。ただただ暗く広大な世界に迷い込んでいた。
『――誘い込まれたか』
「……そういうことは、もうちょっと早めに言って欲しいなぁ」
古風な物言いで簡潔に告げる相棒に言葉を返し、足元に目を落とせば。これまでの四体同様に、先ほど倒したばかりの異形の身体が変化し始める。
「やっぱり……この、人も」
『ああ。邪悪なる魔王の欠片に宿りし悪意に憑依され、内に眠る欲望を掘り起こされし――人間だ』
今や異形の面影は微塵もなく、倒れ伏すのはどこからどう見ても普通の人間。眠るように息をする、うつ伏せの中年男性だった。
彼の身体に、傷のようなものは見当たらない。エストゥファンが言うには、『化け物の姿はあくまで欲望の具現化したものに過ぎぬため』斬り倒しても宿主の肉体に傷は残らない。むしろ欲望を浄化されるのだと言う。だが、それでも。
（この手で。剣で、人を……また斬った、んだ）
言い知れぬ罪悪感と恐怖は、幾度繰り返しても拭えぬし、なくならない。
しかし自分が剣を捨てて逃げれば、その代わりは珠優や千晶がすることになる。もしかしたら斗真を始めとした自身の身の回りの者が敵の標的として狙われる可能性だって否定はできないのだ。それに――珠優と「真白を絶対に助けよう」と約束もした。
（だから。もう逃げたりしないよ、千晶ちゃん）
この場にはいない仲間――別れる前、覚悟を再三問うてきた少女にもう一度会えたなら、堂々とそう伝えるつもりだった。
『ルリナ』
「……ん、だいじょうぶ。わかってるから」
不器用な相棒なりのねぎらいと気遣いは、妙に面映ゆい。おかげで少し、また心にゆとりを得ることができた。そうして決意のこもる視線を上げ、改めて前を向く。
視線の向く先には、いつ現れたのか、気配すらさせずに悠然と男が立ち、長身を振り向けていた。
「ようやく大ボスのお出まし……ね！」
「並のギアムではもう歯が立たぬか」
手下が倒されたというのに嬉しげに告げる男の不気味さに、思わず背筋が総毛立つ。
「怖いか？　俺が」
「初めて会った人を、いきなり怖がったりしないわ。失礼だもの」
余裕だな――そう、言葉とともに笑みをこぼして、男は「メルコールだ」と名乗った。
（すごい、圧力。押し潰されちゃいそう……）
今しがたのやり取りでは平静を装ったものの、内心目の前のたったひとりの敵に気おされて、一瞬金縛りにあったように身が竦んでしまった。
――逃げるわけにはいかないのよ！
男の登場とともに極端に下がった外気の冷たさに当てられた心根を強引に奮い立たせ、地を踏みしめて敵を睨みつける。
「あなたを倒せば、全部終わるんだから」
「さて、どうかな」
腹の底を見せることなく、男が嗤う。
構えた剣の振るい方にはだいぶ馴れた。千晶に再三問われた「戦う覚悟」もできている。やれる。必ずこの手で目の前の敵を――倒してみせる。何度も自分に言い聞かせて、一歩。
「ここまで来た土産に、見せてやろう」
踏み出した脚が、男の言葉とともに彼の背中側に

登場人物紹介

篠宮ルリナ

プリズムセイバーの力に目覚めたばかりの少女。正義感が強く、聖女として戦うことを誓う。

天城真白

悪意が込められたイノセントピースによって魔王の戦士にされてしまったルリナの学園の後輩。

神楽坂珠優

聖女の力に目覚めたルリナの幼馴染み。おっとりとした性格だが芯が強く、ともに戦う決意をする。

功刀千晶

早くからプリズムセイバーの力に目覚め戦っていた少女。能力が高く、何事も一人でやろうとする。

前号までのあらすじ　プリズムセイバー＝フォルテこと千晶は、単身敵の拠点に攻め込むが、幹部メルコールによって触手椅子に拘束され、真白とともに触手ペニスによる制裁という名の陵辱に敗北してしまう。

出現したものにより、再度止められた。
「真白、ちゃん……!?」
メルコールが呼び出したもの。それは開脚状態でしゃがみ拘束された小柄な少女と、数多の異形。
「んぶっ、んっ、んん！　ぇはぁぁっ、も、もぉ入らないっ……おなか、パンクしちゃっ……んぐぅ！」
ところどころ破かれた衣装に包まる華奢な肢体を数限りない繊毛触手になめ回されながら、代わる代わる口腔に押し込まれる肉突起をえずきながらしゃぶらされ続けている真白が、そこにいた。
「どう、してっ……!?」
悲痛な、それでいて艶の混じった彼女の声の響きに驚かされ、反射的に問いかける。
彼女は魔王側に取り込まれた人間。メルコールにしてみれば身内のはずだ。なのに、なぜ。
「矮小な身に過ぎたる力を宿した弊害だな。身の内で荒ぶる異形に馴れるための修練のようなものだ」
疑惑の目を向けられた男が、平然と言い放つ。
その酷薄な声の響き。たったひとことで理解した。
「なに……言ってるのよっ」
彼は真白を戦場の駒としてしか見ていない。人間と人ならざる者との価値観の違いといえばそれまでだったけれど、理屈では割りきれない怒りが渦巻いて、今しがたまで気おされていた四肢を鼓舞する。
「絶対に許せない」
「人というのはつくづく感情に支配されるのだな」
睨み、剣を構え、半歩。間合いを詰めれば、男が青みがかった銀髪をなびかせて斜に構えた。
じりじりと息詰まる時間を引き裂いたのは、また も真白と、その身に這いずる異形どもの発する卑猥な音色だった。
ぶぼっ！　ぼぢゅぶぶぶ……！
「んあぁぅっ！　おっ……奥ぅっ！　もっ、もぉっ……やっ、ああぁ！」
まるでペットのようにはめられた首輪を鳴らし、柔らかなツインテールを振り乱して少女が喘ぐ。
「ま、真白ちゃん!?　そ、それっ……なんで!?」
大量の汁気に浸かり用を成さなくなったショーツの脇から、視認できるだけでも七本。大小様々な色合い、形状をした触手が小柄な真白の胎内へと突き入り、蠢いている。
「まっ、またぁぁっ……出るぅぅぅっ……！」
力ずくで割り裂かれた割れ目の上部では、本来女性に備わるはずのないモノが——毒々しい色をした異形の肉棒が反り返り、少女自身の腹部をベチベチとぶち続けていた。
——びゅぶ！　ぶびょるるるるっ！
「ひぐっ！　ぅぅぅ！　出っ、出ひゃあぁぁぅ！」
筋の浮いた幹を脈打たせて、毒色ペニスの先端から白濁の液体が、激流の滝のごとき勢いで噴出する。
——どく、んっ……どぐっ、どぷぶぶっ！
同時に真白の腹部に内側で暴れ回る異物のシルエットがボコボコと浮かび上がり、小ぶりの結合部からは泡立つ白濁液がぼたぼた。床に水溜まりを作るほど大量に漏れ落ちていた。
「いひぁっぁぁぁぁぁぁっ！」
大量の膣内射精を受けて、一瞬妊婦のように膨らんだ真白の腹が、別の触手に締め潰され、搾り出された白濁液が次々漏れ出て水溜まりを広げてゆく。
「ふぐぅぅぅっ……あは、あはぁっ！　ひび、くよぉ……まらっ、ち　ち　っ、出りゅうううう！」
苦悶を浮かべるのが当然のはずの少女の顔は、泣き笑いのような不可解な表情を形作り。涙とよだれでグチャグチャの口元から、延々嬌声を張り上げる。
いつも何かに怯えるようだった真白。魔の力を得て過剰なまでに己を誇示していた真白。
そのどちらでもない今の姿は、なまじ元の彼女を知っているだけに悲痛さを増して見えてしまう。
「あれもっ……あなたが、真白ちゃんをあんな風にしたの!?」
私情に惑わされるなとの相棒の声も聞き入れられぬほど、怒りが増長していく。
「ああ、そうだ。あの寄生触手で形成されたペニスこそが、真白の新たな力。貴様ら……聖女の力を継ぎし者を犯し、イノセントピースのエナジーを吸収して魔王へと供給する。そのための器官だ」
——おぞましい。淡々とした回答を聞く間に、それ以外の感情は浮かばなかった。やはり目の前の男は相容れない存在なのだ。
「ここであなたを倒して、真白ちゃんも、珠優ちゃんも、千晶ちゃんも……みんな、守ってみせる！」
「フッ……」
「なにがおかしいのっ！」
「貴様を侮って嗤ったのではない。ただ滑稽に思ったのでな」
（人の想いを滑稽に……ですって！）
馬鹿にするにもほどがある。それとも、頭に血を上らせて冷静な判断を失わせようという魂胆か。
続く男の言葉は、いずれの予想も否定して、やはりただ淡々と響き渡った。
「ならば見せてやろう。貴様が憂える仲間のひとりが、貴様が戦っている間にどうしていたか——」
再びかざしたメルコールの手の内に、ちょうど収まるサイズの水晶玉が出現する。そこに映し出される光景の中に、確かに親友——珠優の姿があった。
（珠優ちゃんと、もうひとり。一緒に歩いてるのは……斗真、ちゃん？）
ふたりは顔見知りだ。自分も交えた三人で一緒に昼食をともにしたことも数限りなくあるし、気兼ねなく話せる間柄なのだから、並んで歩いていること自体に不思議はない。
だが、水晶の中に映る映像——息がかかりそうな

著者近況　連載では省略された珠優の変身後コスでのエッチシーンや、ルリナのラストの加筆、その他諸々。単行本は大盛り追加で参る所存でございますよっ。

距離で顔を突き合わせ、たがいにはにかんでいるふたりの姿は、友人という次元を飛び越えて、ひと際親密な関係にあるようにも思われた。

「貴様が剣を手に、苦しんでいる間。親友と呼び慕う娘は、貴様の想い人と語らい、睦み合っていた」

「う、嘘よっ！」

男がうそぶくせいで、そのように見えるだけだ。

水晶の中のふたりの顔がさらに接近する。頬染め合い今にも口づけそうなその光景を拒絶するように、必要以上の大声で叫ぶ。

「皆のために戦うと言うが、守られる者どもは……貴様ほどには、他者を気にかけておらん」

（違う。違うっ違う違う！　珠優ちゃんも斗真ちゃんも、そんな人じゃないもの……！）

信じる心を失うな――諭すように告げるエストゥファンの声が、胸に響いた気がした。

「惑わされたり、しない。こんな卑怯な手で人の心を踏みにじるあなたに、負けたりしない！」

迷いを振り切るように、踏み込んで一閃――。

バギィィィッ！

「ほぅ……」

気合を込めて振り下ろした大剣を、メルコールは水晶を盾に受け止める。

「やはり、頑なだな。だがそうでなくては……まさに、魔王に捧げるに相応しき純真だ」

聖剣の衝撃を一身に浴び、粉々に崩れた水晶の欠片を指の合間からこぼしながら。浅く裂けた手のひらより滴る血筋を舌でなめ上げ、男は小さく口端を吊り上げ、不敵に笑んでみせた。

まるで格好の獲物を見定めたかのような厭らしさ。戦いを遊びか何かのように捉える仕草が逐一おぞましく思え、純然たる怒りを蓄積させる。

「……真白ちゃんは、もっと痛かったわよ」

今まさに目の前で陵辱されている真白や、先日ともに異形の触手に嬲られた珠優が心身に負った傷の深さに比べれば、男の手のひらの傷など気遣うにも値しない。

躊躇すれば、自分がやられる。そうなれば他の戦士――千晶や珠優が代わりに傷つくことになるのだ。そう思えばこそ、敵に対しては非情に徹する。

「つくづく仲間のため、というわけか。ならばその覚悟のほどを、試してやろう」

再度正眼に構えた大剣を前にして、なお余裕を崩さぬ男が血の滴る右手の指をぱちりと鳴らした。

ぶぅ……んっ……べちゃっ！

「……っ！」

性懲りもなく男が異空間より取り出して、ちょうどふたりの中間の位置の床に投げ落としたのは、見るもおぞましい深緑色の化け物――巨大なギアムだ。

食虫花を思わせる巨大な口腔の周りに無数の肉厚触手を生やしただけの、吐き気すら催す気味の悪い造形。床上でのたうつ状態で成人の腹部ほどの高さがある体躯。生え茂る触手から絶えずにじみ出す粘液をブジュブジュと泡立てて這いずり寄ってくるそれは、生理的嫌悪感をこの上なく煽る生命体だった。

「くっ……こ、このっ！」

ズドムッ――！

鈍重な深緑の化け物の中央にぽっかり空いた口腔を、剣で刺し貫き、V字に斬り上げる。

「ゥゥゥゥギアアアアアアアアア!!」

異形はうなりとも叫びともつかぬ響きを発して痙攣し、脚を止めた。

「この程度の化け物じゃ足止めにもならないんだから……！」

吐き気を催すほど醜悪な化け物に対する嫌悪を戦意を鼓舞することで押し殺し、強気な言葉を吐き連ねる。着実に力をつけた己の姿に、重ねた戦いの成果を見出し、誇らしい想いがあふれてもいた。

「元が想い人でも、躊躇なく斬るか。いや、たいしたものだ」

――男が酷薄な声で、異形の化け物の正体を告げるまでは。

「……う、そ……」

飲んだ唾が喉に引っかかって、むせ返りそうになる。腹の底から湧き出した悪寒が全身に蔓延して、鳥肌を立たせていた。

「嘘なものか。そのギアムは紛うことなく貴様の想い人の成れの果てよ」

珠優を真白が襲撃した際に捕獲したのだと、メルコールは言う。

「その男には特別に魔王の欠片を三個、憑依させてある。これまでのように痛めつけて元に戻す、というわけにはいかぬぞ」

「ど、ういう……ことっ!?」

予想外の発言を受け、再度上段に構えていた剣の刃先を男に差し向けたまま、詰問口調で聞き返してしまう。

「増幅に増幅を重ねた欲望を完全消失させるだけの斬撃を、元はただの人間である身に与えれば、どうなるか。考えるまでもあるまい？」

「そ、んなっ……」

斗真の死――最悪の結末を示唆するメルコールは、またも口端を吊り上げ、散々もったいぶった挙句に提案する。

「然るに、取るべき方法はひとつしかあるまいな」

「取るべき……方、法？」

相手の話術に引き込まれてしまっている。自覚してはいたものの、斗真を助けるための手立てが他に思い浮かばない。そんな切羽詰まった状況が、急く心を抑え込むことを拒絶させた。

「牡の欲望の大本は性欲だ。特にこの男は生来そちらの欲が多かったようでな。それを、身をもって発

著者近刊　『スレイブドール 紅目の女特務捜査官』、『戦乙女ヴァルキリー2』シリーズ、『淫舞の巫女姉妹』シリーズ、『令嬢騎士とChu!Chu!Chu!』、『プリンセスラバー！』シリーズ ほか
好評発売中！

散させてやればいい」
（それって……）
つまり、醜悪な姿に成り果てた斗真に犯されろ、と。
そう、目の前の敵は告げているのか。
「我が身を厭わぬ覚悟があるのだろう？　それとも目前の想い人を犠牲にしてでも、今すぐ俺と戦うか。好きなほうを選ぶがいい」
「……グゥェェェェ……」
床にのたうつ巨大ギアム。斗真が、苦しげにも聞こえるうめき声をぱっくりと開いた巨大口腔より吐き漏らす。
同時にひげのように生えた細めの蔦触手がこぞって蠢き、先端からぬめる汁液を天高く噴き上げた。
「う……っ」
鼻をつんざく腐った海産物を思わせる刺激臭に、反射的に眉をひそめ顔を背けてしまう。まるで斗真を忌避したかのようで、強烈な嫌悪感に襲われた。
「貴様がそのギアムと番う間、真白や他の者に手は出さん。――約束しよう」
「信じろって……言うの？　あなたを？」
到底無理な話だ。平気な顔で仲間のはずの真白を酷い目にあわせる彼との価値観の隔たりは甚だしく、善意からの申し出でないことも明白だ。
――なにを、企んでいるの？
「信じる信じぬは自由だ。ただ、その男を見捨てて俺と戦うか、救済に励むか。選べばいい」
疑問を差し挟む暇があるのか。そう言わんばかりに決断を迫る男の物言いによって、敵の真意を探る道は絶たれてしまった。
こんな時、千晶なら。あの、毅然とした戦士の鑑のような娘なら、どうするだろうか。
『犠牲ひとつで敵の首魁を倒せるなら安いものよ』
そう、冷然と決断を下すか。あるいは、この状況を逆手にとって逆転の方策を考える熟練ぶりを見せるのかもしれない。
（だけど、私にはそんな決断を下す非情さも、作戦を練るだけの経験も……ない）
できるのは「皆を守るために」。戦う理由そのものに従って行動すること。それだけだ。
「約束は……守って」
構えたままだった刃を下ろして石畳に突き刺し、抗戦の意思が今はないことを明確に示し。改めてメルコールの冷たい瞳を見据えながら、告げる。
「フッ……いいだろう」
端正な美貌を歪めた男は悠然と歩み去り、真白のすぐ右隣に設えられた革張りの椅子に着席した。そうして右手で頬杖をつき、傾けた視線を突きつけてくる。正面からすべてを見届けるつもりなのだ。
（……あの嫌な目に見られながら、するの……？）
見つめられるだけでも背筋に怖気が奔るというのに。初めての、つたない痴態を始終見られるなんて――想像するだけで羞恥心と屈辱にまみれた心が悲鳴を上げる。
「どうした、始めぬのか？」
「んぶぅぅ！」
頬杖をついていたほうの手で真白の首に繋がる鎖を引き寄せ、近づいた少女の口腔へと指を突き入れ、こね回す。
「やめてっ！　真白ちゃんにも手は出さない約束でしょう！」
「ならば、俺の気が変わらぬうちにすることだ」
悔しい――！　煮えくり返る感情を必死に封じ込めて、ようやく。床を這いずる斗真の成れの果てへと目を向ける。
深緑のずんぐりとした体躯を揺さぶり、口腔を除く全身に隙間なく生え茂る大小様々の触手を蠢かせて。まるで交合の時を待つように、「彼」はじっとその場に留まり不気味なうなりを響かせていた。
「斗真、ちゃんっ……い、今助けるからね」
二歩、三歩。たち込める臭気に眉をひそめながらギアムへと近づいた時点で、自らの脚が震えていることに気づく。目前の異形の姿が生理的嫌悪感を催すこともあったが――大部分は彼を救えなかった時の喪失感と恐怖から来る、竦みだ。
「そら。早くせねば、その欲深い男はどんどんと性欲を溜め込んでしまうぞ？」
「くっ……」
そんなことはわかっている。メルコールが真白に手を出さないか睨みを利かせながら、また一歩。
――ぶぢゅりゅるるっ！
「ふぇ……ひゃぁぅ!!　と、斗真ちゃっ……やっ！」
五歩進んだ時点で、辛抱たまらなくなったらしい異形の口ひげ部分よりの一斉噴射を目の当たりにし。とっさに身をよじってじかに浴びることだけは避けられたものの、驚きと同時に嫌悪の声を漏らしてしまった。
「ま、待って斗真ちゃん。すぐに行くっ、んぶ！　い、今行くからぁっ……う、うぅぅ……」
唇にまで飛来した汁気が、数滴。口の中に垂れて溶け入り、強い苦みが舌を焼く。初めて真白の襲撃を受けた際に味わった触手のものよりずっと濃い、一度味わったら忘れえぬ忌まわしい味わいが喉元にへばりつき、胃袋へとゆっくり、一滴ずつ。ボタ、ボタと重たい衝撃を伴って垂れ落ちる。
「んくっ……に、がい……。の、喉に絡むよぉ」
それでも極力手で拭い、すでに口内に滴った分はどうにか嚥下して、ようやく深緑ギアムの傍にまでたどり着いた。
（どれから……し、してあげたら）
正面せいぜい三十センチほど先の場所で無数の触手が刺激を求めてうねり狂い、一部はビタビタと石畳を叩いて催促を繰り返している。

ひとまずしゃがみ込み、彼に――一度は斬ってしまった巨大口腔の奥に語りかけようとした、矢先。

――べろぉっ！

「ひゃんっ！　やっ、ぁ……な、なにっ⁉」

ずんぐりボディを支える足代わりの短めの触手群。その一部が間近に迫った臀部にまで伸びてきて真下からべろり。なめ上げるなり、ざらついた表皮でしきりに尻の谷間を擦り立て始める。

（く、ぅ……うぅ、気持ち悪いっ……グチュグチュ、してっ、るぅ……！）

思わず異形の身体へと伸ばしかけていた両手で、間近にあった触手群を、しがみつくようにわし掴みにする。尻で感じる湿り気だけでも心地悪いのに、さらに両手で搾り出す形となった粘性汁が鼻梁へと飛来、付着して、漂う生臭い臭気と粘り気がいっそう濃厚なものに変化した。

（やぁ……く、臭い。くう、うぅ、鼻の中にまで、においが染みついちゃいそう……！）

鼻先にこびりついた汁を振るい落とそうと首を左右に動かせば、ボタボタとグミのような塊となった粘液が飛び散り、そのうちの数滴が胸元にこぼれる。

丘陵に沿って谷間の奥へと滑り落ちた粘液が、左右の乳房の熱気に溶かされ、肌に直接染み入ってくる――。おぞましくも歯痒く、切ない衝動の伴う想像に苛まれて、まだ苦みの残る唇を噛み締めた。

――ギシャァァァッ……！

深緑ギアムがまた、ニタリと笑う。その巨大な口腔付近にひげのように生え茂るものと比べ肉厚の触手が四、五本。尻肉を左右に割り裂きながら、こじ開けるようにしてムリムリと押し入り、薄布一枚に隔てられた尻の谷間を執拗に扱き立ててくる。

たっぷりと体液を含んだブヨブヨの幹が、閉じようとする尻肉に圧迫されるたびブチュブチュ卑しい音を立て、大量に粘液をぶちまける。

――ぬぢゅりゅぅっ！

「くふぁ……っ⁉」

尻に気を取られた隙に、別の触手に足首を掴まれた。しゃがんだ不確かな態勢ではろくに抗うこともできず、そのまま引き倒され、尻餅をつかされる。

おかげでまた、強く引っ張る形となった手の内の触手からたっぷりの粘液を浴びせかけられてしまい。

尻を這いずる群れのざらついた触れ心地と、ねっとり絡む粘性汁の感触を、嫌というほど鮮烈に受け止めてしまった。

（あ、ぁ……垂れ、て……臭いの、また入っちゃっ……んぐっ、う、んんんぅぅぅっ……）

鼻梁に若干残っていた粘液が滑り落ち、ドロリと口内へとまた滴った。強烈な苦みを仕方なく嚥下したが最後。濁液は喉粘膜にへばりつき、執拗に臭みと苦みを打ち放って存在を主張し続ける。

「慰め方を知らぬのなら教えてやるぞ」

冷たい笑みを差し浮かべたメルコールが、汁まみれとなった真白のツインテールの片方を指先でクルクル。戯れに巻き取りながら言う。「真白の身体を使って実際に性交を見せてやる」と、脅しをかけているのだ。

「んくっ……わ、かってるもんっ」

不遜と自負に満ちた青い瞳に対し、対抗心のような感情が芽生えたおかげで、逆にギアムと化した斗真に向き合う気力が生まれた。

――にゅりゅっ、ぬるるっ、ぬぢゅぢゅりゅぅ！

「ひ、っ、ぁ！　やっ、ぁ、じっと、し、してぇ、斗真ちゃぁんっ！」

名を呼ばれて歓喜したのか。尻に敷いた形の触手群が活発に蠢いては大量の湿り気をショーツに塗布してくる。ぬるま湯みたいな汁の温度が粘り気をやたらと誇張して、膨張する悪寒を全身に波及させた。

（我慢、しなきゃ。斗真ちゃんのためっ……それに、みんなを……大事な人たちを、守らなきゃ……！）

繰り返し繰り返し自分の心に言い聞かせ、歯を食い縛って異形の愛撫に耐え忍ぶ。

握っていた触手を恐る恐るまた手のひらで刺激してやれば、せがむように雄々しい脈動を響かせる。

「うぅゥ……っ！」

「と、斗真ちゃんっ⁉　ひっ……あぁぁぁぁっ！」

一瞬。愛撫に応じて、彼本来の声に近い響きが耳朶に届けられた気がした。

そうして気を取られた隙を見逃さず。あるいは相手に攻撃の意思がないことを悟ったからか。とうとう、巨大食虫花の周囲に茂るすべての触手、総勢百本余が――こぞって聖女の装束へと殺到する。

ぎゅちっ！　ぎゅっぎゅむぢぅぅぅ！

「いっ、ぁ……！　と、斗真、ちゃぁんっ……ら、乱暴に……しないでぇっ！」

細めの、鞭のようにしなる触手群。異形の口まわりに生えたそれがこれまでの緩慢さが嘘のようなスピードで胸へとよじ登り、巻きついてきた。そうしてギュウギュウと力任せに絞り立てられ、乳肉がまるで糸で縛られたハムのようにひしゃげ、たわむ。

腕もグルグル巻きに巻き取られ、指と指の間にまで細めの繊毛型触手が割り入り、レロレロと舌でなめ扱くがごとき愛撫に終始した。

「お、落ち着いてっ。するからっ！　今すぐゴシゴシっ、するからぁぁ！」

懇願に、猛る異形は答えない。

彼のためだから堪えなきゃ――。そう理解してはいても、縛られ、絞られて無残な姿を晒した自分の胸元を見つめるにつけ、惨めな想いが込み上げる。

ここまで乱暴な扱いを受けているというのに、圧力は拘束具と化した触手より染み出す粘性汁によって緩和され、痛みはほとんど感じられない。

代わりにヌルヌルと滑りながら圧迫される乳肌は

摩擦刺激を受け容れて、ざわめくような甘美に脅かされ始めていた。
指間を伝うくすぐったくも切ない小さな刺激も合わさって、甘美はもどかしさを伴う焦燥へと、すぐさま変貌する。
ぢゅにゅっ、ぢゅにゅぢゅにゅぢゅうぅぅっ！
「んひっ！　いっ、やっああ！　お、音っ、やめっ……。な、なんでっ……ぇぇっ」
濡れて張りつく衣装越し、あからさまにぷっくりと浮かび上がった乳首を、新たに群がった触手の腹の部分で左右同時にこね潰された。力の加減など知らぬかのような、乱雑で強引な愛撫。愛撫と呼ぶのもおこがましい自分勝手な摩擦刺激を浴びせかけられていながら、過剰なほど呼応した乳首はときめきながらなお隆起し。
尻の下の蠢きに脅かされる股間は、異形のものでない湿り気を湛え、小さく震えだしていた。
（おかしっ、いッ、よ、こっ、これっ……か、身体、び、敏感っ、すぎるよぉ……！）
明らかに過敏な反応を見せる自分の身体に対し、驚愕と羞恥とが均等に芽生え、快楽とともにジワジワ。指間をなめる異形の愛撫同様の執拗さとそっくり同じペースで肌の奥底にまで染み入り、浸透する。
尻餅をついた瞬間から開いたままの両脚は、尻谷に挟まる触手が幹を揺するその都度ピクピクと小刻みな痙攣を繰り返しっぱなし。
足首を掴まれ、おまけに執拗な愛撫により下腹部に力が込められない状況では股を閉じるのは容易なことではない。
（そ、それだけっ、だもん……）
決して自分の意思で閉じぬのではない。なぜだか延々、そんな自らへの言い訳を胸の内で反芻する。
異形の体液に、標的の身体を発情させるような成分が含まれていたのか？　――だが、相棒はそんなことはひとことも語らなかった。単に彼女の知らない新種が生み出されたのかもしれなかったが――。
「媚薬の類は含まれておらんぞ？」
下腹部に響く甘美な衝動の合間合間に浮かんでいた疑念は、見物する男の口から否定された。
では、なぜ。
（あっ、相手が斗真ちゃん……だから？）
隣家に住む幼馴染み。もう十年以上の付き合いで、昔からよくスカートめくりの標的にされもした。スケベでだらしなくて――でも馬鹿正直なところがたまらなく好ましい。そんな彼が相手だから、身体が必要以上に感応してしまっているのか。だとすれば嬉しい反面、戦士としては情けなくもあった。
「ふふ……ずいぶんと馴れたものよな」
そしてメルコールの重たい声音を聞き入れた瞬間。もっとも考えたくなかった、意図的に選択肢から外そうとしていた疑いが、とうとう脳裏をかすめる。
――すでに一度。異形に嬲られる快楽を味わい覚えてしまった身体が、肉欲を貪り食らうべく盛っているのではないか。
――ぎゅむぅぅっ、ぎゅっ、ぎゅちちぃぃぃっ！
「ひぐっ……んっ！　ふぅぅ……！　ま、って斗真ちゃっ……やっああ、胸っ、ちぎれちゃうよぉ！」
ひしゃげた両乳の谷間に潜った触手群が衣装を噛み食い散らかして、乳肌を露出させていった。
（む、胸っ、斗真ちゃんに見られちゃう……！）
強めに締め潰されるたびに乳房の奥底まで轟く、爛れた喜悦。それが斗真のもたらした快楽であると錯覚したが最後。恋しい想いが増長して羞恥を押し流し、腰はゆらゆら。股を開きパンツ丸見えのはしたない姿を晒しながら、徐々に躍りだす。
「いっひゃ、ァ……っ⁉　やっ、み、見ないでぇ！」
メルコールの嫌悪感をもたらす視線は常時感じていた。だが、不意に振り向けた視界の端にこちらを侮蔑するように、それでいて妙に艶かしい目つきで射る真白の瞳を捉えた途端。
――ぐぎゅにゅぢゅぶうううっ！
両拳を固く握り締めてしまい、押し潰された格好の繊毛触手群から、こぞって噴き出た粘性汁を手のひらで受け止める。
「やっ、ァ……！」
ニヂャニヂャと指の間で糸引く感触が心地悪く、反面手のひらを勢いよく打ち叩かれるのは面映くて――知らず知らずのうちに、腰が揺らぐ。
霞みかけの視線の先では、真白がより盛大に腰を振っていた。
「くぅ……っ、あ！　出るっ……あはははっ！　壊れた蛇口みたいにっ、白いの出っぱなしぃぃっ！」
まるで何か得体の知れないものに取り憑かれたみたいに、嗤っている。ギラギラと憎悪の意志を宿した紅の瞳だけがよけいに浮き彫りとなって、いっそう凄惨なイメージを小柄な肢体に備えさせていた。
その彼女の股間でヒクヒクと脈動を続ける、肉の棒。真白の胸元近くにまで隆々と反り立った触手ペニスもまた、憎悪の視線との対比により、ただでさえ強烈な存在感を強めている。
生唾を飲む音が耳朶を焼く。その音を発したのは、真白と自分、果たしてどちらの喉だったか。
――べちんっ！　ぶりゅびゅりゅるうっ！
「ひきゃあああぁぁっ！」
生唾の所在など気に留めていられぬほどに、轟く真白の声は甘く、蠱惑的な響きで耳朶へと突き刺さる。意識は自然と跳ね回る肉の棒と、それに振り回される真白の嬌声に惹き寄せられていた。
（う、うそ。あ、あんなにっ……⁉）
男性の生殖器を模したとメルコールは言っていたが――本物も今目にしているのと同じくらい忙しなく動くものなのか。

ガチガチに硬くなっているように思える幹や、エラの張った先端の傘の根元を真白の手がしきりにさすっているのは、痛みを和らげるため。それとも、快感を得る、ため――？

（き、気持ちいいわけないっ。そんなはず……っ）

かぶりを振って、浮かんだ予想を否定する。

だが、目の前の真白のふやけた表情は。だらしなく開いた口元からよだれをこぼして、腰を前後左右に振りたくる状況を「快感」以外のどういう感情で説明できるというのか。

幼いころに両親と死別したため、父親のものですら目にしたことはなかった。擬似とはいえ初めて目撃する異性の生殖器に目を奪われ、思考を奪われる。

見つめるほどに意識惹かれ、考えるほどに目が離せない。ループする衝動に呑まれて、いっとき我が身の状況すら忘れ、魅入られてしまいそうになる。

「ふ、ぅあっ……!?　斗真ちゃっ、んっ、んぅっ、ふっ、うぅ……！　恥ずかしっ、よォ……っ！」

はしたない自分を自覚した途端。爆発的に膨張した羞恥心が皮肉にも肉欲のスパイスとなり、深緑の触手に虐められている腰の振りを、より激しいものへと変えてしまう。

「恥ずかしいとほざく割に、娼婦の如き腰使いだな」

男の嘲りの声が、情欲に濡れそぼちもろくなっていた心根に無慈悲に刃を突き立て、斬り裂いてゆく。

「ま、しろちゃっ、んっんあぁぁ……！」

軽蔑されてしまった。同じ女性に、欲情されている。茹った脳裏に浮かぶいずれの情報も、被虐的な感情となって触手とともに胸を締めつけては、ドクドクと雪崩のような快楽に成り代わってへその下辺りに溜まり込む。

子宮のうずきに耐えきれず尻を揺するたび、尻谷を這いずる触手群がこぞって蠢動。股間の刺激を堪えれば尻のほうが、逆に尻への刺激を堪えれば股で。交互に延々繰り返される肉快楽の連鎖に、腰振りダンスの激しさがさらに増す。

「ぁふっ、う……っ、あぁひっ……！」

――ギゥゥ……エェェ！

また、嬉しがるように深緑のギアムが啼いた。

そして彼の胴の中央にぽっかりと、まるでブラックホールのように開いた漆黒の口腔より――べろり。全体にイボイボ突起をびっしり生え茂らせた赤黒い物体。優に二メートルはあるだろう長大な舌を、見せつけるかのようにゆっくり取り出してみせた。

「な、なに、するの……？」

一瞬肉の悦びも周囲の目も忘れ、未知への恐怖にまみれた声音で問いかける。

物言わぬ彼は鋭い歯の生えた口をニィと歪めて、その巨大赤舌を震わせて。

――ぐぢゅっ！　にゅぢにゅぢゅぅっ！

舌というよりも巨大で肉厚な触手といった面持ちのそれに対し、嫌悪を抱く暇すら与えられなかった。すばやく、かつて彼の手がしたようにスカートをめくり上げられ、汁まみれで透ける割れ目を露わにされる。直後、赤舌は純白ショーツの前面に、なめ上げるようにして先端を接地させた。

「ひっ!?　っ……ぁ！　ダ、ダメ、汚いよぉっ！」

触れられた途端、下の口は震え「吸い出して」と言わんばかりにひと際熱い蜜汁を吐き出した。

（ふぅあぁぁっ……！　と、斗真ちゃんのベロが、わたしのあっ……アソコに……いぃっ）

まぶた裏に焼きつく幼馴染みの彼の姿が、乳房をギュウギュウ締め上げられるたび、いっそう鮮烈に浮き上がる。

その笑顔を意識するほどに、股肉の痙攣は小刻みに、より間隔を狭めてはブピブピと、浅ましい音色を響かせて下着に蜜を噴きつけていった。

――にゅぶっ、ぢゅぶぶぢゅっ！　ぬぢゅぶぶ！

巨大舌の全体に生え揃った突起が、ゴリゴリと股肉を擦るたび。濡れて股肉に張りつく下着一枚隔て、異形の粘液と人の愛蜜とが泡立ちながら混ざり合う。

「やっ、そ、そこも汚っ……ぃっ、ふァァ……！」

追い討ちをかけるように尻谷の触手のうちの一本がにおいを嗅ぎつけ、しわの寄るすぼまりへとたどり着き。よじれたショーツの脇から執拗に頭部を押しつけてきて――行き場をなくした肉の衝動が、子宮に集中して押し寄せる。

「ふぁっ！　あっ、あく、ぅぅっ……は、ずかしいよ、斗真ちゃっ、あっあぁぁひぃぃんッッ！」

次第にメルコールの動向をうかがう余力は失せ消え、堪えきれなくなった嬌声を張り上げる。開きっぱなしの股間の前後を異形の身体の一部にほぼ全面押し包まれた状態でガクガクと、膝と腰と首とが無様に揺らぐ。

ぐりゅ……っ、にぢゅっぢゅちゅぅぅっ！

恥辱に咽ぶ心を表してイヤらしく尖り勃ったふたつの乳頭を、競うように代わる代わる触手がこねくり、すり潰し、かじりついては吸い立てた。

「いっあぁぁぁ！　痛っ、ぁいっ……ら、乱暴にしないでえぇっ……！」

イヤイヤとかぶりを振る。痛いと口走ったのは、自分自身をごまかすための方便だ。ただ、ズクズクと乳腺を伝い響く痒みとも感激ともつかぬ狂おしく激しい衝動を恐れ、嘘をついた。

突起だらけの巨大な赤舌がショーツの前面を、その内に隠れた肉の割れ目をすり潰す。

――ぐぢゅっぢゅびゅっぶぢゅぶりゅりゅうっ！

「おっ、音っ響かせなっ、でっ……くぅ、ぅんっ！　ひあっあァァ……ッ！」

理性と肉悦楽の狭間でさ迷い、煩悶するさなか。真白の蔑みの視線が、また瞳の中に映り込む。

『変態』。触手ペニスの快感に瞳蕩かせながら、彼

換身の騎士の運命は――？
激動の最終回!!
換身の騎士
アルバート
淫靡な魔女と入れ替わった肉体
最終話 換身の騎士
小説 NOVEL／狩野景（かりのけい）
挿絵 ILLUSTRATION／緑木邑（みどりぎむら）

「ひぃいうううっ!!　エリ……クッ！　わ、私は、お前の兄ッ、だぞっ、そ、そんなものを、膣内にィッ!!　やめ……ろおッ！」

男たちに幾本ものペニスをなすり付けられ、饐えた異臭に鼻腔を満たされながら、血を分けた弟に膣を散々犯され精液を中へと放たれた。

「くぅッ、あが、あぁ……。ゆ、夢か……」

眠りにつけば幾度となく繰り返される悪夢に、ネオン王国騎士、アルベルト・メリンは悩ましい悲鳴を上げて飛び起きた。本来出席するはずだった王女主催の舞踏会に現れなかった〝彼女〟の身を案じ、捜索部隊を出動させてくれた騎士団長によって、偽の舞踏会より救い出されたのはもう先週のこと。それでもまだ夜ごと悪夢にうなされる始末だった。

いっそなにもかも最初からが夢であってくれればいいのに、肉体は魔性の魅惑を醸し出す妖艶な女のままだった。寝間着の胸元から溢れる豊満という言葉さえ控えめに思える乳房に指を這わせると、感電のような刺激が心地よく走り抜ける。

「ん……、はあ……」

上擦った喘ぎと共に、細く括れた腰が艶っぽくくねる。乳房に負けじと撓わに肉付きを増した桃型の尻房を、男の下穿きと構造からして違うデルタ型の極端に面積が少ない布地に包む。そのショーツの下、男根が消え失せ恥丘から肉厚な陰唇がなだらかな膨らみを浮き立たせるだけとなった股間の深い部分から、勃起とは異質な切なさの強い疼きが熱く湿る感触を生み出して広がってゆく。

「これ……が、だめ、なのだ……。分かってはいるのだが……。我慢、できなくて……」

男だったときの鍛え上げた硬い胸板とは全く正反対の柔らかすぎる肉房へ指を食い込ませ、吐息を荒くしながら、シーツの下から手のひらに収まる程度の平たい小箱を取り出す。

それは騎士団に魔女として捕らえられたとき、辱めを与えるために穿かされた張り型つき下着。

その膣内と直腸内で自在に大きさを変えながら振動と共にうねって、あられもない痴態をさらけ出させたバイブの遠隔操作機であった。魔導の力で施錠された下着部分は、比較的簡単に脱がすことができたが、その前後の穴に埋まるバイブ部分には高度な魔術が掛けられ、二穴から抜けず中に残っている。

外すには本来の持ち主である魔女ナスタロヴィカを捕らえ、解除するよう命じなければならない。

アルベルトはその遠隔操作機の二つ並ぶ大きなツマミをそっと右側に回した。途端、

「ふうう、うう、あ、あああぁっ!!」

ヴァギナと直腸を押し広げて、いままで入っている感触すらなかった二本のバイブがそれぞれに大きさを増した。

それと同時に激しさはないが重々しい振動が、ぐねぐねと捩る動きを加えて前後の秘穴壁を震わせる。

「くあぁ、は……あぁ、イ、イィ……」

女の身体になって、数えきれないほどの男たちに膣とアナルと散々犯され、いやというほど屈辱を味わわされた。この張り型にも衆人環視の中で、耐えがたい激感を与えられあられもない痴態を披露させられた。それだというのに、鋭敏な肉穴を蹂躙される狂おしい快感が忘れられない。

魔女を捕らえるときまで外せないのなら、せめて誰かに悪戯されないようにと操作機を渡してもらえたのだが、〝彼女〟はあろうことか自慰に使っていた。

「いけない、このような……ことぉ。あぁ、しかし……、今回、だけ……んあっ!!」

毎回そう言いつつ、すぐに疼きが堪えられなくなって、リモコンのダイヤルを回してしまう。

名門の貴族でありながら質素な生活を常として、王国に尽くすべく修行を続けてきた禁欲の青年が、淫乱な女体で味わう性の快感に抗いきれなかった。

「んんっ！　ふはっ、あっ、ひぅッ!!　イッ、あ、アァッ！　はぁあぁぁ……ふぅううんッ!!」

直腸の奥と膣壁を間断なく振動で掻き乱され、浮き立つ歓喜が脳裏を染め甘い喘ぎを絞り出す。

ベッドの上に身を起こし、腰から下をシーツの中に隠したまま、汗ばんで赤みのさした顔を艶めかしく強張らせ、ビクンッ、ビクッと痙攣を繰り返す。

ブ〜ン、ブブブブブブッ、とバイブが奏でる魔法の駆動音にぬちゃ、くちゅ、と量を増して滲み出た愛液の音色が悩ましく入り混じる。

両の乳房を両手で大胆に揉み拉げ、乳首を指先で弾いては甘美の閃光に目眩を起こす。

「だめ……だ、ぁ……で、も、もう少しで、イケるッ!!　あ、こんなこと、ダ……ああっ、私はッ」

一定の振動に慣れるとすぐに疼きが情欲を急き立て、リモコンの目盛りを大きくさせる。

いつしか肛門も膣も、ぎっちりと太い硬竿が満ちて、窮屈な筒襞を抉られる歓喜に追い詰められる。

浅ましい自慰に耽る自分へと嫌悪を覚えながらも、際限なく昂る情欲に突き動かされ、乳房を弄んでいた手を片方、ショーツの下へ潜り込ませる。

登場人物紹介

アルベルト・メリン

ネオン王国白鷲騎士団に所属する騎士だったが、魔女の策謀により身体を入れ替えられてしまう。

ナスタロヴィカ

他人の肉体に乗り換えてゆくことで長い年月を生きてきた魔女。享楽的で飽きっぽい性格。

エリク

アルベルトの実弟。女体化したアルベルトの正体を知らず、兄の仇と思い込んでアルベルトを犯してしまう。

前号までのあらすじ

アルベルトは苦戦の末に人々に害をなす魔女・ナスタロヴィカを捕らえるが、不意を突かれて身体を入れ替えられてしまう。かつての上司のとりなしで王国に戻るものの、それを信じようとしない者たちにより、そのカラダを弄ばれてしまう。その中には、実の弟でもあるエリクもいた。禁忌を犯した背徳感を感じつつ、アルベルトはさらに堕ちていく……。

張り型がぐぽぐぽ愛液を泡立てる股間。男根と比べものにならないほどちっぽけなのに、感度はその差以上に強烈な肉豆粒へとそっと指先を近づける。
「アルベルト、もう起床したかな？」
その寸前、年若き騎士団長の少年の瑞々しさを残す凛とした声が、ノックと共に呼びかけてきた。
「ひうっ！　は、はいっ!!　起きへ、いまひゅッ！」
大慌てで振動と膨張を弱める方へダイヤルを回し、シーツの下にリモコンを隠す。それでも迸る官能の喘ぎに、声が破廉恥に震えて裏返る。顔に浮かんだ玉の汗を急いで拭うと、雪のように白い髪を背中で三つ編みに纏める、美少年めいた容姿の騎士団長ユージーン・ファウスト・ディオが入室してきた。
「ご、ご無礼を……ッ」
上官がもうすでに起床して身支度を整えているというのに、自分はまだ寝間着のままで寝床の中だ。
（王国の騎士ともあろうものが、なんたる自堕落ッ!!　――く、う……、な、なに……？）
あまりにも弛んだ態度を恥じながらベッドから飛び起きようとするが、萎えた足に力が戻らない。
いやそれ以前に、膣と肛門の中を乱す蠱惑の振動が、微弱ではあるが持続していた。
（は……ぅ、そん、な……）
リモコンを隠すときに急ぐ余り、ダイヤルを回しきれていなかったらしい。非常に弱くではあるが、散々刺激を与えて過敏になった粘膜部に刺激が与え続けられる。しかも敬愛する上官の目の前。
「ああ、そのままで構わない。まだ身体に慣れていないというのに、偽の舞踏会でも酷い目に遭ったのだから」
幸いなことに、ベッドから出ようとする女体化の騎士をユージーンが制する。シーツの下のリモコンを探すが、隠したと思った場所にない。
（くっ、ど、どこに……？）

もそもそと探っていると、不審に思われてしまう。仕方なく諦め平静を装うアルベルトに、騎士団長は将器を備えた凛々しい顔立ちで言葉を続ける。
「とはいえ、これから休んでもらっているわけにはいかなくなるのだが」
「そ、それは……んぅ、ど……どういう……ふぁ」
ぬめる襞を微かに震わせる刺激が、妙なもどかしさをもたらす。こんな状況で強い刺激など与えられたら死んだ方がましなほどの痴態を晒すことになるというのに、女陰と肛門の両方から物欲しげな疼きが蓄積して尻をくねらせる。
意識を集中しないとユージーンの言葉を理解しないまま聞き流してしまいそうだ。
強張り勃った乳首は寝間着の上に浮き出ていないだろうか？　淫らに緩みそうになる表情を必死に引き締めると、また甘い牝臭の強い汗が額から滲み出してくる。刺激自体はそれほど大したことがないのに無視できない。微弱な刺激が余計に、肉体の欲求を煽り立ててそれ以上を求めてしまう。
「く……ぅ……ッ」
膣奥から熱汁が溢れ出て、後ろの菊皺がひゅわんと綻び広がる。悩ましい喘ぎを零しそうになり、あわやというところで唇を噛んで押し止めた。ホッとしたその刹那、ユージーンが衝撃的な事件を伝える。
「魔女ナスタロヴィカが、君から奪った身体で活動を始めた。国境近くの町が奴の召喚した妖魔によって壊滅したとの報が、昨晩に届いたばかりだ」
「――なっ、なんですってっ！　魔女がっ、私の姿でっ!?　そ、そんな……ッ!!　ふあっ！」
恐れていた事態に全身の血液が沸騰した。二穴のもどかしい疼きも忘れて、ベッドから飛び出る。
「おっと」
しかし脱力した脚がへたり込みそうになった。その身体を騎士団長のしなやかな腕が抱き留める。

「ひあっ！　も、申し訳、ございま……んあっ」
驚いて飛び退こうとするが萎えた脚では踏ん張ることもできない。乳房の撓わな膨らみを彼の胸板にぎゅっと押しつけてますますしなだれかかってしまう。それを支える騎士団長の腕に一層力が籠もり、ドキドキと胸が高鳴る。
（ああっ、ユージーン閣下が私を、支えて……）
腰に回された腕が頼もしい。尻をそっと支える手のひらが、柔房にめり込んで心地よい。いくら敬愛する上官とは言え相手は男。なのに、妙に胸が弾むのはなぜだろう？　肉体は女に変えられ、女の感覚に困惑させられている最中だが、心は男のままだというのに。
「まだ本調子ではないようだな。しかし猶予は与えられそうにないぞ」
軽々と運ばれ、ベッドの縁に腰掛けさせられる。離れた彼の腕の感触を名残惜しく感じていると、心の揺らぎにつけいるように、二穴バイブの微振動が脳裏を熱く染める。
「君の姿をした魔女襲来の報告に加え、アリシア姫と私の訴えによって、君の肉体が魔女と交換されたという事実を国王陛下が認めて下さった。配下に下った魔女としてではなく、名門メリン家の嫡男としてネオン王国白鷺騎士団百人長の地位が復権されたのだぞ、アルベルト」
「――!!　陛下……が、私を信じて下さった……？　私を、再び百人長……に……」
魔女を捕らえ元の身体へと戻るまで、いまの状態のままだと思っていた。喜ばしい。しかしこの不名誉な姿のままアルベルト・メリンを名乗ってよいものなのか複雑な心情になる。
そんな最中にも、尻穴と膣穴を同時に微震されるもどかしい疼きに脳裏が乱される。
表情を引き締めることも忘れ白髪の美貌にぼんや

著者近況　パンツ履き替えようと片足を上げたと途端、腰に激痛が！　ぎっくり腰でした。少しでも身動きすると痛みが走るので、しばらくの間ちんこ丸出しのまま四つん這いでうめいていました。

りと眼差しを注ぐ女体化騎士へと、ユージーンは乱れを知らぬ冷静な声で告げた。

「その国王陛下直々の命令だ。アルベルト・メリン百人長。我々白鷺騎士団は全力を以て魔女を討伐し、君の肉体を奪還することとなった。もちろん、君も隊を率いて出陣してもらうぞ」

「は、はぃっ」

騎士団長に手がぽんと軽く肩を叩く。それだけでビクビクっと身が震えて、太股に流れ伝うほど愛液が女陰から溢れる。アルベルトは飛びそうになる意識を必死につなぎ止め、返事を絞り出した。

周辺諸国との戦において連戦連勝を誇る白鷺騎士団主力部隊を投入しての魔女討伐に、見送りの民衆が大通りを埋め尽くす。名将ユージーン・ファウスト・ディオの傍らに轡を並べる女騎士の艶姿に、その無数の視線が好奇を注いでいた。

「あれが魔女と身体を換えられた騎士さんか？」

「へえ、邪悪な魔女っていうからどんな醜い婆なのかと思ったら、すごい美人じゃないか」

「あの騎士って、この前の御前試合で優勝したメリン家の御嫡男だろ？　そんな若い青年があんな色気たっぷりの女の身体なんかにされて……色々と悩ましいことだろうなぁ。へっへっへ」

「それにしてもあの鎧。女になった色気たっぷりな身体をぜひ見てくれっていわんばかりじゃないか」

「く～、中身が男だって分かっててもあんなの見せつけられるとたまんねえぜ！」

自分がアルベルト・メリンであることが証明されたと同時に、姿を魔女と交換された騎士の話は瞬く間に王都中へ広がった。

歓声に紛れて飛び交う噂話が馬上のアルベルトの耳に届いてくる。なにを言われようと、嘲られようとそれは自業自得。魔女討伐の任務に失敗し、部下を全滅させた報いなのだから仕方がない。

それでもこの扇情的な女体を更に際立たせるような、鎧へと注がれる男たちの好色な眼差しは、精神的には男である純朴な青年騎士にとって耐えがたい感覚をもたらしていた。

「すまないな。急なことだったので正式な鎧の制作が間に合わなくて。その身体が元々身につけていた魔女の鎧を、改造するしかなかったのだよ」

「い、いえ、このように白鷺騎士団の意匠をあしらった鎧で出陣できるだけでもありがたいことです」

撓わに実った乳房と尻が、男の体型に合わせて作られた鎧には収まりきらない。その上非力な女の体力では、重すぎてまともに身動き取れなくなる。

胸元と股間を扇情的に際立たせ、乳房や腹部を含めた腰回り、太腿までも大胆に露出させた魔女鎧はしかし、軽量であらゆる動作を邪魔せず、さらに魔女の肉体から滲み出る魔導の力に反応して、露出度の高さからは想像もつかない防御力を発揮した。

元々の黒から白装騎士団の純白と黄金色に染め直され、形状も華麗な意匠へと作り変えられてはいるが、露出度の高さだけはどうにもならない。

（民衆は仕方ないとして、隊の者たちの注目まで集めてしまうのは困ったものだな）

新たに編成されたアルベルト隊は、入団して間もない若い騎兵士がほとんどだった。

その彼らの目に、乳房と尻がひときわ美麗で豊かな上、腰が細く締まった蠱惑のプロポーションをした、馬の尾のように纏めた長い黒髪をなびかせる絶世の美女の姿は、目を奪われるなという方が酷である。

こうして馬を進める間にも、後に続く隊列から粘り着くような熱烈な視線を感じる。

しかもまさに真後ろ、ユージーン直々にアルベルトの副官として任命された弟エリクの眼差しが、間近から尻房、腰の括れ、乳当てを止める背中からうなじと何度も往復して這い回るのが分かった。

（く……、エリクまで……）

生真面目な性格なため、いくら妖艶な魔女の姿に変えられていようとも実の兄へと邪な視線を注ぐ行為を恥ずべきことと感じるのだろう。何度も止めようと目を逸らす気配があったのだが……。

つい先日、この魔女の肉体を兄の精神が宿っていると知らずに罵倒し辱め、犯してしまった。そのときの興奮がまだ年若く誘惑に屈しがたい心を揺るがし、欲望に従わせている。

（あ、あれは、仕方のない事故なのだ……。私を陥れようとした者たちの仕組んだ罠が原因の……。エ、エリクともすでに和解を終えて、あのことは互いに忘れると決めたのだから……。ああ、なのに……）

そしてまた実の弟に情欲の視線を注がれるアルベルト自身も、次第に尻へと集中してくる熱帯びた眼差しに、何度も彼にその尻を平手で叩かれて、罵倒と共に膣穴を穿られた感覚が、進軍の間中アルベルトの美肉を悩ましく火照らせ続けた。

目的地に近づくに連れて白鷺騎士団は街道を逸れて、森の中を小部隊に分かれ進軍した。

夕暮れが迫る頃、アルベルトの隊は鬱蒼と茂る木立に紛れるように夜営の用意を整えた。

魔女、いやいまは若き騎士の姿をした魔人ナスタロヴィカが占領する町へと斥候が放たれ、距離を置いて陣を敷く各部隊を伝令が行き交う。

『斥候の報告を待って今後の作戦を決める。状況によっては夜襲もあり得るので、いまのうちに十分な休息を取っておいてくれ』

ユージーンより全軍に向けて放たれた指令を受け、アルベルトの隊も警戒は緩めぬまま敵に気取られぬよう火を使わぬ食事を取り交代で身体を休める。

元の身体のときならば、他の兵士と共に干し肉と

著者近刊　『目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた1～2』『ピルグリムメイデンⅠ～Ⅲ』『クールに熱愛っ！ 恋する完璧少女』『黄昏のワルキューレ 恥辱の戦乙女』『みっこみこ！ 誰にしようか神様の言うとおり』ほか　好評発売中！

固いパンを水で流し込みながら軽口を交わし合ったアルベルトだが、今回ばかりは天幕の中に一人籠もって行軍に音を上げる女の身体を嘆いていた。
「この身体は、馬にも乗り慣れていないのか……」
革製の鎧が際どく局所だけを包み隠す股間。陰茎も睾丸も失せて陰核を始めとする鋭敏な器官が集中した陰裂へと、馬が歩を進める度に振動が伝わっていたのだ。
注がれる劣情の眼差しに対するのと同様表情を無にして堪えていたが、身体の方はしっかりと反応を示していた。腰鎧の留め具を緩め、股当てを捲る。
「はう……っ」
途端に甘酸っぱく熟成された濃厚な牝臭が溢れかえり、たまらず噎せそうになった。
恐る恐る指を差し入れ、女陰に沿って這わせる。
「くっうぅ……なんという、有様に……ッ」
下穿きの内側は馬上にいる間絶え間なく溢れ続けた膣液にまみれていた。火照る体温に水分が蒸発し、濃縮されたためねっとりとした粘りが強くなり、布地にも肌にもたっぷりとこびりついている。
「ん……ッ、ふぅ……あぁ……」
蒸れてふやけた秘花弁がむず痒い。淫裂に指をめり込ませて掻き穿ると脱力の快感が膝を震わせ、踏ん張ろうとした脚ががに股に開き、腰がへっぴり腰に沈む。前屈みになった胸で乳房も重力に従い、胸当てを砲弾型にたわませる。
女体の柔軟な変化に追従してしかも剛性を失わない魔鎧に感心する余裕もなく、潤んだ瞳で吐息を熱くし、美貌を悩ましげに崩す。
「あ、あぁ……。んっ。こんなに、たくさん……」
女陰を刮げた指先に、溶けたゼリーのようになった濃厚な膣液がたっぷりとこびりついている。
見る見るうちに流れ落ちて、指全体を包み手のひらにまで広がるねとねとの液体が、刺激に反応して股ぐらに開いた淫靡な穴から溢れ出てしまった。望みもしないのにたわいのない振動に快楽を感じて勝手に破廉恥な体液を垂れ流す女の身体に、何度味わったか分からない当惑をまた覚える。
「とにかく、なにかで拭かなくては……」
手拭いの布を取り出そうと手荷物を探る。
「う……。ン……」
その中に、こっそりと忍ばせた小さな箱形の装置に、思わず生唾を飲む。遠征ではなく国内の任務で余分な持ち物は置いてきたというのに、膣と肛門内に仕込まれた張り型を操作する遠隔装置を持ってきてしまっていた。
「こ、これは……。私の手元にないと、万が一誰かの手に渡ったら、大変だから……」
言い訳にもならないことを呆然と呟く。
「このようなもの、二度と……。それにいまは、こんなに汁が滲んで過敏になっているのだから……」
そのくせ指先がすでにダイヤルを摘んでいた。息が荒くなり頬が火照る。身体をこんな淫乱な女体へと変えた憎い敵を討伐する任務の最中、不謹慎にもほどがある。ぐっちょりと湿った股当てへと更に熱々の官能汁が溢れ出た。それでも理性を振り絞って、リモコンのダイヤルから指を離す。その刹那、
「あ、兄上……」
天幕の外から、緊張に上擦った弟の声が呼びかけてきた。
「エ、エリクか⁉」
ちょっと待てというよりも早く、まだあどけなさを残す少年が、真新しい鎧姿でつんのめるように入ってきてしまう。自分以上に生真面目なのだが、そそっかしく感情的になりやすいのが玉に瑕。そんなところも可愛げがある弟に顔を綻ばせつつ、しまいそびれた張り型の遠隔装置を後ろ手に隠した。
「どうした、初陣で落ち着かないのか？　しかしいまのうちに身体を休めておかないと、いざというときに力が出ないぞ」
魔女と交換されたこの身体を、兄の仇としてエリクに辱められた。そのことは仕方がない事故として、互いの記憶の底に封じ込めようと約束を交わしたのだが、まだ感触まではっきりと残っている狂おしい経験を簡単に忘れられるわけがない。
それが証拠に、露出度の高い女鎧を纏い、括れた細腰はもちろん豊満な乳房や尻まで半露出させている艶姿に、エリクの顔が真っ赤だ。何度も逸らそうとするがすぐに胸元や股間を凝視する彼の視線に、アルベルトの頬まで熱くなってくる。
（女の肉体に興味を持つ年頃になったのだな……。エリクが、このような目で私を見るなんて……）
男がさりげなさを装いつつ女の身体を盗み見るものだというのは、自分が女体となってはっきりと思い知った。そんな駆け引きも使えず、興味を抑えきれぬ様子で直視してしまう弟の愚直さに、彼の手で尻を何度も叩かれた痛みを思い出す。ヴァギナを押し広げる極太に、子宮を激しく突き上げられる衝撃がたまらなかった。実の弟に犯される禁断の思いと後ろめたさが、その快感を何倍にも増幅していた。
ふと脳裏を官能に占められ、だらしなく綻びそうになる美貌を慌てて引き締める。疼く股間を戒めるようにぐっと太腿に力を込めて、ぬるぬるを増しゆく股当ての内側から意識を逸らした。
「しょ、食事はきちんと取ったのか？　緊張して食欲がないとは思うが、一度戦闘が始まれば次はいつ食べられるのか分からないから、無理にでも……」
自分も実戦経験が豊富ではない。しかも本格的な初陣に等しい魔女討伐では大敗を喫した上に無様にも女の身体にされ生き恥を晒している。
それでも不名誉な兄の雪辱戦ともいえる作戦に志願してくれた可愛い弟が無事に初陣を飾れることを

願って世話を焼いてしまう。
「ち、違うのです、兄上……。そ、その……実は」
だがエリクは兄の言葉を上擦る声で遮った。アルベルトが歩み寄るほどに、顔の赤らみを増して落ち着きを失う。なにか重大な用件がありそうなのだが言い出せずに何度も口籠もる。
「どうした？　兄弟なのだからいまさら気をつかうこともないだろう。遠慮せず言ってみろ」
安心させようと笑顔を浮かべるのだが、いまの美貌では余計に弟を狼狽えさせるだけだ。その自覚もなくますます間近へと進み出て、小首を傾げる。
男の姿であったときは弟よりも長身だったが、いまの身体では少し低いくらいだ。自然と上目遣いになって無自覚な魅惑を振りまき、エリクの赤面を破裂しそうなほど追い詰める。
「あ、あの……や、やはり、いいですっ！」
それでも言い出すことができず、弟が回れ右して飛び出していこうとする。
「お、おい、待て！　ああっ!!」
その手を取って引き留めようとしてよろけた。男であったときは手もなくあしらった弟の力に、非力な女体が易々と振り回されてしまったのだ。
「あ、兄上ッ！」
振り払おうとしたわけでなくただ腕を掴まれたまま普通に天幕を出ようとしただけなのだが、甲高い声を上げて転びそうになる兄にエリクが振り返った。
「危ない！　うわっ!!」
「――ひゃっ！」
慌てて抱き留めようとして、柔らかく華奢な体つきに驚く。結果、弟までもが足をもつれさせ共に絡み合いながら転倒した。
「ッッ……。だ、大丈夫か、エリク」
弟を下敷きにのし掛かる形となってしまい、アルベルトが上体を起こす。
「え……？　あ、大丈夫、です。兄上こそ……」
弟の身を案じるが、本人は上の空だ。顔が茹で上がったように赤く染まっている。
弾力の尻をむっちり乗せて両脚を崩し、腿の辺りにとんび座りに跨がる感触が彼を混乱させているとも知らず、無意識の妖艶な笑顔で上から覗き込む。
「おっと、すまない。重かったな。いまどくから」
恐らくは全然重くなどない。むしろたおやかな軽さが純朴な少年騎士を悩乱させている。露出の高い鎧を纏う爆乳を砲弾型に揺らす前傾姿勢で、立ち上がろうと弟の身体になんの気なしに手を突く。
「くぁああっ！」
「えっ!?　あ、あ……あぁッ!!」
突如上がった切羽詰まる悲鳴と、手のひらに感じた鋼のように硬く、それでいて力強い弾力を有した独特の感触に女体化騎士の心臓が跳ねた。
「エリク……お、お前……!?」
理性が手を放せと命じている。しかしアルベルトはその硬い弾力の異物をしっかりと握り締め、溢れる生唾を飲み込んだ。
（ふ、太い……ッ。こんな大きくっ。ガチガチで、脈打って……。いまにも、弾けそうじゃないか!!）
エリクの股間。鎧の腰当てを押し上げる勢いで、陰茎が異様なほどの充血に勃ち強張っていた。
「ああっ、触らないで、下さいッ!!　兄上っ！」
根本から亀頭の先まで形状と感触を確かめるようにまんべんなく握るアルベルトに、弟が恥じらいの声を震わせ懇願した。
（こ、これが……あのとき、私の膣内に……。ッ、な、なにを思い出しているのだ、私はッ。あれは、誤解だったのだから、もう忘れることにしたはず！）
偽りの舞踏会で牝穴を満たした弟の逞しい感触を思い出し疼きが込み上げるが、忌まわしい記憶として押し殺す。はね除けて起き上がることもできるだろうに、エリクは女の身体のあまりの非力さと華奢さを思い知り、誤って壊してしまうのを恐れるかのように、女体化兄に跨がられたまま寝そべり続ける。
その無抵抗な弟に、アルベルトは頬を熱く上気させ息を荒く弾ませながら問いかけてきた。
「も、もしかして……私のこの、身体を見て、こうなってしまったのか？」
指が貼り付いてしまったかのようにペニスを握り続けている。角度を増して立ち上がってくる竿幹を煽るようにズボンの上から上下に扱いて撫で回す。
「も、申し訳ございません！　兄上に、失礼とは思いながら、どうしても目がっ。そ、その姿を見ていると、抑えられず、こうなってしまって。で、ですから、そのように触るのを、やめ……はぅうッ！」
アルベルトに詫びながら怒張の脈打ちが激しさを増す。それでも愛撫を拒んで自制しようと歯を食いしばる弟だが、女体化の騎士は彼の剛直を衣服の下から引っ張り出してしまった。
「あはあぁ……っ!!」
ぶるんとカウパーの雫を飛び散らせて元気よく跳ねる怒張は、赤銅色に充血し幾本もの青筋を節くれ立った幹に浮き上がらせて脈打っていた。
大きくエラを張り出させた流線型の亀頭から止めどなくぬめった汁が溢れ出し、糸を引いて滴る。
（こんなに、なったら、辛いだろう……）
元々は男だったからこそ、苦しみが分かる。
けれども怒張を凝視する身体は女としての劣情に昂り、下腹の奥を切なく疼かせて膣穴を熱い液汁で満たす。男根が蒸れて発酵した魚介臭い香りが鼻腔になだれ込むと、脳裏がぼんやりと霞み撓わな胸の奥が締め付けられるように切なくなった。
「こ……これでは、いざ戦いが始まったときに気が散ってしまう……な」
直にペニスを握り締め、硬い弾力がぬっちゃりと

ヌメリ液に濡れた独特の触り心地に声が揺れる。
「あ、兄上ッ!?」
唇を寄せ熱い息を吐きかけると、エリクが悲鳴のような声を上げた。
「お、王国の騎士が、そのようなはしたない声を零すなッ。そ、それよりコレ、は、私が処理、せねばなるまい……な」
弟を叱りながら、自分は騎士のくせに、女の声で媚びるように声を上擦らせ舌なめずりをしている。
実の弟の怒張を瞬きも忘れて凝視し、女の肉体の疼きに突き動かされている。
「兄上っ、なにをっ!? やめて下さい、僕たちは兄弟……ッ、くぁああっ!」
エリクの言うとおり、どう考えてもおかしい。
狂っている。元の身体で行ったのであれば、正気の沙汰じゃない。
だが脳裏に一瞬思い浮かべた背徳のイメージに、ぷじゃ、と膣穴を熱飛沫が流れ下る。
エリクの脚にその雫をぽとぽと滴らせながら牝豹姿勢に尻をはね上げると、アルベルトは脈打つ怒張を赤く肉厚な唇に咥え込んだ。
焼けた鋼のように硬く熱い。それでいて独特の弾力がぷよっと押し返してくる。
「はむっ! ん……あふ、ふぁ……あぁ」
口腔で極太を締め付けながら早速舌を竿に這わせると、ぬるりとしたカウパーが粘り着いて生臭い塩味を味蕾に染みこませてきた。
その魚介臭い牡臭が鼻腔にまで抜けると、女へと変わった身体がへなへなと脱力し感度を増す。
くちゅ、ちゅるる、にゅぱ、れろ、ぬちゅちゅ。
「ふぅおお、は、ああっ! あ、はぁあ、兄上が、僕の舐めてるッ!! や、やめ……ッ、んぁああっ」
どれほどやんちゃに跳ね回る男根でも、しなやかに蠢く長い舌が蛇のように絡みつき虜にする。
「んむ、はぅ、あ、はぁ、ひゅごい、にゃ、エリクにょ、ここ。口の中ぁ、いっふぁいらあ……。れろ……じゅるる……」
幹の周囲をなぞりながら亀頭へとにじり寄り、窄めた舌先で括れた溝から溜まった恥垢を掻き出す。
「そんな所をッ、兄上ぇえっ、くはぁああっ!」
歓喜の喘ぎを張り上げる弟の膝が、快感にガクガクと震えストロークを停止させた。
無防備となった亀頭の裏筋を舌全体で包み込むようにぬちょぬちょ舐めてやる。
「かはぁあぁっ!!」
途端に口腔の中で陰茎がビクンと打ち震え、口蓋を弾き上げた。唇を苦しいほどに押し広げている膨張幹が一段と太さを増す。
「んうぅ……ぶふっ、はぁ……ッ」
息苦しさにアルベルトが思わず喘ぐ。
まさかすでに射精かと身構え、鼓動が高鳴る。
しかしここで出されてしまっては……、もっとたっぷり楽しもうと思っていた当てが外れる。
女体化騎士がやきもきする最中、
びゅるるる、ぶびゅうぅっ!!
火傷しそうなほど加熱された先走り汁が射精のような勢いで、密着した舌へ噴射された。
独特の栗花臭ではなく、仄かにしょっぱいヌメリ液の味わいに安堵しつつ、その量の多さに仰天した。
「おぶうっ、ん……ふぅう、はぁぁ……ッ。んん……いい、じょ、兄の口にぃ、いっふぁい、出せ、エリクぅ……。んは、んぐ、ぐび、んぐ、んぐッ」
唾液より濃度の高いねとっとした感触が舌にへばり付く。味は薄いが陰茎から放出されただけあって微かな生臭さに染まったそのヌメリ液が喉にまで流れ込み、反射的にごくんと飲み下す。
その間ペニスへの刺激が弱まり、出そうで出せない生殺しのもどかしさに弟が身を捩る。
「兄上は、あぁ、男、なのです、からあ。ですから、このような、こと……んぅうう、やめ……。ふぁああ、舌ぁ。はぁあうっ!」
そんなこと弟に言われなくても分かっている。けれども、いくら毅然と振る舞おうとしても、いまのこの身体でいる限り、はち切れんばかりに怒張したペニスを見せつけられただけで、それが実の弟であろうと女の情欲が抑えきれなくなる。
れろっ、ちゅぱっ、ちゅるるっ!! ぬちゅちゅ!
「ひぁあっ、そこっ、ダメですッ、兄上っ!! ああぁあぁ、なにか、熱いの、来……るッ、やめ、はうッ」
「お、お前がこんなに、これを大きくするからだろうッ! こんな、太くッ、硬くして! ああ、またビクンってしたっ!! 私が舌を這わせると、ビクンってするじゃないかっ!」
八つ当たり気味に弟の勃起のせいにしながら怒張を甘噛みし、亀頭の裏筋を激しくしゃぶると、途端にエリクが弱々しい喘ぎを漏らして身を震わせた。
「ほら、先からもこんなに汁、溢れているじゃないかっ!! 私の身体見たからなのかっ!? 私に、舐められて感じているのだろうっ!」
じゅるじゅるじゅるっ、ずりゅりゅりゅっ、ずぽぽぽっ、ずりゅっ、ちゅるるるるりゅ〜〜〜ッ!!
脈打つ剛直から量を増して溢れ出る生臭い味わいのカウパーを、頬を窪ませ激しく吸い上げる。
「くあっ、ああっ! やめ……ッ、兄、上ッ、で、射精……ッる!! ふぁああっ!」
途端にエリクの剛直が、激しく震え太さを増した。
「んふぅうう! ふわっ、くりゅっ!!」
根本から押し寄せる激流の予感に自ら巨乳房を揉み拉げ口中の亀頭を急かすように舌で舐め転がす。
その途端、
どびゅるるるっ! どぴゅぴゅっ!! ぴゅるぴゅるぴゅるるるるぅ――――ッ!!

夥しい白濁が勢いよく溢れ、苦み走った不浄な味わいと共にアルベルトの口中を熱く焼き焦がす。
「んぐうっ、ぶふっ、ふわッ、あふ、あぁぁ……」
喉奥を水鉄砲のように打ちのめす射精の勢いに噎せかえった。男であれば不快にしか感じられない脱力の栗花臭に満たされ、どろりと絡みつく粘度の高い孕み汁を喉を鳴らして飲み下す。
「あは……い、いっぱい、射精したな、エリク」
「あ、兄……上……っ」
唇の端から垂れる精液の雫を舌で舐め取りながら微笑みかけると、弟が驚きに顔を引きつらせる。
揉み弄り始めた乳房が心地よくて手が離せず、際どい鎧の下に手を潜り込ませて直に捏ね回しながら指先で乳首を転がすと、熱い痺れが巨房に渦巻く。
「だが、兄の口にこんなに射精したのに、まだそこは収まらないようだな。いや、むしろ先ほどよりも、大きさを増しているぞ」
「こ、これは……その、も、申し訳、ございませんッ！　あ、兄上。せっかく兄上が、僕のために、咥え……い、いえ、あの、その、口で……。そ、その……つ、つまり……」
揉み弄る乳房が、生き物のように蠢き拉げる様に目を奪われながら、射精してなお勃起を増してしまった怒張を恥じらう。
ただ戦場での弟の無事を案じてフェラチオをしてくれたのだと信じきり、艶めかしい牝姿となった兄に感謝を述べようとするが、淫靡な表現を避けられずしどろもどろに口籠もる。
その間にも、再び先走りの汁を溢れさせて硬く急角度にそそり勃ちゆく赤銅色の極太へと、アルベルトは妖艶な視線を注ぎ続けた。
もしかするとこの淫靡な魔女ナスタロヴィカの姿に刻まれた感情なのだろうか？
純朴な弟が妖艶な色香に戸惑いながらも抗えなくなってゆく様に、ゾクゾクとする。
実の弟なのに、まだ年端もいかぬ少年なのに。
背徳感が強いほど、倒錯的な興奮が沸き立って、魔女そのものの残酷な笑みでエリクを誘惑する。
淫靡で悪辣な魔女の所業が楽しくて仕方ない。
「あ、兄上!?」
乳房を弾ませながら膝立ちでにじり寄ると、エリクが不安げに顔を引きつらせた。
「や……やはりきちんと満足させないと、いけないようだな。幸いいまの私のこの身体ならば、お前のそれが鎮まるまで相手をしてあげられる。あ、兄に任せて……くれ……、エリク」
なにを言っているのかと、頭の奥で理性の欠片が正気に返らせようとしているが、口中に残るスペルマの風味を意識すると、子宮の衝動に抗えなくなる。
怒張の真上にたどり着き、鎧の際どい股当てを外す。そのときを狙ったように、部下たちが興奮の面持ちで天幕へなだれ込んできた。
「な、中から百人長とエリクの、悩ましい声が聞こえてきて……」
「あ、あんなの聞かされたら、たまらないですよ」
「――!!　お、お前たち！」
女の身体にされたとはいえ、実の弟を誘惑し交わろうとしていた。恥ずべき行為を部下たちに見られ、肝が冷えたのも一瞬、顔を上気させながら迫ってくる彼らの異様に隆起した股間を目にした途端、淫乱な魔女の肉欲が子宮を弾ませた。
「お、俺の、ちんぽ、もう痛いほど、勃っちゃって……ほ、ほらっ！」
「僕のだって、こんなにっ!!」
食い入るような眼差しで股間を凝視するアルベルトに、若い騎士たちが我先にと陰茎をさらけ出す。
「あ……、ああっ！」
赤黒く充血した肉竿は、妙にゴツゴツと節くれ立ったものや、太さが並ではないもの、亀頭のエラが茸の傘のように大きく開いたものなど、淫猥な鏃(やじり)型をしながら一人一人がすべて異なる個性を備えて、興奮に間断なく脈打ち続けていた。
「お、お前たち、そんなもの……を、は、早く、しま……え……」
一応は上官らしく注意するが、むわっと一斉に溢れかえった男根臭に子宮がドクンと脈打ち、股ぐらへ続く穴中が火照りを増す。
「ほら、弟さんだって、まだまだ満足できてないみたいですよ！」
「うわっ！　あ、あぁぁ……兄上……」
彼らの乱入に紛れて兄から離れようとしたエリクだが、すぐに同僚たちに捕まって、射精しても全く勢いの衰えない剛直を差し出させられる。
羽交い締めで突き出させられた男根が、激しく上下に暴れて精液混じりのカウパー汁を跳ね飛ばし、正面にいたアルベルトの顔面にへばり付かせる。
「ふぁぁ……、エ、エリク……ぅ。まだ、足りないの、か……、あ、あぁぁぁ……」
声が情けない喘ぎに崩れた。両脚から力が抜け落ちて、へっぴり腰をへなへなとへたり込ませる。
「へえ、いくら心が男でも身体を女にされちゃうと、男のちんこ見て腰抜かしちゃうんですね」
反論できない。アレをこの淫乱な肉体に突き立てられると、天にも昇るような快感が弾けて、邪魔な理性など木っ端微塵に蹴散らすことを知っている。
「百人長の身体から、いい匂いしてる。こんなの嗅がされたら、ますます変な気分になっちゃうよ」
「私の、匂い……？」
火照る肌からじっとりかいた汗が発情の香気を醸しているのだろうか？　それとも股鎧の内側でむんむんに熟成された膣汁の淫臭が、漏れ出しているのだろうか？

「とにかくこのままじゃ戦いに集中できないですよ！　こんな状態にした百人長の身体にどうにかしてもらわないと!!」
「その身体で慰めてもらえれば、俺たち百人長の本当の身体を取り戻すために死にものぐるいで頑張れると思うんです！　だからっ」
「ああ、お前たち……」
確かに、こうなった責任は自分の扇情的な身体にある。上官として彼らの要求を受け入れてやるべきだし、肉体もそれを望んで激しく疼く。
女性として扱われることに違和感を抱いていた男としての意識が、幾度も犯され快感を味わわされるうちに、それを求めるようになっていた。
「ほら、エリクの奴だって尊敬する兄上のイヤらしくなった身体のせいでこんなに切ない有様なんだから、どうにかしてやらなくちゃ」
そのへたり込んだままのアルベルトの前へ、騎士たちは恥ずかしそうに俯く弟を押し出してきた。
「ああ、やめろっ、そんなッ!!」
抗おうとする弟だが、
「エリク……。ん、あふぁっ」
磯臭い汚臭がツンと鼻を突く、赤紫に充血を高めた怒張へとアルベルトは自ら唇を大きく開いた。
「ふぁああッ！　また、兄上の口の中にっ!!　へぁああ～ッ！　舐めてるッ、兄上がっ、僕のッ!!」
禁忌の思いに抗っていたのに、裏筋を小気味よくしゃぶった途端、自分から腰を迫り出してくる弟に、子宮がキュンキュンと疼きまくる。
（あああぁ、エリクぅ。兄弟、なのに！　いまは私が兄だと分かっているのにッ、こんなにっ♪）
卑劣な手段でアルベルトを殺されたと思い込み、怒りに任せて魔女の身体を犯した。それが女へと身体を換えられた兄本人であったと分かり、忌まわしい悪夢として互いに忘れると誓い合ったはずなのに。
異常な初体験は弟の心の中でねじ曲がり、倒錯した劣情となって兄弟を突き動かしていた。
「ああ、兄上っ、アルベルト兄さんっ！　兄上の口の中っ、気持ちいいですっ、ふぁああ、舌があっ」
ほつれかけたポニーテールの頭を抱え込むようにして、興奮に我を忘れた弟が腰を繰り出してくる。
「んぐうっ、ふむっ、うふうっ！　ぷぶぁあッ!!」
汗と磯臭さの混じり合った陰茎の風味が口いっぱいに広がり、酸味がかった塩味が味蕾を痺れさせる。
溢れる唾液に溶け込んだその汚濁をぎゅぽぎゅぽ攪拌して、エリクの節くれ立った勃起は遠慮なく喉の奥まで突き込んできた。
（ひうっ、激ひ、いい、ん、ぐふぁ、息い、れきにゃひっ、おふっ、エリク、めぇえ、乱暴、すぎ）
弟がその気になった途端、男の勢いで責めまくられ、鋭敏な女体が追い詰められた。
大きく見開いた目から涙を溢れさせ、呻きだけをくぐもらせる。それでも、快楽の探求に余念がなかったナスタロヴィカの淫乱に仕上げられた肉体が、勢いよく口中をストロークする竿幹へと熱烈に舌を絡みつかせていた。
くちゅ、ちゅるる、にゅぱ、れろ、ぬちゅちゅ。
「ふぅおおお、は、ぁあっ！　あ、はぁあ、舌ッ、舌気持ちいいっです、兄上が、僕の舐めてるッ!!」
どれほどやんちゃに跳ね回る男根でも、しなやかに蠢く長い舌が蛇のように絡みつき虜にする。
幹の周囲をなぞりながら亀頭へとにじり寄り、窄めた舌先で括れた溝から溜まった恥垢を掻き出す。
「そんなところをッ、兄上ぇえっ、くはぁああっ！」
歓喜の喘ぎを張り上げる弟の膝が、快感にガクガクと震えストロークを停止させた。
無防備となった亀頭の裏筋を舌全体で包み込むようにぬちょぬちょ舐めてやる。
「かはぁあぁっ!!」
途端に口腔の中で陰茎がビクンと打ち震え、口蓋を弾き上げた。唇を苦しいほどに押し広げている膨張幹が一段と太さを増す。
「んうぅ……ぶふっ、はぁ……ッ」
息苦しさにアルベルトが思わず喘ぐと、エリクの鈴口から火傷しそうなほど加熱された先走り汁が、密着した舌へ射精のような勢いで噴射された。
びゅるるる、ぶびゅうぅっ!!
「おぶうっ、ん……ふぅう、はぁぁ……ッ」
唾液より濃度の高いねとっとした感触が舌にへばり付く。陰茎から放出されただけあって微かな生臭さに染まったそのヌメリ液が喉にまで流れ込み、反射的にごくんと飲み下す。
その間ペニスへの刺激が弱まり、出そうで出せない生殺しのもどかしさに弟が身を捩る。
「た、たまんねえ、俺たちのちんぽも気持ちよくして下さいっ、百人長！」
「美人な女の身体しているのに、元々は男だから、ちんこの気持ちいいとこ分かるんですよね!?」
痙攣を繰り返しながら射精間際の甘美に喘ぐエリクの様に、興奮を滾らせて騎士たちが群がる。
「ひぅううんっ！　ふぅ、むぅうっ!!」
先走りの量を増して赤銅色に加熱した幾本もの怒張が、汗にまみれた鎧で申し訳程度に覆われた絹肌へ一斉に擦りつけられる。
ぬちゅ、ぬりゅ、にゅちゅちゅ、ねちょ、ぶちゅ。
「ひうっ、んふぅッ、ひゃめ……ぷあ、はぁっ」
脇腹も背中も、太股も二の腕も、髪の中にまで、ヌメヌメの液濁を塗りたくりながらめり込んでくる。
「おお、たまんねえ、百人長の肌、すべすべだ。なぞってるだけで、も、もうっ、ふはぁっ!!」
「ち■こにしっとり吸い付いてくるしッ！　下手な女に挿入るより、ずっとイイッ!!　百人長の肌ま○こッ！」

聖王歴164年
オーク族蜂起する
見事な奇襲と
圧倒的な物量により
エルフの森陥落
下劣で醜悪なオークども！
我らの森から出て行くのです
エルフの姫騎士登場！
ここは私に任せて皆は先に退却を！
セフィリア姫様!!
獣欲に穢れたエルフ
姫騎士セフィリア
Princess Knight SEFIRIA
漫画 COMIC ぱふぇ

アレが噂ノ姫騎士か!!
ブヒィっ！何てやつダ
たじ…
のけィ お前ラでは相手にならン
ぐいっ
我ラを何度モ潰してクれたエルフの姫ヨ
オーク王が一騎打ちヲ所望スる！

何が一騎打ちなのです!?
子供を人質にとるだなんて卑怯者のすることよ
何トでも言エ これが我らノ流儀ヨ
分かっタら武器を捨てロ
分かりましたのです!
く…
ブハハハ物分かりがイいな
それデ良…い!?
こしゃクな!!

ぬ!?
オノグ
メオォォ
スタッ
とどめなのです！

ブシュッ
オォォォ!!
ブァー
ブァー
ミノ…タウロス…!?
ぐ…
一騎打ち…なの…に
卑怯…なので…す
く…あぁ
精霊使い(シャーマン)まで…!
しゅる
ぎゅ
ぎゅ
しゅる
しゅる
しゅる
しゅる
しゅる
放しな…さいぃ!!
勝てば良かロうなのダ!
やれィ!!
Yes,sir
BIND!

ぐ…ぅ
ハハ
ハハ
ドカ
ス
ヒャヒャヒャ
人質を取るだけでなく一騎打ちに助太刀…
多勢に無勢で女を嬲って恥を知るのです!!
ああっ
恥ずかしくなルのはぁお前ノ方ダアぁッ
嫌ぁあ!
ブヒョーイい乳♥よーく見せロよ

それデは勝負の続キをシようか
バっバカ者！近づかないで汚らわしい!!
俺ノも見せてやル
フヒヒッ柔ラけー
離れなさい！臭い…うぅ
ほーれホれ急所ヲ攻撃させてやル噛ミついてみルか？
お姫様はチンポ見ルの初めテか？
どうダ逞しいだロデカすぎテそノ口じゃ入らンか？
ひ…や
ふらけるにゃ…
む
んんぐ…

うら若き歩き巫女に迫る
おぞましい妖蟲の責苦!?

歩き巫女紗耶香
～蟲禍～

小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）　挿絵／ILLUSTRATION gALL

著者近刊
好評発売中!

トリプルとらぶる
プリンセス

西の山の端に陽が沈み、ますます赤らむ空の下――麓の村人たちが鳥野辺と呼んでいる山中の台地。

「掛けまくもかしこき伊邪那岐大神、筑紫の日向の橘の……」

土葬墓地の中央、蕭々と吹く風に艶やかな黒髪をなびかせた若い巫女が、凛とした声で祓詞を唱えていた。

揺れる前髪の下に見え隠れする額は白磁のように滑らかで、半ば閉じた薄い瞼は繭のように柔らかい。スッと通った鼻筋、形よく紅い唇、なよやかなうなじ――夕陽を浴びた頬はやや幼いが、細い顎を引いて前を見、静かに玉串を振る仕草は、堂に入っている。

白衣を纏った華奢な肩、緋袴に包まれた小さな尻――胸の膨らみは控え目で、腰回りは細い。薄羽蜻蛉のように痩身の、儚げでさえある巫女。

その周囲には、十数人の男たちがいた。力の抜けた両腕を前方へ差し伸べ、右へ傾ぎ、左へ揺れて――血と土に汚れた襤褸を地に引きずりながら、徐々に徐々に、包囲の輪を狭めていく。

それは死人だ。

眼球が溶け落ちた眼窩の奥に青白くぬめり光る小さな小さな蛆たちが群れを成しいやらしく蠢いている。

黄泉比良坂から迷い出てきたような、見るからにおぞましい化け物たち。前後左右を取り囲まれたうら若き巫女もいくぶん腰が退け気味だ――が。

「ひとふたみよいつむゆななやここのたり、ふるべふるべゆらふるべ……」

薄い瞼を半ば閉じ、鈴の音のように涼しげな声を響かせて、巫女・紗耶香は祓詞を唱え続ける。

（見なければ平気。敵は死人よ、蟲じゃない。蟲なんて気にしない……気にしないんだから！）

紗耶香が嫌悪しているのはノロノロと迫り来る死人そのものではなく、屍肉を喰らっている蛆蟲たち。巫女という仕事柄、妖怪変化の類はまったく怖くないのだが、蟲はどんなものでも気持ち悪くて怖いのだ。

だから――。

「諸々の禍事、罪穢れあらんをば、祓え給え清め給え……」

言霊に合わせて玉串を打ち振りつつ、

（この気配……反魂ではない）

死人の眼窩で蠢いている無数の蛆蟲たちを懸命に無視する。

（屍解仙とも違う。強いて言うなら蠱術……だけれど、それもまた違う）

敵の術を分析することで震える心を叱咤し、己の気を高めていく。

死人を操る術は、それがどのような術理に基づいていようと所詮は左道。天道正道から外れることなく天地の理を味方につければ、必ず勝てる。

玉串を振り、紙垂を揺らして――。

「ふるべふるべゆらゆらとふるべ、と、ほ、か、み、え、め、た……メッ!!」

転瞬、落雷のような衝撃。

紗耶香のなよやかな肩や輝く髪に触れかけていた死人たちが、清らかな気の奔流に弾かれて大きく仰け反った。

腐肉を繋ぐ邪術がたちまち浄化され、骨まで粉々になって、文字通り霧散する――と。

「ほうほう、五十鈴の祓とは珍しい。しかも己が身を鈴に見立てる古法じゃ。いや珍しい珍しい」

死人が消えた墓場の隅、白骨のような枯れ木の陰からひょっこりと――せむしの小男が顔を覗かせた。腫れ物だらけの頬を不気味に弛め、黄ばんだ乱杭歯を見せて、

「妙見の秘法に現れた娘は、なるほどそなたであったか」

わざとらしいほど大袈裟に、ひとり勝手に得心する。

妙見の秘法とは、仏教系の占術だ。極めれば百年先まで見通せるらしい。

「……破戒坊？　麓の村から娘を攫って、いったいなにをしているの!?」

姿を現した親玉が蟲でなくてよかったと密かに安堵しながら、年齢不詳の小男のおぞましく歪んだ顔に玉串を向け、鋭く問う紗耶香。

見るからに華奢な、頬には幼ささえ残っている可憐な娘だが、その背には自信と威厳が充ち満ちている。諸国を経巡って神々を祀る歩き巫女だから、怪異や邪法師には慣れているのだ。

麓の村に漂着したのは三日前。老人の病を癒やしたり涸れ井戸に湧き水を導いたりしているうちに実力を認められ、娘を攫う化け物を退治して欲しいと懇願された。詳しく話を訊くと、その化け物は死人を使役しているらしい。

死者の眠りを妨げるなど、天地の理に反している。神々に仕える身として聞き捨てならないし、第一、娘を攫うこと自体許しがたい。

敵の正体がなんであれ必ず討ち滅ぼさなければならない、応援を待つ間も惜しい、私が退治してやる――と、火を噴くような決意を秘めてここまで登ってきたのだ。

対する小男はキシキシと耳障りな笑い声を立て、紗耶香から三間ほど離れた場所に立った。

「村の娘たちを攫ったのは、そなたと間違えたからじゃ」

「……？」

「我が秘法には若く健康な女体が要る。占ったところ、この辺りで得られると出た。ゆえにこの山中に巣を張り、それらしい娘を攫っておったのじゃ――が、本命はそなたひとり。大人しく我に捕まれば、村娘はもう攫わぬ」

言いながら、小男は妙に長い腕をスウッと左右に広げた。

「村のために人身御供になれ、歩き巫女。御伽草子に語られようぞ」

「貴方を討っても語り種になれるわ」

「キシシ、勇ましいのぉ。しかしそなたの古臭い術で、我を討てるかの？」

「……討つッ！」

叫ぶと同時、地を蹴る紗耶香。

脳裏に描くは幾万の鈴。細い身体に気を巡らせ、すべての細胞を凛々と鳴らし――五十鈴流古法・鳴鏡。

全身から迸る清浄な音色が邪気を祓

い、左道のつけいる隙を与えない。手にした玉串に気を通せば、瑞々しい葉の一枚一枚が金剛石の刃に変わる。
「と、ほ、か、み、え、め、た……」
略式の祝詞を唱えつつ、必討の一撃を繰り出す——寸前。
いきなり足下が崩れ、視界がガクンと下がった。
（落とし穴ッ⁉　いや、これは……）
深く巨大な穴へ倒れて落ちる紗耶香を、足下から噴き上がってきた無数の黒い点が一気に包み込んだ。
頬に当たって弾けるのは乾煎りした豆のように軽い感触。耳朶を打つのは生理的嫌悪感を催す無数の羽音——何百万何千万という、蠅の群れ。
「……ッ！」
気づいた瞬間、全身の血がサァッと退いた。悲鳴を上げなかったのは、口を開けたら飛び込んできそうだ、と咄嗟に思ったからで——。
（ひぃっ⁉　ひ、ひぃいっ⁉）
心は完全に恐慌を来し、頭の中が真っ白になった。なんとか倒れずに穴の底へ着地したものの、
「くっ⁉」
草鞋の足裏に、水餅の塊を踏み潰したような感触。同時に噴き上がる、凄絶な腐臭。
（墓穴に落ちた？　でもこの屍は新しい……というか蠅、蠅、蠅蠅蠅蠅……こ、こんなにたくさんの、は、蠅、蠅、蠅……え？　は、蠅……？）
視界を覆い隠して乱舞する無数の蠅を嫌悪してすっかり麻痺していた意識が、転瞬、焦点を結んだ。
屍に湧くのは蛆だ。蠅ではない。まして、地中に埋められた屍にこれほど大量の蠅が湧くはずがない。
だが、聞いたことがある。
妖気を纏った普通ではない蟲ばかりを集め、道具として使いこなす邪法師がいると。その名は、確か……。
「む、蟲使い……泥蜘蛛⁉」
「御名答」
ギョッとするほど近くから小男の返事があり、と同時、首筋にチクリと小さな痛みが刺さった。
反射的に上げた手が蜂の腹を抓む。鮮やかな青と黒の縞が織り成す、特徴的な般若の模様は——。
「れ、玲瓏蜂……！」
「ほうほう、若いのに物知りじゃの」
蠅たちが散って開ける視界、同じ穴の底に立った小男が見えた。その手には、吹き矢の筒。毒針を出した蜂の腹を矢にして飛ばしてきたのだろう。
「ふ……不覚……」
掠れた声を絞り出した紗耶香が、緋袴の膝を折って頽れる。蛆が蠢く腐肉に顔から突っ伏し、ビクン、ビクン、と虚しく痙攣。玲瓏蜂の針には強力な麻痺毒があるのだ。
意識はあるのに動けない。
（ああ蛆、蛆……や、やだ、来ないで、来ないで……来ないでぇっ！）
鼻先に迫る白い小蟲の群れに心は悲鳴を上げているのに、指一本すら動かせない——と。
「安心せい、歩き巫女。そなたは大切な供物じゃ、傷一つつけぬわ」
蟲使いの軋んだ声が遠くから聞こえ、代わりに死人たちの冷たい手が、身動きできない紗耶香に群がった。

＊　＊　＊

山中の洞窟に運ばれた紗耶香は、文机のような台に仰向けに寝かされた。
長く艶やかな黒髪が天板の端から流れ落ち、湿った土に渦巻いて、松明の明かりを受けて濡れ濡れと輝く。
縄を打たれた手首は頭の先へ引き伸ばされ、足首は台の脇へ引き下ろされた。緋袴に包まれた膝は深く折り曲げられ、左右に大きく開いてしまう。
仰向いた胸、白衣の襟が撓んで瑞々しい柔肌が覗いた。腕を引き伸ばされているせいで肩が上がり、ただでさえ小さな乳房がますます薄くなり——胸の膨らみはないも同然。
「わ、私に……なにを……する、つ、もり……」
いまだ麻痺したままの口を懸命に動かし、強張った声を絞り出す紗耶香。松明に照らされた頬は蝋のように白く——しかし、おぞましい蟲使いを睨み上げる瞳にはまだ強い光があった。
（犯すなら犯せ。隙を見つけて、必ず反撃してやる……！）
——正直に言えば、怖い。生娘だから、本当は犯されたくない。
しかし、手足の自由を奪われたいまは為す術がない。反撃できるとしたら、たぶん、犯されたあと。
（純潔を奪われたくらいで負けはしない……ううん、絶対に負けない！）
醜い小男が獣欲を満たして油断したとき、必ず後悔させてやる——と。
「キシシ、よい顔じゃ。それでのうては供物にならぬ」
腫れ物だらけの顔にいやらしい笑みを浮かべた泥蜘蛛が、紗耶香の胸元へツッと手を伸ばした。
「……！」
胸をはだけられるのかと息を呑んだが——違う。手はすぐに戻り、代わりに、冷たく重いなにかが乗せられた。
「な……に……あっ⁉」
淡い膨らみの狭間でモゾリと動いたのは、男根——いや、前部が黒光りするクサビ型になった、巨大な芋蟲だ。
（蟲、蟲……蟲ぃいっ！）
冷たい重さ、柔らかな硬さ、肌に喰い込む小さな脚——悲鳴も上げられないほどの恐怖と嫌悪に、紗耶香の頬から血の気が退いた。
長さは六、七寸ほど、太さは親指を三本束ねたくらい。青白い腹部はエビのように湾曲し、拳大に丸まって、芋蟲の頭と尻が触れ合っている。
頭部の先端、本物の男根であれば鈴口がある辺りに、小さな頭があった。
胡麻粒よりも一回り大きな複眼、複雑に節張った触覚、おぞましく恐ろしげな大顎と、橙色の口吻——蟲を間近で観察したことなど一度もない紗耶香には、なにがなんだか分からないが、

著者近況　ニイニイゼミから始まってアブラゼミ、クマゼミの全盛期を過ぎ、これを書いているいまはツクツクボウシの季節。まだ暑いらしく、ヒグラシの声は聞こえません。早く涼しくならないかなあ……。

ゆえにこそ生理的な嫌悪感が否応なく掻き立てられる。

黒光りする亀頭状の頭部も、その精妙で複雑な蟲の顔貌もおぞましいが、生臭い粘液を滲ませてヌラヌラと輝いている腹部も気持ち悪い。しかも一匹だけでなく――。

「魔羅兜じゃ。兜虫の一種じゃが、頭から胸だけが成虫となる」

ニヤニヤと笑み崩れた小男が、一つ、また一つと、巫女服の胸元へおぞましい蟲を乗せていく。丸まった身体をくねらせ伸ばし、疣のような短い脚を懸命に踏ん張った芋蟲たちは、なんとか起き上がって、黒光りする亀頭のような前部を振り立て――。

「あ……く、うぅっ!?」

白衣の襟をこじ開けて、紗耶香の薄い胸に這い込み始めた。

意思を得た男根が、乙女の柔肌を陵辱せんとして蠢いているようだ。いや、冷たくプリプリした感触に生命の気配は感じられない。まるで、氷の塊を秘めた死人の指のような――。

あまりのおぞましさに息が詰まる。玲瓏蜂の麻痺毒は消えたが、襟を掻き分けて胸へ這い込んでくる妖蟲が気持ち悪く、文机に縛りつけられた身体が石のように強張ってしまう。

「餌は気じゃ。しかも人間の、特に若い牝の気を好む。村娘の味もよかったようじゃが、なにぶん気の量が少なくてのぉ……その点、そなたならば安心じゃ。若いだけでなく、気の量も常人の数倍はあるじゃろうからな」

泥蜘蛛の解説を、紗耶香はほとんど聞いていない。

（いや、いや……蟲が、蟲が蟲が、蟲がぁあっ！）

弛んだ襟から這い込んできた芋蟲たちは巫女の瑞々しい柔肌に三対の短い脚を喰い込ませ、蕾のように小さな乳房を蹂躙する。

蠢く脚は木の芽に似て、しかも不気味に濡れていた。それが乳肌を掴み、抓み、引っ張り、圧し潰し――冷たく小さな感触は、赤子の手に似ている。いや、赤子よりも小さく、そして淫らなほどに冷たい。

嬰児というより胎児――いや、水子の手だ。外界を知ることなく死んでしまった小さな小さな死者たちが、白衣の胸に潜り込んできたような――母の温もりを求めて紗耶香の乳房をまさぐっているような――。

だが、乳肌の上に引きずられている冷たい重みには、指とは明らかに違う無数の節が感じられた。なにやら気持ち悪い粘液にも濡れている。

柔肉に擦りつけられる頭部は滑らかに硬く、形も亀頭に似ているが、しかし冷たい。木にも石にも金属にも似ていない、蟲の甲独特の感触。

「キシシ……死にそうな顔をしておるな、五十鈴の巫女。蟲はイヤか？」

「ッ!? へ、平気よ！ こんな蟲なんか、ぜ、全然……怖くないわ！」

穢らわしい蟲使いに笑いかけられ、紗耶香は反射的に言い返した。忘れかけていた使命――おぞましい邪法師を倒すのだという目的を思い出し、なんとか歯を喰い縛る。

「貴方を討つ……絶対に、討つ！ 村の人と約束したのよ、だから……だからこんな蟲なんかに……負けない！」

「よしよし、その意気じゃ。並の娘とは違うところを見せておくれ」

いやらしい笑みを深めた小男が視界から退くのと入れ替わりに――台の脚に縛りつけられている足首や地に爪先をつけている純白の足袋に、冷たく重いなにかが次々と這い登ってきた。

「な、なに!? ま……まさか……」

「もちろん、魔羅兜じゃよ」

松明に照らされた洞窟に泥蜘蛛の声が響く間も、足先にしがみついた妖蟲たちは無防備に開いた緋袴の裾に、陸続と潜り込んでくる。柔らかなふくらはぎや滑らかな脛を伝って膝へ、太腿へ、そして股間へ――短い脚を蠢かせ、冷たく太い腹を引きずりながら、ジリッジリッと這い進む。

「く、あ……うぅっ！」

抓られる柔肌、塗りつけられる粘液。

一度は追い払ったはずの水子の幻影が、再び紗耶香の脳裏を埋め尽くした。まだ人の形を成していない、白くブヨブヨとした屍が、小さな手で紗耶香の脛を掴み太腿を揉み、生者の温もりを求めて股間へ迫る――いや、叶わなかった誕生を今度こそと請い願い、子宮へ回帰しようとしているのか。

（まさか、そんな……まさか……）

おぞましい予感に震え、懸命に否定しようとするのに、冷たく重い蟲たちは小さな脚を波打たせながら、次第に股間へ迫る。緋袴を押し上げ、太腿に擦りつけられながらクイ、クイ、と動く亀頭状の頭は、間違いなく紗耶香の秘処を目指していた。

「皮膚が薄ければ薄いほど、気が漏れやすくなる。足裏より掌、膝より膝裏、頬より唇――肌より粘膜じゃ」

「粘膜って……あっ!?」

緋袴の中、瑞々しい乙女の内腿に連なった芋蟲の先頭が、とうとう秘裂に達した。冷たく滑らかな亀頭状の硬さが、繊細な柔肉に押しつけられる。木の芽のような蟲の脚に、左右の肉畝が踏み躙られる。

（む、蟲に……蟲に、蟲なんかに……わ、私の、大切な場所が……あ、あ、あああっ！）

恥ずかしい割れ目に亀頭状の頭部がねじ込まれ、グイ、グイ、と掻き分けられた。敏感な花弁の縁に、蟲の鼻先が触れ――。

「ッ!? ンく、うぅっ!?」

太腿のつけ根に肉悦の細波が走り抜け、咄嗟に唇を噛む紗耶香。

（な……なに？ いまのは、いったい……あっ!? ま、また……うぅっ!?）

感じやすい淫唇の縁を筆の穂先で撫でられているような、焦れったさを伴った淡い快感。

樹液をしごき取る甲虫の口吻と同じ、

著者近刊 『学園戦姫 巴 淫辱の下剋上』『魔戦姫 紗夜 淫辱の闘宴』『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 壱～参』『トリプルとらぶるプリンセス』『暴れん坊メイドは甘えん坊』『うらはらツインズ』ほか 好評発売中！

小さな筆状の器官が、魔羅兜の口にも生えているのだ。
「はうッ⁉　く……うぅ……け、穢らわ、しい……ッ！」
気持ち悪い蟲に繊細な粘膜を舐められている――膨れ上がる嫌悪に気が遠くなりそうなのに、しかしそれだけではなかった。
（なぜっ⁉　どうして……蟲なのに、蟲なのに……あ、うっ⁉　ああ！）
這い込んできたのが一匹だけなら、おぞましさしか覚えなかったかもしれない。責められたのが淫唇だけなら、漏れるのは悲鳴だけだっただろう。
だがそれは二つ三つ、八つ九つと数を増やし、柔肉の畝を掻き分けて競うように潜り込んできた。
無数の脚が淫核を踏み潰し、稲光のような快美感を次から次へと産みつけてくる。棒状のプリプリした身体をぶつけ合いながらクサビ状の頭部をつき合わせ、紗耶香の淫唇に筆状の口吻をせっせと擦りつけてくる。
（き、気持ちよくなんて、ない……蟲なのよ、蟲なのよ、これは！）
己の心に懸命に言い聞かせていないと、わななく唇から恥ずかしい声が漏れてしまいそうだ。
さらに――。
「うっ⁉　あ……くヒぅッ⁉　む、胸に……もッ⁉」
可憐な乳首の側面に微細な筆がゾリッゾリッと擦りつけられ、と同時に、赤子の歯よりも小さく尖ったなにかで甘噛みされた。淫毒を注入されたのか、小さな痛みは次第に熱い疼きに代わり――次に甘噛みされたときには、小振りな美乳の頂点に稲光のような肉悦が炸裂した。
（な……なんていやらしい、蟲！）
噛み締めた奥歯を軋ませ、溢れそうになった恥ずかしい声をなんとかこらえたのに――。
「うぅ……ふ、うぅっ！」
今度は淫核に鋭い痛み。
普通の甲虫にはない器官――口吻の左右に張り出した大顎が、紗耶香の快楽局点を甘噛みしているのだ。
尖った先は繊細な粘膜に喰い込み、ただでさえ敏感な肉豆に淫毒を注入する。感度が異常に高められ、
「き……ひ、うぅ……ッ！」
文机に仰向けに縛りつけられた細い身体が鋭く捩れた。
緋袴の下、ハの字に開いた太腿が内側を向いて細かく震え――滑らかな額が艶めかしく赤らみ、髪の生え際に甘酸っぱい牝香を含んだ汗が噴き出す。意思に反して腰がくねり、捻れて、地面まで流れ落ちている艶やかな黒髪がさわ、さわ、と打ち揺らされる。
「キシシ……よい声じゃ。さあ、もっともっと聞かせておくれ」
いやらしい蟲使いの声に急かされたのか、紗耶香の秘処に頭部を埋めた芋蟲たちが一斉に動きを変えた。
「うっ⁉　あっ⁉　や、や……やめ、け……穢らわ、しいっ！」
筆状の口吻にしごきまくられ愛液を滲ませて熱く火照っていた淫唇が、冷たく硬く滑らかな蟲の甲に掻き分けられる。丸まった先端が可憐な膣穴に触れ、ググッと圧力が高まり――。
「く……あ、あぁッ！」
蟲に穢される嫌悪と処女を失う恐怖、そしてなにより痺れるような淫悦に、幼気な頬を赤らめて目を瞠る紗耶香。
（イヤ、ダメ……む、蟲に……蟲に純潔を奪われるだなんて……）
理性は悲鳴を上げているのに、冷たく硬い蟲の頭部に抉られている膣穴には甘やかな痺れが湧き起こる。木の芽のような三対の脚に掴まれ、掻かれれば、男を知らぬ穴縁に快感の火花がパチパチと弾ける。
「魔羅兜は精臭を嫌うゆえ、処女の膣にしか潜り込まぬ」
洞窟に泥蜘蛛の軋んだ声が響くが、紗耶香はもう構っていられなかった。
「んぅ……く、うぅっ……」
旋回する亀頭状の頭部に、膣穴の入り口が抉りまくられる。蟲の甲の滑らかな冷たさが、愛液に濡れた繊細な処女粘膜にどうしようもないほど気持ちよく、懸命に喰い縛っている歯の間から「くぅ、くぅ」と恥ずかしい声が漏れてしまう。
そして――胸。
何匹もの芋蟲に甘噛みされた可憐な乳首は痛いほどに勃起して、注入された淫毒のせいで普段の数十倍、数百倍も感度を増した。
「ひぁっ⁉　く……ンひっ⁉」
弾けんばかりに膨れ上がった肉豆の側面が、小さな筆状の口吻によって、つけ根から先端へツッツッとしごき上げられた。稲光のような快感が乳首から乳芯へ走り抜け、熱い悦びに変わりながら小振りな美乳全体に染み渡る。
「精液をかければ、その蟲たちはすぐに退く。どうじゃ、欲しいか？」
頭の先から逆さに覗き込んできた小男が、満面をいやらしく笑み崩れさせて訊いてきた。
処女を奪われそうになっている秘裂とあどけない乳房の頂点に閃く快感に頬を赤らめ、湧き上がる嫌悪と逆巻く羞恥に眉根を歪めた紗耶香は、しかし――潤んだ瞳を懸命に怒らせ、おぞましい蟲使いを睨み上げる。
（こんな輩に……いかがわしい蟲を使って乙女を責めるような卑劣漢に、哀願などするものか！）
次々と産みつけられている淫悦は本物だから、もう口は開けない。声を出せばきっと、淫らに歪んで甘えを含んだ媚声になってしまうだろう。
だから紗耶香は柔らかな唇を引き結び、眦（まなじり）を決して泥蜘蛛を睨みつける。絶対に負けない、必ず討つ――逆るような信念を胸に秘め、細く美しい眉をキリキリと逆立てる。
しかしその頑なな態度は、泥蜘蛛をますます悦ばせてしまった。
「よいのぉよいのぉ、さすがは五十鈴の巫女じゃ。気が強い。それでこそ、

女王の供物に相応しい」
「じょ、女王？　供物って、これのことでは……あっ⁉　く、ンぎっ⁉」
紗耶香の疑念を邪魔するように、いきなり股間に激痛が生じた。擂り粉木のように旋回しつつ処女膣穴へ潜り込んでいた蟲のクサビ型の頭部が、ついに純潔の証を抉り始めたのだ。
「ひぎっ⁉　ぎ、ひぃ……ッ！」
冷たく硬い蟲の甲羅に磨り潰され、処女膜が裂ける。
閃く激痛、焼きつく痺れ――だが、裂けた粘膜が魔羅兜の大顎に甘噛みされた途端、催淫毒が注入されて、めくるめく愉悦にすり替えられてしまう。
「ふ……はっ⁉　あ、あ……あああ」
文字通り身を裂かれるような激痛が、嘘のように霧散した。
しかし、赤く染まった紗耶香の頬は焦燥に強張る。
（か、感じる……感じて、しまう！）
おぞましい蟲なのに、気持ち悪いはずなのに――。
快感を覚える自分が信じられない。あんなに嫌っていた蟲に犯されているのに、こんなにもはしたなく、気持ちよくなってしまうだなんて――。
硬い冷たさにこじ開けられた膣孔が、甘く痺れる。
蟲の腹に並んだ小さな脚が動くたび、処女膣孔に恍惚の波紋が広がる。
「ふぁ、あ……あぅンッ！」
冷たく重くプリプリとした蟲たちに蹂躙されている股間に、一際大きな恍惚の波紋。
カリ首に似た括れが、処女膣穴の入り口に完全にはまり込んだのだ。
（あ、ああ……蟲が、蟲が……私の中に、入って、く、るぅっ！）
理性は悲鳴を上げているのに、熱く痺れる感覚がヘソの裏側に湧き起こり、腰骨まで溶けてしまった。心地よい電流が背を駆け上り、頭の芯までトロトロになって――蟲たちに対する嫌悪感が薄れていく。
「キシシ……どうじゃ、気持ちよかろう？　蟲が好きになるじゃろう？」
「そ、そんな……こと、ないっ！」
「嘘を吐くな、五十鈴の巫女よ。そなたの頬はすでに弛んでおるわ」
「う……あ、ああ……！」
眼前に鏡が掲げられ――映り込んだ己の顔に、カァッと赤面する紗耶香。
悩ましげに歪んだ眉根、熱っぽく潤んだ瞳、艶めかしく赤らんだ頬、喘ぎわななく可憐な唇――恥ずべき己の表情を目にしても、鏡に映る淫らな微笑みは消えない。むしろ逆に悦びを加速し、さらに恍惚となるような――。
「ち……違うッ！　これは、私ではない……私であるわけが、ないっ！」
羞じらい叫び、顔を背けてギュッと瞼を閉じる。
だがしかし――ググ、ぐきゅぷ。
「うぅっ⁉　あ、くぅ……ッ！」
氷のように冷たい胴を引きずる芋蟲が、クサビ型の頭部を振り立てながら、さらに奥まで入り込んできた。
初めて異物に触れる処女膣洞の繊細な粘膜襞が、木の芽のように硬く小さな蟲の脚に容赦なく蹂躙される。クチュクチュと掻き回され、熱い快感を産みつけられる。
（か、感じない……感じてはダメ……これはおぞましいのよ、気持ちイイわけ……ないのよっ！）
奥歯を噛み締め、懸命に自分自身に言い聞かせていても、無駄だ。
胎内に潜り込んだ冷たい芋蟲がズリッズリッと這い進むたび、
「くぁ……う、ぁあっ！」
文机に縛りつけられた細い身体が肉悦の荒波によがり悶える。
「気持ち、悪い……気持ち悪いの、気持ち悪いんだからぁッ！」
感じてしまう自分を許せず、声に出して叫んでみても、肉の悦びはもちろん消えない。
紗耶香の柔らかな下腹部の奥で、しきりに揺れ、くねり――何者にも穢されたことのない処女粘膜を傍若無人にしごきまくり、生まれて初めての淫悦を容赦なく産みつけまくるいかがわしい妖蟲。
男根とは明らかに違う、柔らかな氷のように冷たく太い塊は、しかも一つだけではなかった。
モゾリモゾリと這い進む一匹目の丸い尻が膣穴の中へ消えると、すぐに次の芋蟲が亀頭状の先端を振り立て、甘酸っぱい愛液が滲む肉穴へいそいそと潜り込んでいく。
「ふぁ、あ……ンッ⁉　あひ……⁉」
ヘソの裏側に炸裂する、一際鮮烈な熱い快感。
膣奥に達した芋蟲が、行く手を阻む肉の壁に、硬いクサビの先端を押しつけたのだ。
精液以外を通さぬ細管の出口が、小さな筆状の口吻にゴシゴシとしごかれる。男根に突かれると快感を発し、膣洞全体を緊縮させる感応局点が、魔羅兜の大顎に甘噛みされて淫毒を注入されてしまう。
「ひ、あ……ひぃいっ⁉」
乳首や淫核にも勝る快楽神経の集合が、催淫毒に冒されてさらに感度を増してしまった。背を駆け抜ける恍惚の荒波が、いままで以上に強くなる。
「なにこれ、なに、なに……らッ⁉　ひぃっ⁉　あぎぇ……っ⁉」
脳天を突き抜けていく肉悦の槍に、紗耶香はたまらず反り返り、緋袴に包まれた股間を突き上げてビクン！　ビクン！　と痙攣した。
（感じない……負けないッ！　こんな穢らわしい蟲に……こんなおぞましい蟲に……負けたく、ないッ！）
意識はまだ、しっかりしている。
視界の端でニヤニヤしている泥蜘蛛を、憎らしいと思う。
なのに――。
「あ、あ、あぅぎぃいっ⁉」
きつく締まった産道を蟲の頭部にこじ開けられた途端、頭の中が真っ白になるような快感が爆発した。

仲睦まじい夫婦の
日常生活だが……？

じゃあ行ってくるよ テレサ

気をつけてアナタ

そんなに心配しなくても大丈夫さ

魔力の源である奴の角を一本すでに叩き折ってるんだ

今度こそあの魔物を仕留めてくるよ

リード：神官戦士

テレサは僕の代わりに神の家を守っていてくれ

え…ええ

ビクッ♡

ひうっ

背徳の虜囚妻 テレサ

魔に誘われし聖女

テレサ：修道女
（元 精霊使い）

漫画 COMIC／TAKE

えそそう？

どうしたんだい？テレサ

顔が赤いよ？

あ 朝焼けのせいよ

TAKE先生の2nd単行本
『ラストプリズン 艶華蹂躙』
好評発売中！

アアナタ心配しないで行ってきて

私だって以前は精霊使いとして

一緒に冒険してたんだから

それもそうだね

テレサの怖さは僕が一番知ってるよ

ももうっ

リードったら！

愛してるよテレサ

私…も…よ

んっ

アナタ…

ククク…

ひっ

ビクッ

ズルルッ

ひううっ

私モヨ…カ

ムギュ…♡

とんだ不貞妻だぜ…テレサ

ビクッ

だ…だめ

ビクッ

モミモミ…

ややめて…
あんっ
夫に気付かれ…るわ
ひあっ
はっ
やっ
グググ♪
コンナニ妻が発情シテオッテモ
気付かヌ夫ダ
はっ…ああっ
…？
テレサ…？
いっそ喘ぎ声デモ聞カセテやったらドウダ？
んっ
んあっ
ダダメ
あっ…
はっくううっ
ア…アナタ…

テレサ 帰ったよ

そういえば妻(テレサ)がたまにヨソヨソしい態度をとる時がある…

おかしいなぁ

留守にしてるハズはないんだけど…

悩み事があっても退魔の忙しい僕(しごと)に遠慮してたのかもしれない

ちょっと彼女に甘えすぎてたかな…

おーい テレサ!

いないのか〜い?

テレサ〜

んっ

んっ

ジュル

チュポッ

んぷっ

んぐっ

じゅっ

じゅぽっ♡

んっ

グフフ 悪い奥さんダ

ぐっ

おごっ

グポッ

グポッ

すぷっ

プル プル…

プポッ

プポッ

すぷっ

あぼっ

ぢゅぽっ

ぢゅぽっ

ぢゅぽっ♡

えああっ

旦那の出迎えモせずニ チンポにご奉仕トハナァ

んっぶうううう…

すぷっ

すぷっ

おおお♡

えふっ

けふっ

アアナタ…

アルマ…

ごめんなさい

グポッ!

ドロッ♡

とろり

私の心が弱かったばかり…
んぷっ
チュプッ
プチュッ プチュッ♡
ククク シスターが懺悔かい？
んちゅ
イイダロウ ココは懺悔室ダ
あぐっ
ごっ
神父(ダンナ)に代わって聞いてヤルよ
おぼっ
あばっ
ここんな淫蕩な肉体を…
律する事ができない私を…
懺悔が終わったら次は罰を受けるんだろう？
んぐっ
んくっ
んっくん
罰を与えてヤルぞ
ケツを上げて股ヲ開ケ…テレサ
は…はい…
アナタ…
ドビュッ
ズビュッ
赦してぇ…！
はぼっ
ゴプッ
んがっ
んあああっっ

妻から感じる心の距離感…
その不安は次第に僕の中で
大きくなっていった…

あんっ
はあっ
はあんっ
もっと深く突いてぇ♥
あんっ♥
あんっ♥
あはんっ♥
ここの声はまさか…
なんだ…?
いいわ
もっと
なっっ…!!?
テテレサ!!?
ああああああ♥
イクッ♥
イカせてええっっ♥♥

うわあああ
!!!
ハアッ
ハアッ
ハァ…
ふう…どうかしてるよ
テレサがあんな…
あん…
…な…
あ…
ドサッ…
グラ…
ゲー
ビクン
モッ
スン
ギシッ
ギュッ
っっっ!!!

海の魔物に囚われた凛々しき女司令が
人智を越えた快楽に堕ちる！
艦隊司令
アンジェラ
～苗床の女司令～
小説／NOVEL 089タロー
挿絵／ILLUSTRATION 露田米（つゆたこめ）

星に海というものが生まれて以来、その美しさと豊饒に魅せられる者が後を絶たない。

照りつける陽光に輝く、ブルーサファイアのような広い大海原。だがそこには、津波や嵐、孤立と迷走、飢えや渇きなどの過酷な死も潜んでいる。

それでも、海は間違いなく生命の母であり、様々な種が生まれ、この覇権を争うようにして消えていく。そして今も、人間という種が豊饒と命を賭けて戦っていた。

巨大な木造艦船が帆を連ね、隊列を維持して艦砲を放つ。鋼鉄の球弾は敵船の周りで水柱を上げ、または木目に巨穴を作っていく。そして敵船に取り付くと橋を渡し、屈強な海の男たちが剣を振り上げ乗り込んでいった。

「くらえ、この汚ねえヤツらが！」

「おらあ！　剣くらってくたばれ！」

敵船は僅か一隻。傍から見れば多勢に無勢、集団リンチに似た光景だが、その実、勝負は拮抗していた。

なぜなら――敵船の甲板で迎え撃つのは、鱗を持つ異形の魚人だったのだ。

「人間メ、大人シク我ラノ餌トナレ！」

耳障りな声を出す口も頭も、はっきりと魚である。そこだけ海面から出せば、大型の魚としか思えない容姿だ。尻の辺りには尾ひれもあり、全体的に魚類のフォルムを強く残している。

違うのは、進化したのか真似たのか、人間に似た四肢を持つことだ。おかげで陸も歩けるし物を持つことも可能だが、それでも魚類のフォルムが濃く、人間まがいの魚にしか見えない。

彼らはマーマン。近年になって確認された、漁村や商船を襲い略奪を繰り返す人類の敵だった。

これを討伐するのが今回の艦隊の目的である。しかし、人間同様に船を操り、四肢でもって船上戦をこなす魚人は甲板で斬り合って普通に同格。しかも海中行動も得意なため、目に見える頭数などまるでアテにならなかった。

「うああっ!?　こ、こいつら、どんどん海から飛び出てきやがる！」

「ヤバくなったら海に逃げやがって！　無傷なヤツが代わりに出てくる！」

これが連中の大きな強みだった。不利と見れば海中に逃げ、入れ代わりに新たな戦力を投入できる。海中に潜む兵力は甲板からは窺い知れず、まるで際限ない波状攻撃のようだった。

「コッチダ間抜ケナ人間メ、死ネ！」

「なにっ、今度は後ろか？　ぐはっ！」

はっきりと艦隊側が苦戦の状況。自艦さえもが突如海から甲板に来られて奇襲を受けている有様。船の数では圧倒しても、兵数だけならむしろ不利かもしれないほどだった。

だが、そんな中、一際腕の立つ若い女が勇ましく剣舞を繰り広げていた。

「怯むな！　引けばサメの餌と思え。海の戦士の覇気を見せよ！」

シミター片手に海賊帽の女は、まるで荒くれ者という挙動だった。細腕から繰り出す剣技は鋭く、マーマン特有の三叉槍を苦もなく捌き斬り返しを放つ。瞬時に鱗持つ腕が舞って魚人の悲鳴が甲板に響いた。

「オノレ、人間ゴトキガ！」

突如背後に海からの新手。が、女は動じない。上体を引いて槍を避けると懐に飛び込み刃を触れさせ、

「見え透いた手を！　てぇえいっ！」

「ギャアアアッ！」

一気に脇腹を撫で斬った。鱗は裂け鮮血が舞い、独特の生臭さが甲板を汚した。さらに懐から銃を抜くと、見もせずに横へ発砲。ドン！　という音と共に次なる新手が吹っ飛んでいた。

「甘い！　貴様らの声は耳障りすぎて見ずとも分かる！」

明らかに腕の立つ戦士。滑らせるような斬撃はシミターの特性を見事に活かし、単発の銃をも手品のように使いこなしていた。

しかしその風貌は、豪胆でありながら女性特有の美も損なっていなかった。

金の装飾を持つ前開きの赤いロングコートはまさに海軍か海賊を思わせる。膝まであるロングブーツもこの時代の女には似つかわしくない。だが、コートの下ではムッチリと膨らむ二つのバストが所狭しと弾んでいて、それを水着のようなブラが懸命に押さえている。よく見ればブラの先端に尖りがあって密かな色香を見せていた。

さらに魚人を蹴りつける足は美脚で、長いのによく脂が乗っている。意外にも白い太腿はまろやかで、ぷっくりと肉付くヒップなどは短いホットパンツが覆っているのみ。まるで快活な水着美女が海賊ルックを装っているかのようだった。

この時代、海に生きる者は皆軽装で、鎧武装などまずありえない。船乗りならば海に飛び込むことも珍しくないからだ。そのため不自然ではないのだが、それでも彼女には荒々しさの中に潜む凛々しさと色気があった。

「化け物どもめ、我ら海軍が野放しにすると思ったか！」

言葉通り、彼女――アンジェラは海軍で、艦隊の司令官である。毛先のハネた金色のショートカット、尖らせた目尻がボーイッシュな女の魅力を現す。大きめの瞳には戦意が瞬き、整ったアゴには透明な汗が煌めく。

そんな美しい女司令に、男衆も戦意を鼓舞される。さらに彼女は、またも手品じみた曲芸でクルリと懐から酒瓶を取り出すと。床に叩きつけ中身をぶちまけ、剣と銃で火花を放っていた。

「皆、火を放て！　船を潰すのだ！」

「そうか！　船さえなけりゃ大砲は撃てねえし積荷も運べねえんだ！」

「さすが海軍きっての美人司令、アンジェラ様だ！　冷静だぜ！」

美女の威勢に後押しされて流れは海軍が奪いつつあった。

現時点において船は、戦力的にも運搬的にも大きな位置を占めている。そして魚人の船は、長くこの一隻しか確認されていない。これを奪えば大打撃

に繋がるのは明白だった。
魚人らも狙いを悟ったのか、船の鎮火に意識を割かれて総崩れとなってきた。焦りから斬られ、撃たれ、魚臭い赤色を甲板の上に広げていく。
だが。防戦一色となった魚人たちは、不意に不気味な笑声を立て始めた。
「ヌゥ、オノレ人間ドモメ。ナラバ、我ラガ主ノ恐ロシサヲ思イ知レ！」
――主だと？　そう訝るアンジェラは、次の瞬間、魚人の背後に信じられない光景を見ていた。
突然、海が割れた――と思うほどの豪快な水柱が上がり、幾本もの太い触手が海中から伸びてきたのだ。
そう、触手。そう表現するしかない。吸盤まで持つタコのような足たちが、しかしそれとは比較にならぬ巨大さでもって自軍の船を襲ってくるのだ。本体は海中なのか窺い知ることはできなかったが、まるで神話に出てくる海の怪物のようだった。
「ば、バカな！　こんな化け物、御伽噺だと……」
唖然とするアンジェラは聞いたことがあった。かつて海を蹂躙し恐怖と破壊を撒き散らした恐るべき怪物、クラーケンの話を。
それは無数の触手を持ち、人を狂わす粘液にまみれ、本体はおぞましい姿だという。そして今、まさに目の前にいる相手は、御伽噺に出てくるそれとしか思えない風貌だった。
「くっ！　だがマーマンも実在したのだ、ありえない話ではなかった……」
情報不足を嘆く暇などない。今はこの怪物をどうにかしなければ。そう頭を切り替えるアンジェラだったが、相手は小型艦船ほども巨大で艦砲以外では攻める術もない。
そして艦隊は突然の恐怖に浮き足立ち、小回りの利く敵に砲の狙いさえ定められず、見るも無残に触手に粉砕されていく。
攻勢だったため敵艦にいる女司令は旗艦の指揮さえ満足にできない。必死にマーマンと切り結ぶものの、自軍艦隊は次々と沈み、歩兵たちも恐慌に襲われ刺し殺されていった。
「化け物だぁ⁉　ひ、ひぇえっ‼」
「こんなヤツ、勝てるわけないい‼」
「皆、がんばれ！　この船なら攻撃されないはず――うっ？　うぁあっ⁉」
味方を鼓舞するも、その思惑は浅はかだった。今いる敵船は確かに怪物の攻撃対象ではないが、触手が伸びてきて細い腰を搦め捕ってきたのだ。
そのまま宙に持ち上げられ、ギリギリと締め上げられると息が詰まって気が遠くなる。アンジェラは必死に仲間を見下ろし撤退を叫ぶが、最後の一人が無情にも魚人の槍に貫かれていた。
「ぐふっ⁉　あ、アンジェラ、様ぁっ」
「くっ～～くそおお……っっ‼　み、みんな、すまない……ぐあああっ！」
背骨が軋むほどの苦痛が襲い、美しい女司令はガクリと頭を倒してしまう。
今なお煌めく美しい海が、彼女と仲間の悲惨な敗北を無情なまでに映しこんでいた……。
――サァァ……サァァ……
薄暗い洞穴の入り口に、一人の女が横たわっている。海に程近く、微かな呻き声に混じって小波の音が優しい旋律を奏でていた。
「んっ、はぁ……ぁっ、んっ……」
女は意識がなく、小さく眉間を震わせながら悩ましげに身動ぎし声を漏らしている。両足を包む皮のブーツを、潮風が緩やかに撫でていた。
が――撫でるのは風だけではない。白く眩しい女の太腿、その柔肌を気色悪い指がゆっくりと滑っているのだ。
「んんっ、ぁぁ、何、この感じ……？　はっ⁉　こ、ここは⁉」
横たわる女――アンジェラは、内股に奇妙な不快を覚えて目を覚ました。
気づくとそこは見知らぬ洞穴で、自身は砂浜とも岩場ともつかぬ場所で気を失っていたようだった。
怪訝に思い身を起こそうとするが、腕が後ろから動かせない。しかもどうやら、簡素な石作りの寝台に乗せられているようだった。
まるで生け贄にされるかのような格好である。武器はすでに取り上げられて、海賊のような衣装も形なしだった。
そして、違和感ある下半身を見て。
「んっ、いやっ、何……？　はっ⁉　き、貴様らはマーマン！」
女は目を剥いて仰天していた。
何とそこにはマーマンたちが寄り集まって、物珍しげに見下ろしていたのだ。瞬時に怒気が膨れ上がって歯を剥くも、やはり両腕は後ろから動かない。どうやら縄で縛られているようだった。
「くっ、おのれ放せ！　よくもわたしの部下たちをぉ、っっっ‼」
つまるところ、自分は敵の手に落ち拘束されている。ここは魚人らのアジトというところか。これで反抗できると思うほどアンジェラは楽天的ではなかったが、隙あらば喉笛を噛み千切ってやりたかった。
だが、身動きのとれない女司令は、先の違和感の正体を改めて悟らされることになった。
――すりっ、すりすりむにむにっ。
「う、うあっ？　な、何をする貴様ら！　ひぁ、このっ？　触るなあっ！」
石台に伸びた乙女の美脚。そのコートから覗く滑らかな太腿が、いくつもの手によって幾度も念入りに撫でられていく。ボディチェックより入念なタッチに彼女は狼狽を隠せなかった。
「な、何だこのっ⁉　そんな、んっ、ぁ、根元っ……は、離せ汚らわしい！」
大人びた太腿をじっくりと撫でながらスベスベの素肌を感じられる。まるで愛撫のような繊細な動きに内股が小さく震えてくる。しかも魚人らは確かめるように柔肉を揉みながら、股の付け根のラインをも指でスゥ、と撫で付けてくるのだ。くすぐったさと羞恥心が背筋をゾゾッと這い上がってくる。

著者近況　またも触手を書かせていただきました。読んでいただけるとありがたいです。やっぱり簡単にはいかないものだ、などとシミジミ思ったりします。

「フム、柔ラカイ肌ダ。鱗ノ感覚ハ無イ。人間トハ変ワッテイル」
（く、当たり前だっ！　そんなことを確認するために？）
これまでとて何度も遭遇した異種族である。相違点など今さらの話だった。だというのにマーマンたちは、魚類の瞳をギョロリとさせて不思議そうに素肌という素肌をペタペタと触ってくる。
「妙ナ感触ダ。コレガ人間ノ雌ノ足カ」
「白身ノヨウナ肌ダ。一枚ノ鱗ノヨウニ滑ル。シカモ、モチモチシテイルゾ」
「あっ、やめろ！　こいつ、化け物のくせに……殺してやる……んんっ⁉」
（いやっ！　何て触り方っ。ヌルヌルした指で揉み解すみたいにっ？）
まさにためつすがめつという様子。指先を何度もスリリと滑らせ若いもち肌に鱗肌を擦り付けてくる。
もちろんそれは不快なのだが、微弱な刺激で肌が敏感になってくる。脱出しようと蹴りを試みても、逆に掌で押さえつけられ、ムニュムニュと太腿を揉まれる羽目になってしまった。
しかも相手は女の扱いを知らないのか、無遠慮に股間まで撫でては敏感な肉土手さえプニプニとつついてくるのだ。ホットパンツの内側がヒクつき、あっ⁉　と驚きの声が漏れた。
「うあ⁉　や、やめろっ、この！　何の真似だ、こんなことっ？」
これが人間ならレイプを想像するだろう。が、今まで魚人に犯された例など聞いたことがない。まさかと思い想像を打ち消すアンジェラ。
するとマーマンたちは、今度はむき出しのヘソをなぞって魚の口を開いた。
「我々ニハ人間ナド、雄モ雌モ同ジニシカ見エナイノデナ。色々ト見テ触ッテ確カメネバ分カラナイ」
「そ、そんなっ？　あ、あぁぁっ、触るなぁぁっ？」
恐らく人間が犬や猫を見て、雄か雌か判別できないのと同じだろう。それゆえに、劣情も抱かないのに乙女の肢体を丹念にまさぐってくる。
赤いコートの下には水着並みの衣装しかない。これは海に生きるものならごく自然だったが、今は仇となって浮いた肋骨をなぞられていく。嫌悪に身を捩る女の肢体は、しかし恐怖に胸高鳴らせてしっとりと薄く汗を浮かせる。
ヒップはパツンと膨らみを持つのに捩れる腰はほっそりとくびれている。日頃の鍛錬の賜物だ。縦長のヘソも美しく、軍人らしからぬ色気があった。
「く、このっ……！　やめろ汚らわしいヤツらめえっ！　んっ、うく……！」
そんな美体を触られていくと、発達した性神経が不本意に目覚めさせられる。悪寒が背筋をゾワリと駆け抜け羞恥に頬がカッと熱する。
気高くあろうと心がけるも、無遠慮な掌たちは、まろやかな腰や優しい皮下脂肪の乗った下腹、鎖骨周りなどをゆっくりと、じっくりと、這いずり回ってくる。愛撫を思わせる奇妙な手つきに『初心な』本性が動揺を隠せない。
そして、身動ぎ揺れる二つのバスト、そのブラに水かき持つ指が伸びると、
――ビリッ！　ぷるったぷりんっ！
「うあっ⁉　く、くそ、見るなあっ！」
僅かな抵抗の後に紐が千切れ、艶かしい生乳房が露出してしまった。それらは、ほか以上に日焼けを知らぬ形良い巨乳だった。白桃のような色合いと形に、野苺色の小粒を頂く丸々と実ったGカップサイズである。
これを人間でないとは言え、これ見よがしに晒されては女の羞恥も強まるばかり。しかも魚人たちは柔らかに揺れる乳肉をつつき、
「フム。胸ガコンナニ膨ランデイルゾ。間違イナク雌ダナ」
と、物珍しげにぷるぷると揺すってくるのだ。頭の中がカァッとなって思わず赤面し歯噛みしていた。
（くぅぅっ、畜生っ！　お、男にだってまだなのに、マーマンなどに触られてぇ……っ！）
アンジェラとて女。二十一歳の若い身体は本能で男を求めてしまって夜な夜な疼くときもある。いずれは勇猛な海の男に純潔を捧げる日が来る、などと夢想しなかったといえば嘘だった。
それがよもや、人間ではなく魚人に視姦され弄られる日が来ようとは。
「何ト卑猥ナ乳房ナノダ。デカクテ張リ詰メテイテ、マルデ牛デハナイカ」
「く、黙れっ！　んっ！　す、好きで、こうなったわけでは……！」
（んんっ⁉　くそぉ、っ！　こんなヤツらに弄られて……お、大きくて恥ずかしい胸、馬鹿にされてぇ……っ！）
男衆の中にあれば、たわわな乳房に欲情の目を向けられることも多々ある。そのたびに彼女は、図らずも実りすぎた女の証を疎ましく思ったものだ。また、軍で女が出世すれば色々噂も立つものだし、『あのデカ乳を使って提督をベッドに引きずり込んだのだろう』とまで揶揄する輩までいた。
けれど実直なアンジェラは男に媚びることなく、巨乳への色目もじっと耐えてきたのだ。それを、初めて生で視姦されて牛のようだと嘲笑されれば、悔しくて恥ずかしくて顔を背けずにはいられなかった。
「んんっ！　このぉ……気持ち悪い手で、ぁっ、いや、触るなぁ……っっ！」
それでも――淫らな刺激を与えられて乳肌の奥に疼きを覚える。興味本位の視姦とタッチがより恥辱的感性を高めて、醜い敵のぬめる肌触りに乳房の神経が集中してくる。どれほど目を背けても、適齢期の若い女体は本能の部分で性の刺激を拒みきれないのだ。
「んはぁ、うっ……このっ……？」
「オ前ラ人間ハ、ココモ好キナノダロウ？　牛ノヨウナ乳デ生殖ヲ楽シムナド下品ナ雌ダ」
「だっ、誰が⁉　うう、貴様らなんかに感じるものか！」
性知識はあるらしく、胸を触られて感じる人間を魚人は嘲笑ってくる。おかげで恥辱は強くなったが、逆に反抗

著者近刊　『デキる妹はイヤですか？2』『誘惑プリンセスはおキライですか？』『ママンな恋人はいかがですか？』『デキる妹はイヤですか？』『メイドなお姉さんはいかがですか？』『オタクな巫女さんはイヤですか？』　好評発売中！

意識も強くなった。
そう、こんな魚モドキに感じるはずがない。しっとりと火照った肌を無視してアンジェラは己を叱咤する。
だが、魚人どもはこれで済ませるはずもなかった。彼らはヒレ付きの指で何かの瓶を持ってくると、中にあった透明な粘液を乳房に滴らせてきたのだ。
「デハ、コレヲ使ッテミルカ」
ポタリ、ヌトリ、と粘り気のある液体が瓶から乳房に垂れ落ちてくる。まるでオリーブオイルのようなそれは、しかし肌に滲みてきた途端。
「んひっ⁉　あ、あ……ぁああっ！　な、何だ、これはぁっ？」
（あ、熱いっ。いや、冷たいのに、肌が……ジンジンしてきてぇっ？）
アンジェラは徐々に狼狽しながら豊かな双丘を見下ろしていた。仰向けで小山のようになった巨乳、その表面にケーキのホイップのように粘液が重なっていく。それが肌に滲み入ってくると、輝く乳房に熱が広がりジクジクと疼きが生まれてしまうのだ。
バターでも塗られたような奇妙な感触。痒みにも似た不思議な切なさ。それらが渦巻くように乳房を覆ってトクッ、トクッ、と心音が高鳴ってくる。オイリーになった乳肉表面は、まるで敏感な粘膜になったかのようだった。
「あっ――あぁぁ、いや……胸ぇ、胸がぁ……んっ！　せ、切なくぅ……？」
だんだんそこがもどかしくなって、つい腰が震えてしまう。すると巨乳もぷるんっ、と色っぽく揺れてしまう。
そんな自身の淫らな仕草に、困惑し、か弱くイヤイヤと首振るアンジェラ。そして、魚人の掌がぎゅっ、と乳房を掴むと堪らず嬌声を上げてしまった。
「あんっ⁉　ひぃ、ひぃいっ？　だめ、だめやめろっ！　それ、だめぇっ！」
（な、何だっ？　ヌルヌルになった胸、肌がっ、すごく敏感にぃっ？）
明らかに異常だった。先程同様に触られただけだが感じる刺激はまるで別物。ピリピリと甘い電流が走って乳房の奥が痺れるように気持ちよくなる。
気持ちよい――そう、悔しいが気持ちよいのだ。鱗まみれの異種の指が、そのブツブツ感が逆にびっくりするほど刺激的で、グイと揉まれると感度も上がって胸が愉悦で波打ってしまう。
「あんあんっ！　だめ、揉むなあっ！　あぁ指っ、ぬ、ヌルヌルってぇぇっ？」
思わず高めの艶声が漏れて、くびれも女の恥じらいで捩れる。魚人の指に吸い付くバスト、その美白の膨らみは確実に揉み解されて、柔らかく、艶かしくなっていく。感度もより高まって、いやらしく指から溢れる乳肉は甘やかな桜色に染まりつつあった。
「んくっ、こ、このっ、卑猥な触り方、してぇ……んふうっ！　ううんっ⁉」
「ヤハリ、アノ方ノ体液ダ。人間ノ雌ニハ効果的ダ」
「イヤ。コノ雌ガ感ジヤスイノダロウ。乳デコウモ悦ブナド、コノ淫売メガ」
「違っ⁉　ぁあ誰が、淫売なんかじゃ……！　あぁいや胸ぇぇぇんんっ！」
覗き込むマーマンどもは魚顔揃えて嘲り嗤うが、今のアンジェラはそれを睨む余裕もない。左右から伸びる手にバストをムチュムチュと揉みしだかれると、切ない疼きが媚電に変わって乳房の芯まで熱く蕩けてくるのだ。嫌悪が次々と肉悦に侵され声すら殺せぬ有様だった。
（だめっ、胸っ、ほんとに感じやすくなってっ⁉　あの粘液が原因なの？）
とは言え味わう快楽は本物で、丸いGカップはつきたての餅のように柔らかくなる。気づかぬうちに先端が尖り、人間特有の発情具合を如実に表してしまっていた。
「フフ。先端ガ立ッテキタゾ。人間ハ感ジルト、乳首ガ勃起スルノダロウ？」
「ち、違――！　誰がそんな……っ！」
カッと頬が灼熱を感じて慄くように首振るアンジェラ。けれど乳首を指で摘まれ、これ見よがしにシゴかれれば、ソコがピリッと甘電して、ひんっ⁉と鳴き声が漏れていた。
「イイ声デ鳴ク雌ダ。ココガ良イノカ？　ンン？」
「はぁぁいやっ！　やめっ！　ちく――ああ擦っちゃいやぁぁっ！」
明らかに痴態を嘲笑われては羞恥と屈辱もみるみる高まる。何かの薬が原因とは言え、陵辱に悦びを示すなど海軍司令として酷い名折れ。せめて声だけはこらえたいのに、胸の野苺色はますます硬くシコってくる。
そして、そんな勃起乳首を魚口に吸引されると、
「ひぁぁぁぁぁっ⁉　ひぁぁだめぇだめだめぇっ！　す、吸っちゃ、キュポキュポしちゃだめぇぇっ！」
堪らず腰をのたうたせていた。舌のない魚類の唇、その空虚な穴に吸い付かれると乳首が小刻みに伸縮させられますます感度が上がってしまう。
おかげで匂い立つ汗を噴いて、太腿は淫らに擦り合わされた。細いヘソまわりもしなやかにくねって雌の肉欲に染まりつつあった。
その様子を楽しむ魚人たちは、調子に乗って皆で吸い付き巨乳を肉悦の塊とする。乳首はもちろんアンダーラインさえチュプチュプ吸って、薄い朱色のキスマークを乳肉中に広げていった。
「あふぅ、ふあうううっ！　あっいや、あんあん！　もぉだめぇっ！」
「チュルポンッ……フフフ、淫ラナ雌ダ。デカイ乳揺ラシテ悦ンデイルゾ」
「フフン。人間ノ雌ハ浅マシイ。デハ、ソロソロココモ見セテモラオウカ」
「はぁ、はぁ、んっ、やめてぇ……あっ⁉　だめぇ、そこはぁっ？」
もはや罵倒できず拒絶しかできない美女を前に、マーマンたちも頃合いと見たらしい。薄桜色に染まった太腿をグイッとブーツごと左右に開く。
そして、汗と何かに濡れたホットパンツを、槍を使って引き裂くと。
――ビリビリイッ！　ヒクッ、ヒクンッ……。

「ホウ。コレガ人間ノ、マ■コカ」
「はぁ、はぁ、く……っっ！　お、おのれぇ、み、見る、なぁぁ……っ！」
赤面する美女の淫唇が、ついに魚人らに目撃されてしまった。そこは歳頃らしく成熟したパックリと割れた肉裂で、淫戯によって濡らされていた。
「フン。人間ラシイ淫ラナマ■コダ。モウスッカリ濡ラシテイルゾ」
「～～っ！　う、嘘だ、そんなはずっ……！」
彼らの言う通り、すでにアンジェラは官能の昂りを隠しきれないでいた。割れ目は細かく震えが走って、淫欲の雫をトロリと後孔まで溢れさせる。しかし、淫らと評するには色合いが薄く、恥毛も少ない初心なピンクのクレヴァスでもあった。
そして屈辱の発情具合は、マーマンたちによりすぐに証明されることとなった。あっ!?　と驚く美女は石の寝台の上で仰向けのまま、盛大に大開脚させられる。
桜色の内股も麗しいV字に開く乙女の秘所。その淡い花弁をクパァ……と指で開かれると、粘性のある透明な蜜をネトリと掬い取られてしまったのだ。
「見ロ。コンナニ濡レテイルゾ。淫乱ナ雌メ、魚類デサエ相手ハ選ブゾ？」
（ううっ、そんなぁ……!?　ほ、本当に、濡れて……あんなに指にべったりと……わたしって、こんなに濡れやすいの……？）
目の前に持ってこられれば、とても否定できる要素はなかった。男の中にあって女の己を殺し続けた美女は、知らぬ間にセックスを求める敏感で濡れやすい肢体へと変わっていたのだ。
しかし、改めて愛液を示されると、魚人に触られて感じた事実がグサリと心に突き刺さった。
おかげで凛々しさにヒビが入って弱々しげな女の顔となる。男に囲まれ、怯えながらただ犯されるのを待つしかない初心な少女のような顔に。
そして。しっとりと濡れた煌めくラビア、その儚げな中に無遠慮な指がツプリと忍び込んでくると、何とも可憐で悩ましい悲鳴を上げていた。
「んあうっ！　さ、触るっ～～ひっ、くひいいい!?　探るなぁあぁっっ!!」
縦細の入り口から三センチほど。粘膜内部の出っ張りを擦られ官能の媚電がピリリと走る。乙女にとって非常に大切な清い証を触られた感触だった。
（ひいいっ!?　そ、それ、処女膜ううっ!!）
雄々しい女司令の汚れを知らぬ生娘の証。それを指でじっくり触られると、微かな痛みと官能の刺激がジンジンと腰に響いてくる。と同時に、激しい羞恥と怯えが走って腰がか弱くくねっていた。
「ンン？　コノ暖カク柔ラカイ壁ハ。オオ、コノ確カナ弾力ハ、マサカ？」
「い、いや、やめろぉ……！　それ触っちゃ……はうう!?　あっあぁっ!!」
けれど懇願は聞き入れられず、指先でコリコリと擦られてしまう。僅かに官能が痛みに勝って入り口がキュッ、と切なげに締まる。
（いやっ！　そんな……誰にも抱かれたことないのに、こすられて……指なんかで、破かれちゃうう……っ!?）
思わず涙腺が緩んでしまう。醜い異種族の、それも鱗まみれの指で膜を裂かれるかと思うと、どうしようもない無力感で心のヒビがどんどん深くなってくる。しかも相手は、それを破るでもなく、まるで形を調べるようにゆっくりと出っ張りをなぞってくるのだ。大切な純潔を玩ばれては、悔しさと刺激で思わず膣内もトプッ……と涙を零してしまった。
だがこれは魚人たちにも予想外だったようだ。数人で顔を見合わせるとまた嗤い、先程とは別の瓶を手に、
「オオ。コノ雌ハ確カニ処女ダ。淫乱ナ人間ニハ珍シイ」
「コレナラ処女膜ヲ治ス必要モナイナ。デハ、コレヲ塗リコムトシヨウ」
と、また新たな粘液を指に掬って――何と処女膜に塗り込んできたのだ。
「ひいいあぁあいやあぁっ!?　なっっ何をお!?　何を塗るううう？」
ふくよかな臀部が懸命に暴れようとする。が、腕は縛られ足は捕られ、ゆうに十人以上はいる相手に抵抗できるはずもない。鱗だらけの指が這いずりネットリと処女膜に塗り広げると、おぞましい性感でヒダがビクビクと収縮する。
「あひいっい、いやあっ!!　やめてぇ膜ぅ、膜っ、指でヌルヌルって……んきゃんんっっ!!」
「フフ、コレハ秘伝ノ薬ナノダ。アノ方ノタメニ、シッカリ塗ッテオカネバ」
もう、わけが分からない。ただ犯すだけならいざ知らず、何者かのためにと得体の知れない薬まで塗るのだ。敏感なヒダが刺激されて淫らな電流が横暴に駆け巡った。
しかも、塗られた薬はやはり粘膜を熱くさせて無理矢理感度を高められる。まるで活力を吹き込むような、腰骨に響く熱い媚電が、膣肉をみるみる甘電させてヒップをぷりぷり躍らせる。
（だっだめえ！　膜、膜がっ、熱くなって……腰っ、痺れてぇ――っっ!!）
襲い来る熱い官能に、膣はヒクつきヒダは小刻みに蠕動していく。不可思議な昂揚が初心な膣粘膜をジュクジュクと濡らす。
「はぁ、はぁ……あっ？　あっあっいやっ！　やめっ、さわっ、るなっっ！　あぁあ中あぁあっ!!」
指の鱗は凹凸となって中を絶え間なく擦り立ててくる。魚らしいヌメリが、粘液の熱さが、性感帯を次々と刺激し、滲み出る淫蜜に濃さと粘つきを与えていく。
――ヌチョヌチョヌメヌメ、クチョクチョ、チャプリッ……！
「膜うっだめえっ！　あっあっ擦っちゃ、強くしちゃ、や、破れ、壊れちゃうううっ!!」

追い詰められたくノ一の最後の手段は……!?

隠密お菊の くノ一淫法帖

漫画 COMIC こうきくう

観念しろ盗人(ぬすっと)め

我ら御庭番(おにわばん)二人に追われ逃げきれると思うたか

!

お前も忍(しのび)なら潔(いさぎよ)く諦め城の見取り図を返すがいい

おとなしく返したってどうせ殺すのでしょう?

けど捕まって殺されるなら…

!?

最後に女の喜びを味わわせてよ……ね?

おっ！ふぉぉぉ
ふふ 引っ掛かったわね
んふ♥
ぶぶぶぶぶぶ
じゅるるる
ぐっぐっ
んぁ♥
私の口技で堕ちなかった男は居ないのよ
口もスゴイが乳もスゴイな
全くとんだ淫乱娘よ
んぁ♥
ちゅぱ ちゅぱ
たぷ たぷ
足腰立たなくしてあげるわ
おい 見てみろ
鎖帷子から乳首が顔を出してるぜ
ぎゅ
あん♥
くっ 調子にのって
あー
くぱっ
けど男なんて一回射精させてしまえばこっちのものよ
はむっ
くノ一の性技味わわせてあげる

柔らかい口肉がイチモツに絡んでくる！
ぬぅぅぅ
二本咥え込んでこの吸いつきだと!?
くはぁ
舌が裏スジとカリを擦りあげてきよるっ
くっぅ
吸いだされる
ぢゅる
ぢゅる
レロ
レロ
レロ
くぅぁあっ
ぜッ
ぜッ
ぜッ
よし！
萎えてる今の内に
スチャ
ぜッ
えっ
ひぎぃ！
ポロ…

な…んで？射精したのに…？

日々禁欲生活を強いられてる我らの益荒男は一発二発じゃ衰えはせんわ！

下の口は上と違って狭くて硬い肉壁で処女の様だな

そうよ処女だったのに…

だがコレも…うっ

お主早すぎだろう

処女をこんな奴らに奪われるなんて…

いやいやこの女相当な名器の持ち主よ

おほぉそいつは結構な売女だなぁ

ほれ！最後まで吸いとらんか

では俺は尻穴をいただくかの

嘘でしょソコも!?

お主も好きだのぉ

KIRARA★KIRARA

きらら★キララ

魔法少女ってたいへん！

元気いっぱいのきらら！
…でも今度はブルマ姿でピンチに!?

著者近刊好評発売中！

あとみっく文庫
『思春期なアダム6 幼生期の襲撃』

第7話 どうなってるの？ 魔法少女の異変

小説 NOVEL／さかき傘（かさ）
挿絵 ILLUSTRATION／浅沼克明（あさぬまかつあき）

天高く馬肥ゆる秋――。
読書食欲ダイエット。色々とある季節だが、きららたち星宮第二学園初等部にとってはこれだろう。
スポーツの秋。

――パァンッ。
派手にあげられた砲音を合図に、四人の少女が一斉にスタートを切った。
クラウチング姿勢から飛び出せば、夏の灼熱を引きずる陽光のなか涼しさをまといだした秋風が、心地よく頬を撫でた。
「行けーきらら！　そのままそのまま！」
友人の元気な声に押されて、少女はさらにブーストをかけた。後ろでまとめた金髪が尻尾のようにふるんと舞う。餌を見つけた子リスのように、小さな身体と不釣り合いの躍動感で、二位以下を大きく引き離しゴールを突っ切った。
「おっしゃー！　これでクラスリレー最後の一枠はきららに決定だーっ！」
スタートのほうにいるライカが歓声をあげる。
きららは――いつもならもっとすごいスピードで飛んだり跳ねたりしているので、どうも『速い』という実感がないながら、
「いぇいっ♪」
元気にVサインを向けた。

秋。運動会まであと一週間に迫った、十月中旬のある日のこと。
本日の体育の授業は、その運動会でクラス対抗リレーに出るメンバーの選抜だった。
足の速い子から選ばれ、最後の一枠はきららになった。他のメンバー、ライカ、ナナ、姫妃の三人も速いので、優勝を狙える布陣である。
「最近きらら調子いいよなー」
チャイムが鳴り、校庭から引き上げるとき、ライカがぽんと肩を叩いてくる。
「最近になって急にまた速くなりましたものね。成長期なんでしょうか」
逆隣にはこちらも仲良しのミサトが。
「そかな？　えへへ、わたし背ぇ伸びた？」
「……」
「なんで黙るのよっ」
伸びてない自覚はあるのか、肩を落とすきらら。
「まあ成長期は確かだよ。最近このあたりが妙に出っ張ってきてるしさ」
「わひゃっ。ちょ、ライちゃんくすぐったい」
「んん～？　こら逃げんな、成長を確認してやるってんだから」
ブルマ越しのお尻を撫でられて、つい声が上ずってしまった。ニンマリしながらセクハラしてくるライカに、少女はきゃあきゃあ言いながら逃げる。
実際、最近のきららは、身長こそ伸びないものの、お尻にも胸にも急激に肉がつきだしている。
足が早くなったのも。子どもな肢体が大人びてきているのも。どちらも原因は同じだった。
夏ごろからきららに課せられた使命。
それを果たすためによく身体を動かすようになったことで、必然的に運動神経は底上げされ。
またそれを果たすべく真夏に起こった悲劇が、少女の肢体を大人へと変貌させだしている。
「おらっ。次の授業始まるぞ早く戻れ」
「「ふわっ」」
はしゃいでいた三人を、突然後ろから竹刀がつついた。
ふり向くと、体育の木村先生だ。いつも持っている竹刀で美少女三人のお尻を狙ってきたのだった。
三人は露骨に嫌な顔をする。男子たちがゴリ村なんてあだ名するこの先生は、典型的な暴君体育教師で。気に入らない生徒はすぐグラウンドを走るよう怒鳴るし、可愛い女の子にはべたべたしてくるしで評判がよくない。
いまも叱るならぺしっと叩く程度でいいのに、先っちょをぐりっと股間にねじ込ませてきた。見ればいかつい顔を下劣に歪めている。
関わらないのが一番だと駆け足で立ち去る三人。
教師は満足げに美少女たちの股間に触れた竹刀の先を撫でていた。
「ゴリ村め～、ムカつく！」
逃げおおせたあと更衣室につく前に、ライカの怒りが爆発した。
木村はもともと悪名高い教師で、女子へのセクハラが激しい。他にも大勢被害にあっているらしく、地団駄をふむ少女に他の子からも多数賛同の声が上がった。
「あいつ絶対変態だよ。家でパンツ食べてるよ」
あまり多くない性知識から『変態がしそうなこと』を絞りだして怒る。
「……～」
隣の二人の声は小さかった。
すでに意識が怒りへ移っているライカとちがい、太ももをモジつかせたり、ブルマの食い込みを気にしたり。竹刀で突かれた股間ばかり気にしている。
体つきの成熟したミサトはともかく……ライカより子どもに見えるきららまで。
その意味合いに気づく者はいない。
二人がこの場の女子たちより、はるかに『性』に敏感になっている事実に。
クラスで一番大人なミサトはもちろん、ライカよりよっぽどお子様なきららまで、異性を強く意識していることに。

☆　☆

「何かあったのか？」
「ふぇっ⁉」
幼なじみには気づかれた。
帰り道でのこと。いつものように肩をならべて下校する、お隣さんのタダシが小首をかしげる。
「最近ヘンだぞお前」
いつもなら漫画やゲーム、趣味のサッカーの話しかしないのに。今日に限って神妙な顔の少年。
「へ、ヘンってなにがよ。失礼ね」
きららは平静を装いこそしたが、同時になにを言っても誤魔化せないだろうことを漠然と感じていた。
この幼なじみは自分の異変に自分より聡い。
「夏ごろからヘンじゃん。悩み事でもあるのか？」
「……別に」
夏ごろから……悩みがあるのはもちろん、悩み始めた時期まで言い当てられてしまった。心を裸にされた気分で顔を赤くする少女。
夏に始まった十萌きららの使命。
それは足が速くなったり、身体が女性的に成長したりといい影響こそあったものの。やはり暗鬱な側面が大きかった。幼なじみを心配させるくらいに。
とくに、
「アキラが何か言ったとか」
「ッ……」
その名が出ると、二人の空気ははっきりと変わる。タダシは声に不快感を滲ませ、きららは怯えたように身を強張らせた。
佐山アキラ——クラス一モテて、可愛い子が好きなので美少女のきららによくちょっかいをかけて。そしてタダシとは仲が悪い。彼の名が出ると。
秋を感じさせない日差しの中、気持ちの悪い沈黙に包まれる二人。

きららは、ンくと生唾を呑み、
「大丈夫だってば。それよりさ、男子リレーはどうなった？　タダシ入れた？」
笑って話題を変えた。
話をそらしたのも笑顔が作りものなのも気づかれただろうが、タダシは気を使い、
「あったり前だろ。余裕でアンカー取ったよ」
合わせてくれた。Vサインしてみせる。
アンカーは、足の速さで選抜されるリレーメンバーでも一番速い者に与えられる栄誉だ。ちなみに女子のアンカーはライカが獲得している。
「ちぇ～。やっぱタダシは速いかぁ」
「スポーツマンだからな」
「よく言うわ。毎朝遅刻ギリギリだから、ダッシュで鍛えてるんじゃない」
「……すんません」
「ふふっ、まあ私もソレで鍛えられてるけど」
二人は下校だけでなく、登校もいつも一緒している。寝坊の多い彼と二人、ダッシュで。
少女はようやく笑顔になり、肩をすくめる。
「でもタダシは所詮男子の一位よね。私、タダシに負けるなんて思えないんだけど」
「なにぃ？　男子が女子より遅いわけねーだろ」
「あっ、いけないんだ～。そういうのダンションジョシって言うのよ」
「男尊女卑な」
「それそれ。とにかく、あんたが私より速いなんて認められない」
ぽんと少年の肘をつつくきらら。
「私のが速いっっ！」
それを合図に、家までのあと500メートルほどの直線を一気に駆け出した。
すぐ意図に気づいた少年は、やれやれと苦笑し、
「甘いっっっ！」

ダッシュでついてくる。
そのまま競争になった。車の見えない直線距離を、通学カバンをガタガタ言わせながら二人して駆ける。
やはりというべきか、少年のほうが少し速かった。ちょっとずつちょっとずつ少女を追い越していく。
けれど身体ひとつぶん前に出たところで、少年は加速するのをやめた。
少女の少しだけ前を、少女の歩幅に合わせて走る。
負けているのに、なんだか嬉しくて、きららは不思議な安堵を覚えながら彼の背中に従った。
——と、家まで30メートルを切ったところで、
「髪のことで、さ」
「え？」
「髪のことまた誰かに言われたなら、俺に言えよ」
タダシが背を向けたまま、小さな声でつぶやく。
「相手が誰でも俺がブッ飛ばすから」
それだけ言うと、合わせていたスピードをはね上げた。こっちには背を向けたまま、挨拶もなくそのまま自分の家へ入っていく。
「……」
残された少女は、一瞬きょとんとしてしまいスピードが落ちたものの。
「うんっ、ありがとタダシ！」
照れくさそうに玄関に消える彼の背に大声をぶつけて、そのまま隣の自分の家へ飛び込んだ。

☆　☆

「ただいまっ」
いい気分で家に入るきらら。
全速力だったので息が切れたし汗をかいた。荷物も置かずにリビングで麦茶をもらう。暑苦しいので靴下や制服をぽいぽい脱いでいくと、母から「部屋でやりなさい」と怒られた。

著者近況　どもです。さかき傘です。今回いきなり7話に飛びました。2～6話についてはエッチシーンがないので永久に僕の頭の中ということで。

荷物を持って自室へ。

……中から聞こえる物音に、いい気分が半減する。

『ボリボリゴキュゴキュんぐんぐッぷはぁ～っ！やっぱコンソメ味にはコーラだァメ』

ドアを開けると……地獄だった。ただでさえ夏物、秋物、冬物の服のいれかえ時期で、収納棚の出しっぱなしな室内は整頓されていると言いかねるが。

ド真ん中ではテレビに向かって、お菓子とジュースで宴会している、毛玉のような生き物が。

『初代はやっぱり8話ァメねぇ。個人的には27話のノリも素晴らしいだと思うァメが』

「……」

『それはそうとユイのBDはいつ出るァメ。さくらはもう出てるのに。セイントテールも全然……』

「散らかすなッッッ!!」

怒鳴った。

尻尾で1・5リットルのペットボトルを支えながら、両手でポテチをほお張る毛玉は、ヒゲをぴんとさせて。

『ああきらら。おかえりァメ』

「散らかさないでよ、まったくもう」

せっかくの甘酸っぱい気分が害された。眉間に皺を寄せながら荷物を置いて毛玉が陣取るソファに腰をおろす少女。ポテチを一つまみ。

「お菓子ジュースでプリキュア三昧。いいご身分ね」

『なに言ってるァメ。これはきららを一人前の魔法少女に導くための、エマの大事な勉強ァメ』

「はいはい」

二ヶ月前、きららを魔法少女に変え。大変な生活に引きずり込んだ不思議生物。エマが胸を張る。

こいつと出会ってしまったせいで自分は、魔法少女マジカル☆キララとして戦いに明け暮れることになったうえ。大切なものを色々なくして、生活の端々で憂鬱な思いをすることになった。

思うと少しムッとなるのだが……。

「いま見てたの8話？」

『うんァメ。きららも見るァメ？』

「うんっ。巻き戻して」

『おっと、8話を見るときは最低6話からァメよ。いきなり見るよりずっと感動できるァメ』

「はーいっ♪」

楽しそうにぱりっとポテチをほお張った。

魔法少女マジカル☆キララの誕生は、いまから二ヶ月前。八月の半ばのこと。

親友のミサトが餌食となり、男子たちの淫惨な慰み者にされているのを見たときからだった。

マカイジュの種と呼ばれる悪魔の回路の仕業で、身近な人たちがおかしくされてしまったのだ。自身も襲われかけたきららだが、エマの助けで変身、ミサトを助けに向かう。手ひどくやられ、おぞましい汚辱にさらされたが、なんとか逆転できた。

だがマカイジュの種はひとつでなく、キララの戦いは現在も続いている。あれから五度出撃したが、まだまだ大量の種が残っているという。

戦いはすでに義務だった。種のせいで困っている人がいることもあるが、なによりミサトが苦しむ。彼女が種の『眷属』として陵辱されていた間の記憶は、普段は魔法で封じているが、別の種が発動すると解ける。男子たちの前で用便しながらひぃひぃ言わされていた記憶が、蘇ってしまうのだ。

ただ魔法少女としての戦いは辛い。反射神経が研ぎ澄まされて足が速くなったものの、あとはほとんど辛いことだらけだ。痛い思いはするし、睡眠時間は削られるし、住み着いた不思議生物に部屋を散らかされるし。

なにより辛いのは、記憶。

ミサトや他の種の影響を受けたものは、戦いさえ終われば忌まわしい記憶から解放されるが。きららは覚えていなければならない。

初めての戦いでクラスメイトの宮代俊哉（みやしろしゅんや）に尻穴を玩弄されたことも。タダシの嫌う佐山アキラにファーストキスと、処女まで奪われたことも。

ミサトを。みんなを守るため、戦いをやめるつもりはない。これからもがんばっていくつもりだ。

けれど気持ちひとつでは乗り越え難いほど、魔法少女に課せられる使命は重かった。

押しつぶされるほどに。

「あと94個だっけ？」

夜十時、ベッドに寝転がるきらら。エマもタンスの上に作った小さな寝具に転がりながら、

「うむ！　二ヶ月で六つ、まあまあなペースァメ」

あれから種が現れたのは五回。なんとかすべて切り抜けてきた。淫惨な目にあうこともなく。

ただ……。

「はーぁあ。先は長いなぁ」

そもそも事件に巻き込まれること自体が暗鬱だ。少女は大きくため息をつく。

「別にあれから危険な目もあってないァメ。最近じゃ戦うのに慣れてきてるァメ？」

「うん……戦うのには慣れたけど」

戦いそのものは大したことなかった。魔法少女に変身したキララは、常人離れした動きができるからほとんどの危険は回避できるし。攻撃に移れば一撃で相手を倒してしまえる。

「いい運動だと思うァメ。おかげで最近、足が速くなったって言ってたァメ」

「そうだけど……毎回気まずいんだよ。ミィさんとはギクシャクするし、宮代君や佐山君はアレだし」

最近思うことは、マカイジュの種そのものよりも、種の影響を受けた人間――『眷属』のほうが厄介だということである。

著者近刊　『思春期なアダム1～6』『ワルプルギスの淫夢2』『双子姫のカノン2』『サムライいにしえ～しょん』『ままままま』『つよきす2学期アナザーデイズ　ツンなごみと教室の2人と少し大人になった姫の場合』『かみばに！ 九条天音の夏休み』『ほしフル 星川瑠歌のほし空』　好評発売中！

眷属たちはあくまで影響を受けただけの常人であり、特殊な能力はもたない。だがキララからの有効な対処法もなかった。こちらは身体能力がアップしているので殴ったり蹴ったりで退治できるが、優しい少女にはクラスメイトをボコボコにするのは躊躇われる。結果逃げるしかできない。

なにより嫌なのが記憶だ。眷族化していた間の記憶は、ひとつの種を倒しても次の種が現れれば蘇ってしまう。普段は普通のクラスメイトとして付き合っている少年たちが、突然かつて自分をレイプした悪鬼に代わり「またヤらせろよ」「俺たちが忘れられないだろ？」と淫猥にほくそ笑み。初心な親友のミサトが、尻穴まで犯されて喜悦にむせび泣いていた記憶を取り戻し、顔を合わせるのも辛そうにする。

世界が質の悪いジョークにでもなったようで、頭が混乱する。憂鬱になるのも仕方なかった。

「ま、あきらめるァメ。魔法少女は過酷なんだァメ」

「軽く言わないでよ」

「愚痴るなァメ。世の中には日常でも尿道を性感帯にされるとか、もっと過酷な人もいるァメ」

「うー、誰かに代わって欲しいよぅ」

「無理ァメ。魔法少女は十萌家の宿命、男なのに魔法少女やらされるよりはマシァメ」

なにを言っても逃がしてくれそうにない。

本気で嫌なわけではなかった。ミサトをはじめ、みんなを困っているのだ。自分ががんばれば解決するなら、魔法少女になるのも辛くない。

けれど……。

☆　☆

「ひく……ぅぐっ。ううううう」

花柄のワンピースに泥だらけのボールをぶつけられ、泣いている女の子が見える。

誰だろう？　思ってすぐに、あれは自分だと思い立ち、きららは憂鬱になった。

（またこの夢だ）

夢なのは分かっているのに、自分があの泣いている子に投影されてしまい、悲しくて仕方なくなる。

『また泣くぜきららのヤツ』

『やーい泣き虫泣き虫〜』

あれはいくつくらいのことか。小学校に入る前。

いまでこそ他人の目など気にしないくらいの負けん気を身につけたきららだが、昔は気弱だった。人目を引くブロンド髪なんてしているから、同い年の男の子たちにいつもイジメられていた。

（……助けてタダシ）

夢の続きは分かっている。駆けつけたタダシがいじめっ子たちを蹴飛ばし、追い払ってくれる。そのあと泣き止まない自分の髪を撫でながら、「もう泣くなよ」と優しく言ってくれるはず。

きららは泣きながらそんな王子様の到着を待った。嫌な子たちを追い払ってくれるのを。あの大きな手で髪を撫でて、「俺は好きだぞ、きららの髪」とちょっとキザなことを言ってくれるのを。

少年の手のひらは、小さいのに力強いのを覚えている。心地よくて、ぽやっとするうちに涙を忘れていた。泣き止んだら家に帰るまで手を繋いでくれて、ちょっと後ろを歩くので、向けられる彼の背中がすごくカッコ良かったのを覚えている。

もともと可愛くて素直な少女は、成長するにつれて友達が増え、必然的にイジメも減った。伴ってタダシの存在も、かつての『頼れる王子様』から、いまでは『手のかかる幼なじみ』に変わっている。

ご無沙汰の王子様に会えるなら少しくらい耐えてもいい。きららは待ち続けた。だが、

（タダシ……まだ？　――ひっ）

いつの間にか場面が変わっていた。

王子様は到着せず、イジメより陰惨な状況に移っている。家庭科室の大テーブルに縛りつけられ、男がのしかかってきていた。ぽたぽたと落ちてくる獣臭い汗が、こぼれた涙と入り混じる。

腕ほどもある太い肉棒が、幼い秘肉を貫いていた。ずるり、ずるりと抜き差しされるたびに股関節から熱い痺れが湧く。

「いやぁ……っ、やだ、やめてぇ……っ」

か細く涙声で喘ぐ少女。だが男は嬉しそうに笑って、こちらの口元へ舌を這わせてくるばかりだ。

（やだっ、やだっ、助けてタダシ……っ）

あの頃と同じく、きららは王子様に助けを求めた。来てくれないと分かっているのに。

なにより恐ろしいのは、男が腰を一往復させるたび痺れが頭の中まで走って。頭が真っ白になっていくことだった。王子様の顔が白に塗りつぶされ、突き立てられる剛直の動きに思考を奪われていく。

やがて男が「うっ」と呻き、腹の中へとどぷんどぷん重たい奔流を注ぎだした。

そのころにはタダシのことなど忘れ、少女はのしかかる男の背中に腕を回しながら、脈打つシャフトに腰をウネウネ応答させて――。

「イク……ぅっ」

「〜〜〜〜――っ！」

声にならない悲鳴をあげ、少女は目を開けた。

夜闇でこそあれ、まぎれもなく自分の部屋だ。何か身体に絡んでいるのを感じ慌てて蹴飛ばした。秋冬用の掛け布団がベッドから落ちる。

夢――分かってはいたのに、あまりのおぞましさに全身が汗べっとりだった。肌に張りつくパジャマがうっとうしい。

「……また」

あの日、処女を散らされてから頻繁に見るように

なった悪夢だった。頭を抱えるきらら。
悪夢……悪夢だ。ものすごく嫌な気分になる夢。
けれどその残滓を残した身体は、ねっとりした熱と、甘美めいた痺れを覚えていた。
ベッドをおりて、タンスの上で寝ているエマから飲みかけのコーラをいただく。喉の渇きを潤した。炭酸が辛かったが、夢の残した暗い気持ちをいくらか晴らしてくれる。
同じくタンスから、下着を一枚取って、
「……」
少し迷ったが携帯電話も持って部屋を出た。
足音を潜めて廊下の突き当たり。トイレへ。
便座に腰をおろし……パジャマと下着をおろす。
――にちぃ……。
ココア色のショーツのクロッチから、ねばっとしたエキスが糸を引いた。
(やっぱり濡れてる)
さらに気分が暗くなる。
二ヶ月前の事件はきららに魔法少女の使命とともに、おぞましいトラウマを与えた。
正しくは蘇らせたというべきか。
トイレットペーパーを何重にも手に巻いて、股の汚れを拭う。
「はぁ……」
幼いころのこと。休む日のないイジメには、王子様の到着が間に合わないこともある。そんな日はイジメがエスカレートする一方だった。
あらためて思うとはやしたり髪を引っ張ったりしてきたのはみんな男の子で、好意の裏返しだったのだろう。みなきららが泣くほど嗜虐心を昂らせ、ボールをぶつけたり、頭から水をかけたりしてきた。
そんなときのことだ。泣くことしかできない少女に、奇妙な感情が芽生えたのは。
頭の中身が涙になって抜けてしまったように、なにも考えられなくなった。同時にボールをぶつけられる痛み、水をかけられる悔しさが消える。
不可思議な気分だった。恍惚状態、そんな言葉は彼女も周囲も知らなかったが、なじられながら頬を火照らせる美少女に、男子たちはさらに目をギラつかせた。収拾がつかなくなり、いたぶりはさらに執拗になる。あるときなど男子の一人が「おしっこするところを見せろ」と命じてきた。きららはぽやっとしたままスカートを持ち上げ、パンツをびしょびしょにしてしまったのを覚えている。
イジメが廃れるに従って当然そんなこともなくなり、忘れていたが。八月の事件はそんな少女の中に潜むおぞましくも危うい傷痕を掘り起こした。
あの日、汚濁にさらされ涙を流したきららは、数年ぶりにあの魔酔を味わっていたのだ。
泣きじゃくりながら破瓜を散らされ、子宮を射抜かれながら、あまりの陶酔に何度も果てた。
鮮烈すぎた体験のせいか、処女膜の破られた肉体が成熟を始めてしまったのか。影響は二ヶ月経った今日まで色濃く残っていた。
「ン……っ」
くしゃくしゃにしたトイレットペーパー越しに、押さえた秘苑へ指を強く食い込ませるきらら。
我慢したいけれど無理だった。水気を取ろうと擦っているのに、擦るごとに新しい水気が湧いてくる。吸いきれない分がトロトロお尻のほうへ行ってしまうくらいだ。肌に張りつくパジャマには、形が分かるほど固く尖る乳首が浮かび上がっていた。
「あ……っ、っ、……っ」
声だけは小さく抑えながらも、指使いはどんどん激しくなる。
自分は生まれつき感じやすい体質らしい。両足のつま先を折り曲げて床のマットを引っかきながら、股関節の摩擦に悶えている。声を押さえ込めているのが不思議なくらい激しい反応だ。
この二ヶ月で少女に起こった変化は多かった。
以前までは性知識など微々たるものだったのに。自慰の仕方を一人で覚えた。毎週二、三度はしないと今日のように淫夢を見るのだ。いまでは慣れさえして、家族の邪魔が入らない場所を見つけるのも。声が出ないようにするコツも覚えた。
「た……だし……っ」
持ってきた携帯を起動させ、写真のアプリを開いた。一番上にあるファイルを開く。
タダシと二人で写っている写真を。
「〜〜――っ! ッ、ッ――!」
幼なじみの顔を見つめながら少女は、なるべく機械的に、最低限の快感でオルガスムスへ飛び込んだ。我慢すればするほど自分の身体は浅ましくなることを知っているのだ。乳首をいじりたくてしょうがなくなる前に。ねとつくアナルまでジンジンし始める前に、身体に区切りをつけさせる。
二ヶ月前は『オナニー』という言葉さえ知らなかったのに。変化は大きかった。場所、仕方、こらえ方には慣れを感じさせるし。
自分が一番傷つかないやり方も知っている。
「〜、……〜。……ごめんねタダシ」
失礼なことに使ってしまった、写真の中の幼なじみに詫びる。
達するだけなら指を往復させるだけでいい。けれど最後の瞬間には、この写真は欠かせなかった。
これがないと。幼なじみの顔を見ていないと、達する瞬間におぞましい記憶が脳裏をよぎるのだ。
佐山アキラと宮代俊哉……。きららの純潔を汚し、エクスタシーを覚えこませた二人の顔が。
あの二人を思い浮かべながら達するのはあまりにも屈辱的なので、悪いとは思いつつも幼なじみの顔を盾にしているのだった。

漫画 COMIC／NO.ゴメス
紫乃 ～退魔剣士～ 第二話
……ん…
…あ…
あれっ ここは…？
私 何してたんだっけ ……？
ガバッ!!
それで…
委員長は 大丈夫なんだろうな？
あと オレのクラスメイトや 他の生徒は助かるのか…
……
美少女退魔剣士もの第二話!!

たぶんな

たぶんて何だよ!!

いいんちょは完全には侵食されていないようだからな

じきに目を覚ますだろう

そうか…

それなら安心だけど…

まぁあんなモノ達を目の当たりにした後じゃな…

まぁ…とにかく疲れたし

風呂でも入って寝るか…

むっ そうだな

紫乃は…

この街に潜んでいる巨大な悪霊を退治するためにやってきた退魔師なのだという…

信じ難い話なのだが…

スルッ

じゃあ紫乃先に入っ…

ってぇえ!!?

ん

おまッ!? な…な…何で脱いで!?

?

いつの話だよ!!

いつも一緒に入っていたではないか

とにかく服を…

おっと刀も持っていかないとな

家にはお札で結界を張っているがいつ悪霊が襲ってきてもいいように用心しとかないとな!

ガチャ

久しぶりに背中流しっこするぞ

あ…

あの…

聞け――――!!

む…武藤くん…

と…天火さん?

い…いやこれはッってか何だこのタイミング!!

……
ねぇ…天火さんは…
む？
※二人で入ることになった
その…
武藤くんとどういう関係なのかな…って
幼馴染みだぞ
…そう…
……
あ！
そうだ!!
いいんちょに協力してほしいことがあるのだが!!
え？

おーい神人(かみと)ー!!

おー上がったかー?

ちょッ

ちょっと待って天火さん!!

はやく はやく

そんなに押さないでッ

まだ身体拭いてな…きゃッ!?

ほ…本当にやるの…!?

うおッ

武藤くんの…大きくなってる

おおい紫乃!

私のお師匠様が言ってたんだ
男の「せーし」というモノを摂取すれば退魔の力を強めることができるって
は!?
いやおま…どういうことだかわかってんのか!?
わからないからいいんちょにお手本を見せてもらうようにお願いしたのだ
だから神人も協力してくれないか?
な…なんだそりゃ…
ってか…学校のときはそれどころじゃなかったけどおっぱいデカすぎ…
って…
ちょ…委員長ッ!?
そその…
天火さんがどうしても協力してって言うから…
武藤くんが嫌じゃなければ……んッ♥
あぁ…私武藤くんにこんなこと…♥
そ…そりゃ…嫌なわけ…な…ぅあッ!?
あッ…く…口の中で舌が…絡まッ…!!

んぅぅ♥
んッ♥んぅ
む…武藤くんの…
おチ■ポッ…
おチ■ポの味…♥
ゔッ
根元ッ…
まで…!!
い…委員長…
はッ 激しッ…♥
な…
何なのだ…
せ…
「せーし」って
あんな所から
出るのか…!?
ハァ
ハァ
こ…
今度は
こっちも使いながら
シゴいてあげる…♥
ぐちゃ
ぐちゅ
ぐちゅ
むにゅ

九未知会に捕まった咲妃！
ついに処女を喪うとき……！

呪詛喰らい師 カースイーター

封の五 久遠

小説 NOVEL／蒼井村正（あおいむらまさ）　挿絵 ILLUSTRATION／或十せねか（あると）

封の五　久遠

魔人形ＢＡＢＥＬの結界に囚われ、宙に浮かぶ石門を潜った咲妃が連行されたのは、周囲を障子戸に囲まれた白い部屋だった。床には白大理石のタイルが敷き詰められており、高い天井は、全体が白く発光している。部屋の中央に設置された巨大なベッド以外に、家具はまったく見当たらない。

「ようこそ、久遠の世界に」

捕縛結界から解放され、床にへたり込んだ咲妃に、ドクタークリアが声を掛けてきた。

白衣をまとった金髪美女の背後には、九未知会の盟主、常磐城久遠が無言でたたずんでいる。

咲妃に負けず劣らずのメリハリに富んだ肢体を、仙女のような薄衣に包んだ久遠は、口元に憂いを感じさせる微笑みを浮かべ、囚われの呪詛喰らい師を金色の瞳に映していた。

「久遠、お前と折り入って話がしたい！」

虜囚とは思えぬ堂々とした物腰で、呪詛喰らい師は会見を申し出る。

「今はまだ、その時ではありません」

自らに強力な呪詛をかけ、亜空間に閉じこもった先代の巫女は、静かな口調で拒絶した。

「今はまだ、とはどういう意味だ？　強引に連れてきておいて、話もしてくれないのか⁉」

眉を吊り上げ、声を荒らげる咲妃。

「あなた、ミュスカに嬲られていた時、金色に光ったでしょう？　もう一度あの状態になれば、久遠とは嫌というほどお話できるわよ」

久遠の代わりに、ドクタークリアが発言する。

「そう言われても、あの状態になったのは、初めてのことだ。意識してできるものではない」

「そうでしょうね。わたしたちにも予想外の事態だったから。でも、発動条件は判っているわ。その条件とは、限界を超えて喜悦を極めること」

九未知会の頭脳を自認する白衣の金髪美女は、ニヤリ、と妖しい笑みを浮かべた。

「要するに、快楽責めにする、ということか？」

眉を顰める咲妃の前に、久遠が歩み寄る。

「儀式のための準備をしておきましょう。咲妃、あなたの力、封じさせてもらいます。一人の無力な少女として、肉悦に身も心も委ねなさい」

九未知会の盟主は、神伽の余韻で思うように動けぬ咲妃の頭上に両手をかざす。

「ンッ……！」

プシッ！　ピシュッ！

小さく呻いた神産みの巫女の両手のひらから鮮血が噴き出し、呪詛喰らい師の身体に滴り落ちた。

「聖痕……⁉　血を媒介とした呪術か⁉」

「そう……血界呪紋術。自らの血液に神気を練り込み、浸透型の呪印を描く超高等呪術です」

バラの花のような芳香を放つ鮮血の雫は、爆乳を緊縛し、秘部を守る革帯の退魔装束に染みこみ、深紅の薄皮をさらに赤く照り輝かせた。

「この程度でいいでしょう。呪紋、発動！」

久遠が凛とした声を上げると、鮮血を吸い込んだ革帯が深紅の光に包まれ、妖しく蠢き始める。

「ふぁ！　熱い……なっ、何だ？　締め付けが強まって……ひぁ！　くうぅぅんッ！」

ギチッ、ギチュッ、ギュリリリッ！

革帯と金属環を組み合わせた艶やかな退魔装束が、革の軋み音を上げて咲妃の肉体を締め上げる。

「あなたの力を封じると同時に、退魔装束に蓄積された淫気を活性化させ、かりそめの命を与えました。いわば、疑似淫魔のようなもの……」

「なっ、何だと⁉　んんっ、はぁぁぅッ！」

静かに告げる久遠の声を、革帯が軋むギシギシという音と、咲妃の悩ましげなうめき声が掻き消した。退魔装束が、淫らな意思を持った緊縛具に変じて装着者である退魔少女を嬲っているのだ。

乳首を包み込んだ深紅の薄皮が、まるで見えない指に摘まれているかのように左右に捩れて勃起乳首を圧迫し、下乳を保持している革帯が、弾力過剰な乳肉を大きな円を描いてこね回す。

「んくうぅぅ！　うぁぁぁ、きつい……ッ！」

仰向けになって身悶える呪詛喰らい師の股間では、収縮した革帯が秘裂と尻の谷間に食い込み、緩急交えた振動を起こして秘部全体を責め立てた。

股間を守る深紅の革が、クイッ、クイッ、と引き絞られると、剥き身のゆで卵のように滑らかな無毛の大陰唇が、女陰のワレメに革帯を深々と咥え込んで、淫靡な丸肉をプックリと際立たせる。

「はぁぁうんっ！　アッ、ひぅ……やっ、震えて……あぁぁ、食い込んで、くふぅぅんッ！」

自らの退魔装束に嬲られた極上の肉体が、人目もはばからず、狂おしげに、切なげに舞い乱れた。

登場人物紹介

常磐城咲妃

「呪詛喰らい師」という異名を持つ凄腕の退魔少女。淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。

雪村有佳

淫神に取り憑かれたところを咲妃に助けられた女生徒。

瑠那・イリュージア

魔術結社「レメゲトン派」の生き残りの少女で、咲妃に懐いている。

岩倉信司

咲妃が所属する都市伝説研究部の部長。オカルト的な事件を追う。

稲神鮎子

咲妃の通う学校の生徒会長。信司の幼馴染みでもある。

前号までのあらすじ

都市伝説に隠れた淫神を封じる退魔士の常磐城咲妃。「大鼠」や「闇の隠しシナリオ」を封じ、さらには宿敵・九未知会に所属する阿絡尼の「女弄蜘蛛」とミュスカの「ネメシス」まで、陵辱の危機に晒されながらもかろうじて封印していく。そんな彼女に、先代神伽の巫女である常磐城久遠の魔の手が迫る！

恥骨を圧迫し、秘裂を二つ割りにしてしまいそうな食い込み責めに、まろやかなヒップがせり上げられ、ムッチリと肉感的な太腿が床を蹴る。
白く量感たっぷりな爆乳が、生クリームを詰め込んだ水風船のように重々しく揺れ弾む先端では、深紅の革に包み込まれた勃起乳首が、小指の先ほどに尖り勃って、執拗に揉み嬲られていた。
「執拗に嬲られていますね。それも、これまでの神伽であなたがその装束に溜め込んできた業」
ボンデージコスチュームの反逆に悶える咲妃の痴態を見下ろしながら、久遠は静かに告げる。
「ひぐぅぅ……アッ、あんッ……業、だと!?」
「ええ。性と生に執着する人の強き想いが積み重ねられたもの。それが淫神の本質。ドクター、あとはお任せします」
「まっ、待て！　久遠ッ！」
咲妃の呼びかけを無視して、久遠は去った。
「久遠を救いたいなら、今の状況に身を任せなさい。あの人の願望が成就されない限り、救済はあり得ないのだから」
「願望とは何だ？　久遠は何を望んでいる!?」
「今はナイショ♪　質疑応答はここまでにしましょう。そのコスチュームに溜め込まれた業が全て解き放たれるまで、しばらく嬲られていなさい」
「何だと？　はうぅっ！　ふわぁぁ、締め付けが……強まって……ひぁ、はぁぁんッ！」
着用者を裏切った退魔装束の動きが激しくなる。
爆乳を締め上げた革帯は、たっぷりと中身の詰まった二個の肉メロンを絶え間なくこね回し、真空パック状態で包み込んだ勃起乳頭をねじ切らんばかりに責め苛む。秘裂に食い込んだ革帯は、クリトリスを圧迫しながら震え蠢き、恥骨の奥が燃え立つような鮮烈な刺激を送り込んできた。
「ふぁ、やはぁぁんっ！　イッ、イクッ！　イク……くぅんんん～ッ！」
床の上で仰け反った緊縛ボディが、絶頂へと登り詰めようとした瞬間、革帯の蠢きが止まる。
「えっ!?　な、何故だッ！」
最悪のタイミングでお預けを喰わされた退魔少女は、切なげに腰をせり上げ、甘い鼻息を漏らして身悶えてしまう。
（疑似淫魔なら、絶頂の波動を吸収させれば解呪できるのに……それを拒んでいるのか？）
「そう簡単に、焦らし責めは終わらないわよ」
ドクターが意地悪な笑みを浮かべる。
「こんなことをして、何になる？　辱めたいだけなのか？　他に何か……ひぁ！　まっ、またッ！」
肉体が落ち着くのを待っていたかのように、革帯による淫辱が再開される。
尻の谷間に食い込んだ革帯がアヌスの蕾を揉み嬲り、秘裂全体が圧迫され、震わされる。
「ひゃぁぁんッ！　イクッ！　うぁ、あ、やっ、止まるなッ！　アッ、んぁぁ！」
またしても極まる寸前で焦らされた咲妃は、ムッチリと肉感的な太腿を緊張させ、食い込みを際立たせた股間をカクカクとしゃくり上げて、寸止めの苦悦を解消しようとする。
しかし、拘束具と化したコスチュームは関節の各所を締め上げて、自慰行為さえ許してくれない。
（イケないのがこんなに辛いなんて……あぁ、脳が煮えたぎってしまいそうだ！）
神伽の戯においては、奔放に乱れることで、淫神を昂らせてきた豊かな性感がかえって仇となって、囚われの巫女を悩乱させる。
ギチッ、ギュリッ、ギチギチギチュルッ！
深紅の革帯が軋みを上げて色白な裸身を締め上げ、生殺しの陵辱が飽くことなく続く。
「んくふぅぅぅ！　うぁ、はぐぅぅぅ～ッ!!」
疑似淫魔と化したボンデージは、緊縛女体を絶頂に到達する寸前まで追い込んでは焦らし抜いた。
「はぁぁんっ、やっ、もう……もう……くぁ、きゅふぅぅッ！　アッ、くはぁ……はぁはぁはぁ」
数知れぬ寸止め絶頂で着用者を嬲り抜き、淫魔ボンデージの蠢きはようやく動きを止める。
生殺しからは解放されたものの、緊縛を弱めた革帯から、張り詰めた爆乳がこぼれ落ち、秘裂に咥え込んだままの革帯の脇からは、白濁した愛液を滴らせた痴態を晒して喘ぐばかりの状態である。
（身体が疼いて……敏感になりすぎている）
延々と責め抜かれたその肉体は絶頂に餓えて、狂おしいほどに発情させられていた。
「八時間……。ずいぶんカルマを溜め込んでいたのねぇ。これだけ焦らされたら、並の退魔士なら、とっくに精神崩壊しているレベルだけど、さすがね……。それじゃあ、第二段階に進みましょうか。お待たせ、あなたたちの出番よ♪」
障子戸を開けて、三つの人影が入室してくる。
「ウフフフッ、お久しぶりね。たーっぷり可愛がってあげるわよぉ、カースイーター♪」
色気過剰な褐色ボディをビザールファッションに包んだ淫女、ゼムリヤが淫蕩な笑みを浮かべる。
「咲妃さんのおかげで復讐も果たし、淫神の呪縛からも解放されました。今宵はお礼に、技巧を尽くして気持ち良うして差し上げます」
妖糸使いの退魔尼僧、阿絡尼が、京訛りの口調で言って艶然と微笑んだ。
「やれやれ、私はまだ疲れているのだがな……だが、カースイーターの甘美な肉体を味わえるというなら、参加しないわけにもいくまい」
つい先ほど、咲妃と激しい神伽の淫戯を繰り広げたミュスカは、いささか焦燥気味の美貌に苦笑を浮

著者近況　私にとって、数年ぶりの連載作品となりました「呪詛喰らい師3」も、今号が最終回。まだまだ続ける気満々ですので、応援よろしくお願いいたします。

かべている。
「はぅ……く……ンッ……見知った顔ばかりだな。九未知会は、意外と小規模な組織なのか？」
肉の疼きに堪えながら、呪詛喰らい師（カースイーター）は居並ぶ女たちに挑発的な視線を投げかける。
「これがオールスターキャストというわけじゃないわよ。他のメンバーたちは、今も世界中で活動しているわ。久遠の目的を成就させるために、ね」
「そっ、その目的とやら、そろそろ教えてくれてもいいだろう？　んふぅ……く……ッ」
「今はまだダメよ。資格を得てから、久遠に直接聞きなさい。さあ、始めましょうか」
ドクタークリアの目配せを受けたアンノウンズたちは、ためらいもなく着衣を脱ぎ捨て、三者三様にエロチックな裸身をさらけ出した。
「もう待ちきれないわ。見てぇ、チンポこんなにギンギンになってるのよぉ♪　ンあぁ……」
ビザールコスチュームの股間をはだけた淫女は、亀頭の張り出しもたくましいチョコレート色の巨根をしゃくり上げつつ喘ぐ。
黒光りする牡器官の先端は、先走りの粘液でネットリと濡れ、血管を浮き出させて張り詰めた肉茎は、みぞおちに届きそうな長大な肉凶器だ。
「ほら。わたくしたちも、久遠さんのお力で、ほら、このように立派なモノが……」
「フフッ、さっきのお返しができそうだな」
着衣を脱ぎ捨てて妖艶な声を上げる阿絡尼と、含み笑いを漏らすミュスカの股間からも、淫情の血潮に猛った肉槍が屹立している。
「く……ンッ、淫ノ根のレプリカか？」
三本の肉槍を目にしただけで、口腔内に込み上げてきた生唾を、ゴクリ、と飲み込む咲妃。
（身体が……欲しがってしまっている……）
長時間にわたって焦らし責めされた肉体は、暴走寸前の発情状態に陥っているのだ。
「あなたもガマンの限界でしょう？　さあ、快楽の宴を始めるわよぉ♪」
ペニスをそそり勃たせた美女たちが、咲妃の極上裸身に群がってきた。
「先ほどのお返しだ。咥えろ！」
「んぐぅ！　んむふぅぅん！」
淡いピンク色に充血したミュスカの勃起が、唇を割り開いて喉奥まで突き挿（い）れられる。
（なっ、何だ？　ペニスが、振動している!?）
「フフッ、妖銀貨の力は奪われたが、私の身体には力の残滓が宿っている。快感神経を直接掻き鳴らして、お前の口を性器に変えてやろう」
ニヤリ、と精悍な笑みを浮かべた妖銀貨は、緩やかに腰を使い始めた。微細な振動に包まれたスレンダー美女の勃起が、口腔を掻き回す。
ぐちゅ、くちゅ、ちゅくっ、ちゅくっ、くちゅるっ……。熱い亀頭に嬲られた舌と、たくましい亀頭冠に擦られた喉粘膜が狂おしいほどに疼き、呪詛喰らい師（カースイーター）の肉体を淫欲で燃え上がらせてゆく。
「カースイーターのケツマ■コ、いただきッ！」
咲妃の太腿を抱え上げたゼムリヤは、はち切れんばかりに猛ったチョコレート色の亀頭を尻の狭間にねじ込み、アヌスの蕾を狙ってきた。
（こんな状態で、そこを犯されたら……理性が飛ぶ！　狂わされてしまうッ！）
抵抗しようとする咲妃であったが、久遠の術式の後遺症か、まだ思うように身体が動かない。
それどころか、欲情した肉体の奥底をゾクゾクするような悦波が駆け抜け、危機感を抱いている心を裏切って、さらに昂りを増してゆく。
「みなさん、急きはりますなぁ。では、このオッパイに挟んで……あはぁ、ほんま、ええ弾力してはりますなぁ。残り物には福がある」
おっとりした口調で告げた阿絡尼は、仰向けに組み敷かれた呪詛喰らい師（カースイーター）の爆乳に勃起を挟み込み、乳肉を揉みこねながら緩やかに腰を使う。
「ふむうぅぅンッ！　くふうぅぅんッ！　ンッ、ンッ、んふうぅぅ！」
カリのくびれが乳肌を擦り、冷たい指が柔肉に深々とめり込んで蠢く感触だけで、咲妃は絶頂寸前まで追い込まれてしまう。
「この革帯、邪魔ねぇ。……こんなに深く食い込んで、苦しいでしょう？　楽にしてあげるわ」
「くぁ！　うあぁぁうッ！」
股間に食い込んだ退魔装束が、ゼムリヤの手で強引にずらされ、秘部を剥き出しにされた。
熱く濡れそぼった膣口と肛門が物欲しげに収縮して、陵辱者の興奮を煽る。
「ウフフフフ、もう濡れ濡れじゃないの。あぁ、きれいなピンクの美味しそうなアヌスちゃん、アタシのとっておきのチ■ポ技で犯してあげる♪」
欲情に上ずった声を上げた褐色肌の淫女は、褐色の肉槍に手を添え、何やら呪言を唱える。
「……この身に宿りし低級霊たちよ、我がペニスを依り代として、受肉せよ！　……んぁ、来たわぁ。はぁぁ、出てくるわよぉ！」
張り詰めた肉茎の表面が、ボコボコと波打ち、小さな人の顔がいくつも浮き出してきた。
どの顔も、酸素不足の金魚のようにパクパクと口を開閉させ、白濁した唾液にぬめった紫色の舌を突き出してくねらせている。
（ペニスを依り代に死霊受肉とは、悪趣味な）
グロテスクな人面ペニスを見せつけられた咲妃の背筋に、悪寒と妖しい期待が走り抜ける。
「すごいでしょ？　これであなたのケツマ■コ、狂わせてあげるわぁ！」
ぬぷ……ぐぷぐぷっ、ぐぷっ、ずぷぷぷッ！

著者近刊　『呪詛喰らい師』『呪詛喰らい師2』『超昂閃忍ハルカ　スバル虜囚魔辱編』『暁の護衛　プリンシパル護衛日記』『もののふガールズ　剣も恋も免許皆伝』『もののふガールズ2　姉妹剣士がお相手します』『てとてトライオン！　夏休み活動日誌』　好評発売中！

瘤状に浮き出た顔で肛門括約筋を掻き弾きながら、異形の妖勃起が少女の直腸に挿入された。
巨根に浮き出た顔は、熱く潤んだ粘膜に吸い付き、小さな舌を閃かせて、美少女の尻穴を貪る。
「ヒッ！　中、吸われて……つあぁぁっ！　かっ、噛むなぁ！　ひぐうぅぅぅ〜ンッ!!」
直腸壁を吸いしゃぶられ、肛門括約筋の菊リングをコリコリと噛み責められた神伽の巫女は、口を犯すペニスを吐き出して悶え狂ってしまう。
「あはぁぁ、いっ、いいわぁ。これ、気持ち良すぎて、すぐにでもイッちゃいそうよぉ！」
狂喜の笑みを浮かべたゼムリヤは、容赦のない腰使いで美少女退魔士のアヌスを抉り抜いた。
「うぁ、ひぐっ！　アッ、あんッ！　壊れるッ、そんなに激しくするなぁ！　んきゅぅぅンッ！」
荒々しい注挿で、小さな口に吸い付かれた直腸粘膜が引っ張られ、内臓が引きずり出されてしまいそうな注挿快感が呪詛喰らい師を襲う。
仰け反りわななく咲妃の胸では、阿絡尼の熱く硬い肉刀が乳房を突き嬲り、勃起乳首を繊細な指使いで責め立てる。
「ほんまにええオッパイですなぁ。はんなりと柔らかで、大きゅうて……あはぁ、オチンチンが蕩けてしまいそうですわぁ」
尼僧の頭巾と白足袋以外は全裸というフェティッシュな姿で、妖艶な熟女はたわわな果肉を犯す。
「お乳の奥も、可愛がって差し上げますえ」
勃起乳頭を弄っていた阿絡尼の指先から、何百本もの細い糸が紡ぎ出され、母乳の分泌孔である乳腺へと潜り込んでくる。
「んんんッ!?　ひぅ、あひぃッ、やっ、あぁん」
エクトプラズムで紡がれた妖糸は、母乳の源泉にまで侵入すると、微振動に小刻みなストロークを織り交ぜて、爆乳を内部からくすぐり嬲った。
肉果の奥で渦巻いていたむず痒い圧力が急激に強まり、乳首の芯を灼熱させて一気に込み上げる。
「うくぅ、出る……ッ、ひゅあぁぁぁンッ！」
ぴしゅっ！　プシッ！　ぷぴゅるるるるッ！
甘い悲鳴を漏らして仰け反った咲妃の勃起乳頭が、純白の乳汁を噴水のように噴き上げる。
「あはぁ、温かいお乳が出ましたわぁ。もっともっと絞り出してあげますえ♪」
顔にまで飛び散ってきた少女の乳汁を恍惚の表情で浴び、舐め取った尼僧は、さらに激しく乳房を揉みこね、内部に侵入させた妖糸を震わせる。
（あぁぁ、胸が……弾けるッ！　母乳が止まらない、全部、絞り出されてしまうッ！）
まるで小さなペニスのように脈動した乳先から、男子の射精をも凌駕するめくるめく放出快感を置き土産にして、純白の噴水が高々と噴き上がる。
「ほら、お口の動きがおろそかになっているぞ。もっと舌を動かしてみろ！」
イラマチオの快感に酔った妖銀貨は、クールな美貌を歪めつつ、筋肉質なスレンダーボディを躍動させて、喉陵辱の速度を増してゆく。
グチュグチュと唾液の鳴る音を立てて喉粘膜を掻き擦り、食道にまで侵入して快感神経を掻き鳴らしてくるミュスカの男根は、触覚だけでなく、味覚や嗅覚、そして聴覚までも淫悦に蝕んだ。
（ダメ……だ。抗えない……蕩ける……）
「はぅ……んぁ、れるっ……ちゅぱ……ぴちゃぴちゃぴちゃ、はぁぁ、あむ、んっんっんっ」
咲妃は、硬く反り返った勃起の根本から先端まで舌を這わせ、唾液と先走りに濡れ光る肉槍をうっとりと眺めては、再び口腔内に呑み込み、激しく頭を振りたくりながら頬をすぼめて吸い上げる。
舌や口腔粘膜が猛ったフタナリペニスに擦られると、気持ち良すぎて意識が飛んでしまいそうだ。
（口だけじゃない、身体の感度が……どんどん上がって。あぁ、狂ってしまうッ！）
焦らし責めで欲情した肉体に魔性の愛撫を施されると、全身が剥き身のクリトリスになってしまったかのように鋭敏化して、ありとあらゆる刺激を快感に変換してしまう。
搾乳の快感が豊乳のみならず、肺や心臓まで歓喜に震わせ、アヌスを貫き、直腸奥まで突き挿れられる人面ペニスの衝撃は、内臓全体をビリビリと揺さぶって頭の芯まで痺れさせる。
三人のフタナリ美女に蹂躙された呪詛喰らい師は、絶え間ない悦波に翻弄され、白目を剥いて痙攣することしかできない。
「オッパイの中も、犯して差し上げますえ♪」
妖艶な声を上げた阿絡尼は、乳腺内に侵入させた妖糸をペニス状に編み上げると、乳房を内側から突き上げ、掻き回した。
「くふぅ！　んぐふぅぅぅむ!?　ンッ、ひぐっ、うぅぅぅンッ！　きゅふぅぅぅンッ！」
くぐもった声を上げる咲妃の爆乳が、内部からのハードピストンで縦横無尽に揺れ弾み、喉とアヌスで妖根が注挿される。
「ダメぇ、もう限界よ。チ■ポ弾けそうッ！」
数分間、狂ったように腰を使っていたゼムリヤが、情けない声を上げて身を強張らせる。
「私も……阿絡尼、三人同時に出すぞ！」
「心得ました。さぁ、最初のお汁、出しますえ」
肛門と喉、そして乳房を犯す肉茎の動きがフィニッシュに向かって加速してゆく。
（あぁぁッ！　弾けるぅッ!!）
全身性感帯となった身体に許容量を超えた悦波が送り込まれ、呪詛喰らい師の肉体を壮絶なエクスタシーへと飛翔させた。
「んきゅふぅぅんっ！　イッ、イク……ッ、イグ

ふうぅぅンンンン〜ッ!!」
妖銀貨のペニスに掻き回されている喉奥から、甲高いアクメの呻きを漏らしながら、極上ボディがひときわ激しい絶頂痙攣に包まれる。
「あはぁん！　チ■ポ汁出るッ！　あひんっ！　どぴゅどぴゅするうううウ〜ッ!!」
「くふううっ！　出すぞ。全部飲め！」
「んはぁぁ、かけてあげますわぁ！」
びゅくんっ！　びゅくびゅくびゅるうううう〜ッ！　びしゃびちゃぶちゅるるる〜ッ!!
興奮のピークに達した三本の魔根が同時に射精の脈動を開始し、呪詛喰らい師（カースイーター）の内と外、そして意識を白く染め上げる。仰け反った喉と、たわわなバストが阿絡尼の白濁で覆われ、喉と口腔にミュスカの精液が溢れ返った。
直腸内で激しく脈動するゼムリヤの巨根は、亀頭のみならず、表面に浮き出た魔顔の口からも、とてつもない勢いでスペルマを射出し、灼熱の絶頂汁で消化管内をどっぷりと満たす。
（イクッ！　イクウウッ！　アッ、また……イクッ、あぁぁ、イクイクイクイクンンンッ！）
スペルマの洗礼を受けた咲妃は、口腔内に弾ける濁汁を喉を鳴らして飲み込み、アヌスを引き締めて、腸内射精中の妖ペニスを締め付ける。
「あ、あぁぁ……射精、気持ち、いいいッ！　もっと、もっと犯してあげるわぁ！」
「ゼムリヤさん、場所、替わりましょ」
「そうだな。カースイーターの身体、我ら三人で隅々まで貪り尽くしてやろう」
射精してもまったく萎えぬフタナリペニスを振りかざした美女たちは、絶頂痙攣治まらぬ咲妃の身体を欲望のままに玩弄した。
「ひぃぁぁ、あっアッ、ふぁぁぁ〜ンッ！」
甘くかすれた少女のよがり声が、途切れることなく響いている。
数メートル四方はありそうな、巨大なベッドの中央で、ゼムリヤに後座位の体位でアヌスを貫かれた神伽の巫女は、押し寄せる悦波に翻弄されて恥悦の声を上げ続けていた。
肉悦に歪んだ美貌も、革帯ボンデージに緊縛された極上の裸身も、三人のフタナリ美女が射精した大量の白濁液でドロドロに汚し抜かれている。
囚われの身となった呪詛喰らい師（カースイーター）を待っていたのは、いつ果てるとも知れぬ陵辱の嵐であった。
いったい、何百回射精を受け止め、何千回絶頂させられただろう？
この部屋は時空結界によって封鎖されているので、外部での時間経過はわずかなものなのだろうが、陵辱空間内では既に数日が経過していた。
「ほんまにええ声で鳴きはりますなぁ。その声聞いただけで、オ■ンンがビリビリしますわぁ」
咲妃の手コキ奉仕を受けていた阿絡尼が艶然と微笑む。
「ウズメ流の技巧、素晴らしいな。これほどの快感が得られるとは思わなかった。くぅ、そこ、もっと舌を動かして、尿道の奥まで舐めろ！」
咲妃の前髪を掴んで股間に引き寄せ、さらに献身的なフェラチオ奉仕を命じる妖銀貨。
「あふ、んふ、くちゅ、くちゅ、くちゅ……」
命じられるがままに、鈴口のワレメに舌先をねじ込んだ呪詛喰らい師（カースイーター）は、精液の味がする粘膜穴を優しく掻き回し、時折吸い上げて奉仕する。
愛撫のリズムや強度を変えると、ペニスの微振動も変化し、新たな悦波が口腔粘膜と舌を甘く痺れさせて、頭の芯まで駆け抜けてゆく。
「咲妃さん、その美しいお手々で、わたくしのオ■ン■ン、もっと愛して下さいな」
「んぁ……ンッ、ちゅぱ……んっんっんっ……」
ミュスカへのフェラチオ奉仕を続けながら、握り込まされた阿絡尼の勃起を扱き上げ、ウズメ流の技巧を駆使して愛撫する。桜色に上気した尼僧の男根は、ひと擦りごとに脈動し、水飴のように濃厚な先走りを迸らせて奉仕する指をぬめらせた。
「ふはぁ、お上手ですなぁ。あぁあぁ、そこを擦られると、心地良すぎて腰が抜けそうですわぁ」
指の腹で鈴口から裏筋に至る敏感なエリアを緩急交えて撫でくすぐられた阿絡尼は、膝をガクガクと震わせつつ、自らの手で釣り鐘型の美乳を揉みこねて快感に酔いしれる。
奉仕を続けながら、咲妃もまた、際限なく湧き上がってくる肉悦に浸りきっていた。
（あぁ、気持ち……いい。もっと、もっと……もっとイキたい……ッ！　犯して欲しいッ！）
さらなる陵辱を求めて、口を犯すペニスを貪欲に吸いしゃぶり、握り込んだ勃起を扱き上げ、褐色の妖根で貫かれたアヌスを引き締め、自ら尻を振りたくって、立て続けのアクメにボンデージボディをわななかせる。
三者三様の淫術を駆使して、数日間にわたって快楽責めされた肉体は、呪詛喰らい師（カースイーター）の強靭な理性さえも侵食し始めていた。
「あぁぁ、いいわぁ。カースイーターのケツマ■コ、信じられないくらい良く締まって、奥がうねうね動いて、チ■ポが蕩けそうよぉッ！」
褐色肌の淫蕩美女、ゼムリヤが腰を突き上げる。
卑猥な叫びを上げる死霊使いの股間からは、体液にぬめ光り、いくつもの顔を浮き出させた奇っ怪なイチモツがそそり勃ち、薄紅色のアヌスを貫いてペニスの愉悦を堪能していた。
「んきゅふうぅぅンッ！　そっ、そんなに激しくされたら、壊れるッ！　お尻……あぁんッ！」

うえええっ
まただよ
もーっ!!
どっ
どうしました？
アイリさん
エマさん
見てよこれ
また暗号！
解くのはいいけどさ
方法がめんどそう
なんだよねー
どう見ても
人工的な暗号
だよなコレ…
ラスボスは近い!!
…はずだけど
聖なる鈴の
鳴くセカイ
第14話 解放する者達
漫画 COMIC 琴慈

あたし達を奥に――つまり「聖鈴」へ辿り着かせないための罠じゃないよね？

さっき別れたあっちのパーティどうなったんだろ

向こうが正解ルートだったら切ないな

ラーーーん

ここに書いてある「泉」って要はさっきの水溜りでしょ？

あたしちょっと行ってくる！

ちょ

平気平気！

あたしが一番素早く動けるんだし

ちゃっちゃと見てくるから待ってて！

おおい…

そんな死亡フラグみたいな…

……

アイリさんお一人じゃ危険です！

…アイリさんちょっと遅いですね

いやーまだ78分しか経ってないし大丈夫でしょうたぶん

兄妹の絆が深くてらっしゃるんですね

そうですか……？

う…そ、そういう風に言われるとなんか恥ずかしいような…

私兄弟がいないのですごく羨ましいんですよ！

故郷では親御さんもお二人のお帰りをずっと待ってらっしゃるんじゃないですか？

……ああ、いや両親は――

父と母はいないんですその……

だいぶ前に魔物に襲われてしまってその時に――

え…

それで妹が…どこからか「聖鈴」の噂を持ち込んできて
お兄ちゃんやったよ！
これで…お母さん達を蘇らせるの！
ねえ行こう！すぐ!!
それから…俺達は
す…すみません私――お辛いことを
いえ俺はそんなもう大丈夫なんですけどあいつが……
そういや目的の筈なのにこんな話してなかったな
エマさんも何か願いがあってあの秘宝を求めてるんでしょ？
――……ってああ秘密でしたっけ
……
わ私……
私…っその――
人間に……なりたいんです

……
へ？
だって…え？エマさん…
どっから どう見ても…
すみません 本当に――
命の恩人 である お二人にまで 黙っていて…
国で どれだけ修行や 奉仕活動をして
民を導く神官に なれたとしても 私は――……
私の本当の正体は 醜く罪深い…… 魔物なんです
だから
私は――
あなた方と同じ 人間になりたい
数々の悲劇を もたらす理性無き 魔物ではなく
そう思って ずっと――
私はずっと 今まで……!!
でも
エマさんは エマさんでしょう

……え？
女性なのに立派な神官になれるまで努力して
きっと国でも皆に慕われてたんでしょう
短い付き合いでもそのくらいわかりますよ
俺とアイリの親を襲ったような魔物とは違う
たとえ…エマさんが人間じゃなかったとしてもそれだけは言えますし
——ってうわっ
なんかスミマセン調子乗って
恥ずかしいなオ……
俺は……今のエマさんが好きですけどね

わっ
ちょ…
むぎゅ
エマさ…っ…
……
……っ
……
……

…っ…
マ…さっ…
エマさ…ん う…
あの… 私…も… よく わからな…
ちゅぷ♥
すみま…せ…
ちゅく♥
ちゅぷ…♥
待……
ああ …主よ…
止まらない…♥ んです すみま…せん…っ…
…♥
私は――…
ちゅう
あ… アイリも もう 帰って くるかも しれな…
いい…ですか？ ここ…♥
かぷっ♥
う…アッ
ビクッ
もっと ちゅっちゅして ほしいですか…？
ウ…

あ…

毒に冒されたわけでも魔術でもないのに――…

ま…待って下さいね

今――…

？

ドキッ

私をつき動かすこの感情は

!?

…いったい…？

ぷるんっ

男性はこう…

されるのがお好き…だって

この方のが愛おしくてたまらない…!!

ドーン。

う…おおっ

ついに処女を奪われたフィオナ。
憎き皇帝の女となってしまった彼女を、
肉欲の虜にするさらなる陵辱が始まる！
恥かしい衣装の皇女は宴の中で、
膣内射精で子を孕む！
イセリア英雄戦記
the legend of the Heerya war
第16話 恥辱の受胎皇女
小説 NOVEL／あらおし悠
挿絵 ILLUSTRATION／牡丹

その城は、険しい峰の連なる幽谷の果てにあった。
峻険な山々を天然の城壁とし、鋼色の巨体を北の大地に横たえた、牙を剥いた猛獣のごとき禍々しい気配を纏う堅牢な要塞、バーンドベルグ城。
「あ……ああぅッ……！　い……いや……いやぁぁぁッ!!」
その巨大な城の北の端。曇天を貫く槍衾のように居並ぶ尖塔のひとつから、少女の悲鳴が絶え間なく響いた。
「も、もう……ンっく……かはッ！」
「何が、もう、なのかな？　むふぅ……ふふ。かまわぬ、そなたの望むように動いてみよ。んん？　ほぅれ！」
「くふぁっ！　くッ……ンむぅ……」
背後から、野太い男が嘲笑う。パールホワイトのドレスを派手に捲り上げられ、フィオナは、立ったまま後ろからギュスターヴに貫かれていた。
色づく直前の果実のような、甘く危うい色気の漂う肢体を窓に押しつけられ、囚われの皇女の顔が恥辱に歪む。
「い、いつまでこんな……くふぅ！」
前屈みになり、爪先立ちになった脚を震わせ陵辱に耐える。しかし、グチュグチュと肉同士の擦れあう下品な粘着音が、否応なしに、フィオナの体温を内側から上昇させた。
「ぐふふ……ここも、随分こなれてきたようだな。嬉しそうに、ワシのものに絡みつきおるっ！」
「そ、そんなこ……ひッぃぁぁぁ！」
下品な含み笑いとともに、剛直が少女の内側を擦り上げる。肉襞を搦め捕られ、膝が崩れ落ちそうになる。
「ほっ……さすがは由緒ある公国の姫君。いい声で鳴きおる。ほぉれ！」
「いやいや……いやぁぁぁっ！」
異物が胎内を行き来する違和感に鳥肌が立った。だが、いくら金色の髪を振り乱して拒絶しようと、侵入者は容赦しない。処女を失ったばかりの可憐な花園を、我が物顔で踏み荒らす。
（誰か……助けて……）
だらしなく垂れた男の腹が、張りのある少女の尻を打ち鳴らす。豊満な乳房が窓に押しつけられ、息苦しい。しかし、フィオナは必死に気を張った。意識が朦朧となると、性の快楽に飲み込まれそうで、怖い。
「お……見てみよフィオナ」
不意に、背後から大きな手がフィオナの頬をグイッと掴んだ。涙でかすんだ視界に映る、緑の少ない荒涼とした景色と、その先に広がる猥雑な城下街。だが彼が見せたかったのは、城門を出て跳ね橋を渡る馬車の列だった。
「喜べ！　お主を描いた肖像が、続々と運び出されておるわ！」
全身を虚脱感に覆われた。帝国中の絵師によって描かれた陵辱劇。恥辱の肖像。確かにあれをばら撒くとは言っていたが、本当に実行するなんて。
「これで、お前がワシのものになったと、世に知らしめることができよう」
絶望感に、膝が崩れそうになる。もしあれが、イセリアにも流出したら。
（お母様……セリーヌ……！）
愛する者たちの失望する顔が、次々と脳裏に浮かんだ。胸の奥をかき毟りたくなる感情に苛まれ、それでもフィオナは、平らな窓ガラスを掴むように手のひらを握り締めた。
「わ、わたくしをいくら穢したところで……イセリアの誇りは、いささかも傷つくことはありません！」
声が震える。だが、相手を侮辱して悦に入るような男に、これ以上、不様な姿を見せたくない。
「かーっはっはっは！」
だが皇帝は、巨体を揺らし、精いっぱいの虚勢を嗤い飛ばした。
「いいぞ！　小娘がどこまで頑張れるか、じっくりと見せてもらおう！」
「ッ……がはぁ！　あっ、いやですっ……いやぁぁぁぁあッ!!」
男の腰が、破瓜の痛みが残る膣肉を無遠慮にかき回す。彼の言う通り、今のフィオナは陵辱に泣き叫ぶだけの、ただの小娘に過ぎないのだった。
部屋に戻された皇女の姿は、無残そのものだった。膣内射精こそされなかったものの、ドレスや髪に浴びせられた牡の体液が、鼻の奥をツンとつく。
「はぁ……はぁ……」
真紅の絨毯に埋まる、ガックリとついた手首。姿見に映る陵辱後の姿は、豪奢な調度品に囲まれている分、なおのことみじめだった。
「姫様、御髪を」
黒髪を肩で切り揃えた少女が、傍らに跪く。切れ長の瞳と同じ、墨色のエプロンドレスの彼女は、フィオナ付きの侍女。己の主がどんな目に遭ってきたか、知らぬはずはない。しかし彼女はいかなる感情も浮かべることなく、髪にこびりつく精液を、蒸しタオルで淡々と拭った。
「あ……ありが、とう……」
切れ切れのお礼の言葉にも、眉ひとつ動かさない。顔と髪を綺麗に拭き取ると、粘液の染み込んだドレスを黙々と脱がせ始めた。
行動だけを見れば、いかにも役目に忠実なメイド。しかし、フィオナを見詰める氷のような眼差しは、性遊戯に耽る同性を蔑んでいるようにしか思えず、皇帝の責めに辛うじて耐えた心さえ、へし折られそうになるのだった。
堅牢な帝国の城にあって、もっとも警護の厳重な場所のひとつ。皇帝の私室の扉が、水色の髪を持つ少女によって、苦もなく開かれる。
ぼうっ……。
窓のない壁に並ぶ蝋燭の炎が風に煽られ、大男の影を揺らした。
「ご機嫌はいかがかしら、お父様」
執務用の椅子に深々と腰かけ、肘掛けに頬杖をついていた皇帝が、閉じていた目の片方を気だるげに開く。無断侵入の非礼を詫びもせず、それどころか小ぶりな胸を得意げに突き出す黒ボンデージの娘の姿に、彼は不快そうに

鼻を鳴らした。
「……メイベルローゼか。何用だ」
まるで、言葉を交わすのも億劫だと言わんばかり。それでもメイベルローゼは、もれそうになる舌打ちの音を抑え、余裕の笑みを作ってみせる。
この男にとって、いや帝国内においてさえ、彼女の姫という肩書は軽い。母の身分の低さ故だが、今は、その状況を覆す自信があった。
「随分とお楽しみだったじゃない。どう？　あのお姫様の具合は」
「ふむ……思っていた以上だ。ワシの手に余るほどの胸とは恐れ入る」
彼女の感触を思い出したか、目を閉じ、乳房を揉むように指を蠢かせる。
（そりゃ結構なこと……）
自分のささやかな胸と比べられているかのようで、魔姫の頬が引き攣る。が、彼がご満悦なのは望むところ。そうでなくては、苦労してフィオナを連れてきた意味がない。
「あそこの締まりもたまらん。ぐふ、まだまだ色々と楽しめそうだ」
いったい、頭の中でどんな計画を練っているのか。ギュスターヴは卑猥に口を歪め、身体の肉をゆさゆさ揺らした。何しろイセリアの皇女を抱くのは、彼の悲願のひとつだったのだから。
「それを実現させてあげたのは私よ。感謝してよね」
「うむ、大儀であった」
「……そ、それだけ？」
それは、お姫様を連れ帰った時に聞いた。欲しいのは、もっと目に見える報賞なのだ。例えば、最前線で大軍を動かせる指揮権のような。
（私は……もう、私より無能な男どもに馬鹿にされるのはイヤなのよ！）
自分を嗤った連中を、自分の前に傅かせたい。跪かせたい。しかし。
「それだけだ。下がれ」
「ちょ……ちょっと待ってよ、他に言うことがあるでしょう！」
焦って食い下がろうとする魔姫を、ギュスターヴは鼻であしらった。
「まさか皇帝の子が、小娘ひとりを連れてきた程度で、大手柄を立てた気でいるわけではあるまいな？」
グッと、唇を噛んだ。その大手柄を手にする機会さえ与えようとしないのは、どこの誰だ。
（変態のゴルヴァーナですら、一軍を与えられているっていうのに！）
「つまらん用件で、せっかくの余韻を台なしにしおって」
あからさまに顔を顰める。自分の娘の手柄より、そんなにあの牝豚の残り香がいいのか。
「くっ……」
魔姫の瞳が光る。しかし、バーンドベルグ内で魔法は使えない。服従魔眼の使えないメイベルローゼなど、皇帝には何の脅威にもならないのだ。歯ぎしりする。不甲斐なさと悔しさで、口の中がギリギリと軋みを上げる。
「下がれ」
もはや、取りつく島もない。怒りで弾けそうな身体を抑えて踵を返した。
「ちくしょう！　あンのクソ豚が！」
悪態を吐くメイベルローゼを、警護の兵どもが一瞥した。その目は、姫を相手に蔑みの色を隠そうともしない。
所詮は色香で男を惑わすしか能のない、下賤な魔法使いの娘だと。
（能なしどものくせに……そんな目で私を見るな！）
皇帝のご機嫌取りのため、自分がどれだけの女を運んだと思っている。誰のおかげで思うさま少女の身体を楽しめると思っているのだ。
（畜生……畜生……っ！）
魔少女は、やりきれない怒りを拳に込めて、回廊の石壁に叩きつけた。

それから数日後、空に夕闇が迫る時刻に、迎賓館に数台の馬車が相次いで到着した。隣国の要人を招いて、皇帝主催の夜会が開かれるのだ。
ただ、会場に入ったのは、ゲストの四、五名の男のみ。警護兵はおろか、随行の家臣も建物に入ることが許されない。夜会というより、極秘会議のような、異様な緊張感がそこに漂う。
「おおっ!!」
だがテーブルに着くや、表情の硬かった彼らが一様に驚嘆の声をあげた。
見上げんばかりの天井。無数の光のシャンデリア。数百人がダンスをしても余裕がありそうなホールに置かれた長テーブル。コースの段取りを無視し、その卓上に所狭しと並べられた料理の数々。だが、彼らが驚いたのは、そんな贅を尽くした空間にではない。
ワインボトルを持って現れた五人の少女、給仕係の彼女たちに目を奪われたのだ。
「遠路はるばる、我が帝国にようこそ参られた！」
大仰に両手を広げたギュスターヴの挨拶など、ほとんど誰もまともに聞いていない。それほどに、傍らに立つ少女たちの給仕姿に魅了されていた。
上半身は、ほぼ裸。水着のような極小の布切れが胸の先端を隠すのみで、華奢な鎖骨、乳房の膨らみ、なだらかな腹や背筋まで、艶かしい肌の色が惜しげなく晒されている。
下半身に目を移せば、爪先立ちのハイヒールに、網目の大きなガータースストッキング。エプロン付きの黒いミニスカートはお尻を隠す役目を完全に放棄し、むしろ、そのまろやかさを一層際立たせていた。
少女たちは、前で手を組むふりをして、さりげなく、しかし必死に裾を引き伸ばす。それもそのはず。スカートの中は丸裸。下着を着けていないのだ。今にも脚の間の秘めた場所が見えそうで、不安そうに内腿を擦りあわせる。
半裸と言うには過激な露出。にもかかわらず、肘までの長手袋と頭上のティアラがフォーマルな雰囲気を残し、その高貴さが滑稽ですらあった。
「閣下、これは……」
無骨な武人といった風情の来賓たち

著者近況　最近は文庫が中心なので、ハードプレイやファンタジーは久しぶりです。お姫様やツンな娘が大好きな私としては、フィオナとメイベルローゼを書けてラッキー。ついでに好きな要素をみんなぶち込んでみました。

だが、戸惑いを装う中に、男としての好色さを隠せないでいる。
「貴公らを歓迎するための、精いっぱいのもてなしだ。さあ、まずは乾杯を」
それに対し、皇帝は涼しい顔で、接待役に顎で指示した。
「あ、あの……お酒を……」
少女たちが、グラスに琥珀色の酒をなみなみと注ぐ。その態度は、挑発的なスタイルとは正反対だった。表情は青ざめ、ボトルを持つ手が小刻みに震える。男性に話しかけることにすら怯えているかのように。
「……どうだフィオナ。なかなかよい眺めであろうが」
満足そうな笑みでギュスターヴが振り返る。そこに立つフィオナもまた、同じコスチュームを着せられていた。
「み……見ないでください……」
囚われの身とはいえ、曲がりなりにも一国の王女。それがなぜ、このような破廉恥な格好をする羽目に。
だが今は、憤りより恥ずかしさが先に立った。身を捩って胸を隠そうとするが、逆に極小ブラから柔らかな巨乳が零れそうになるばかり。男の目を楽しませるだけだということに、フィオナはまったく気づいていなかった。
（それにしても、この顔触れ……。オラリオ連盟の地方領主？）
羞恥に瞳を潤ませながらも、来賓をチラチラと観察する。もし記憶に間違いがなければ、彼らは皆、帝国との同盟の際に反発的だった者のはず。
オラリオ連盟とバーンドベルグ帝国は、実質的には支配の関係とはいえ、強固な同盟を保っている。
だが古参の武人の中には、帝国への服従を快く思っていない者がいるのもまた事実。その一部が反帝国組織の後ろ盾になっているという噂もあるほど。
この夜会の目的は、それが誰かを炙り出し、懐柔する計略なのだろう。だが、このような遠回しな手段、力押しが信条の帝国らしくもない。
「何を呆けておる。お前も客人に酒を振る舞わんか」
皇帝の命令に、フィオナの肩がビクッと跳ねた。できれば、一歩も動きたくなかったのだ。だが皇帝の命令は絶対。恐る恐る足を踏み出す。内腿を締め、ゆっくりと。それでも、慣れない高さのピンヒールに身体がよろめく。
（ダ……ダメ！　しっかりしなさいフィオナ！　真っ直ぐに歩くのよ！）
もし転んでしまったら、何も着けていない恥部を、秘裂やお尻の穴を男たちの目に晒してしまう。そう思うだけで足が竦む。
だが下半身に気を取られすぎた。揺れた乳房の重みでブラが外れかける。慌てて胸元を押さえると、今度は薄手のスカートがふわりと浮いて、フィオナの顔から血の気を奪う。
（恥ずかしい……見ないで……っ！）
慌てふためく羞恥の仕草は、むしろ男たちの目を楽しませた。集まる視線が、灼熱の針のようにジリジリと肌を刺す。そしてそれは、他の少女たちも同じらしい。顔を赤らめ、内腿をモジモジ擦りあわせている。
（哀れな……）
フィオナは、控室で出会った彼女たちの、憔悴しきった顔を思い出した。聞けば、皆小国の姫君ばかり。人質として帝国に差し出され、そして皇帝の慰みものとなったに違いない。
ただ、玩具となって日が浅いのだろう。以前自分を嫉った姫たちと違い、性を楽しむまでに開き直れていない。
（いいえ、それでいいのです。誇りを失ってしまうよりは、ずっと……！）
しかし、今は他人の心配をしている余裕はなかった。あまりの恥ずかしさに、お尻の穴がムズムズする。
「お、お酒……です……」
それでも、ようやく靴に慣れ、三人目の客人に酒を注いでいる時だった。
「そなた……イセリアの……？」
ハッとした。まじまじと覗き込まれた顔を慌てて背ける。迂闊だった。衣装に気を取られるあまり、出席者の中に自分を知っている人物がいる可能性まで気が回っていなかった。
「ひ、人違い、ですっ……」
「ううむ……そうだな。かの姫が、このような場所にいるはずがない」
サーッと血の気が引く。今は護摩化せても、あの肖像が出回れば、やはり本人だったのだと知られてしまう。崩れ落ちそうな身体を必死に支え、彼から離れようとしたその時、ギュスターヴがフィオナたちを呼び寄せた。
「お前たちにも酒を用意した。ありがたくいただくといい」
来賓はもちろん、集合する姫たちも首を傾げる。このような場で、給仕に酒を振る舞うなど聞いたことがない。
いつの間に用意されたのだろう。彼の横に置かれたワゴンに、近隣国家の紋章が刻まれた細長のグラスが五つ、整然と並べられていた。だが皇帝の意図が掴めず、誰も動こうとしない。
「ほう、飲めんか？　それとも……酒よりワシの仕置きが欲しいか」
上機嫌だった彼の声が低くなる。それだけで、少女たちは震え上がった。心と身体に刻み込まれた陵辱の記憶。それが、我先に手を伸ばさせる。
もちろん、フィオナも例外ではなかった。焦って手に取ったのは、イセリアの紋章のグラス。
「あ、あら……？」
てっきり自分に用意されたものだと思ったが、この場にはいないクレオラやフェイエンのものあるし、特に意味はないようだ。それに深く考えている余裕もない。血の色のような赤い液体を一気に飲み干す。
「……おいしい？」
変な味はしない。口当たりのいい、甘い酒のようだ。身体にも特に変化は現れない。だが酒で騙された経験のあるフィオナは、皇帝の不敵な笑みに嫌な予感を拭いきれない。
再び給仕に戻る少女たち。だがその

著者近刊　『妹はグラビアアイドル！』『妹はグラビアアイドル！2』『妹のリップバージンはお兄ちゃんのもの！』『真帆先生のおあずけレッスン　結婚までHはダメッ』『巫女あまシスター！』　好評発売中！

背中に、無慈悲な声が襲いかかった。
「さて諸君。お楽しみの時間といこうではないか！　お前たち、ワシの仕込みの技で客人を楽しませるがいい！」
男を楽しませる。その意味を、性奴に堕とされた姫たちは瞬時に理解し、震え上がった。
「い、いやぁ……いやです……っ」
「お許しください……！」
恐れおののき、しかし、心を凍てつかせる皇帝の眼光に逆らうことができない。ふらふらと、まるで操り人形のように客人のもとに歩み寄っていく。状況を飲み込めない男たちに抱きつき、自ら唇を寄せていく。
「ワシのもてなし、受けられぬとは言わぬよな。でなければ、不届きな組織について、多少厳しく詮議しなければならんのだが……」
その一言で、諸侯も揃って口をつぐんだ。やはり帝国に後ろめたいものがあったのだろうが、フィオナに彼らの事情を斟酌する余裕などない。
「や、やめてください！　こんな、娼婦のような扱いなど……」
「おかしなことを言う。見よ、皆楽しんでおるではないか」
ギュスターヴは訴えを遮り、太い指で、目を覆うような光景を指した。
「こ、これは……おうっ！　す、素晴らしいもてなしを……おぉあっ！」
「ううむ。よもやこんなご馳走が待っていようとは……」
諸侯は皇帝の言動を訝るどころか、擦り寄る少女を膝に乗せ、胸を激しく揉みしだく。男も女も、互いの股間を夢中で撫であう。
だが、誰も幸せそうでない。恐怖から逃れるため、性愛にのめり込もうとしているのだ。皇帝の言葉を拒めば母国に累が及ぶ。フィオナは、一方的な支配の実態を見たような気がした。
「フィオナ、お前も負けてはおられんな。頑張って奉仕してもらおうか」
ギュスターヴは、余裕の口調とは裏腹に、待ちきれない様子で下半身をすべて脱ぎ去った。
「ヒ――ッ!!」
早くも猛った男根に、フィオナは思わず悲鳴をあげた。何度見ても慣れることのできない、勃起巨根。それが、怯える少女のにおいを嗅ぎつけ、悦びに身を震わせながら屹立している。
「さあ。その上品なお口で、ワシのムスコを可愛がっておくれ」
ギュスターヴは腰を下ろすと、フィオナの頭をガッと掴み、大きく開いた脚の間に押しつけた。
「い、いやです！　あんな恥ずかしいこと……！　ああっ、臭い……っ」
まるで象の脚にでも乗っているような重圧と圧迫感。ジリジリ近づく亀頭。ムッと立ちのぼる熱気と臭気に胸焼けを起こす。フィオナは肘掛けに腕を突っ張って、死に物狂いで抵抗した。
（どれだけわたくしを……イセリアを辱めれば気が済むの!?）
だが、もう身体を支えきれない。腕が折れてしまいそうだ。
「いや……いやぁっ！」
唇を噛み、涙を流して抗うフィオナの頭から、急にふっと重しが取れた。
「――!?」
諦めたのだろうかと顔を上げ、息を詰まらせる。頬を吊り上げ、汚い歯を見せる皇帝の不気味な笑みに。
「お主、大事なことを忘れておるようだな。――イセリア王族の女は、処女を捧げた相手に、生涯仕えねばならぬという掟を」
身体が、凍りついた。強欲な視線に貫かれ、瞬きひとつできない。
「お前は、もうワシのものなのだ」
「あ……ああぁ……」
残酷な、あまりにも残酷な宣告に、全身から力が抜けた。どうして、我が身に課せられた宿命を知られてしまったのか。どうして、こんな男に純潔を奪われてしまったのか。
ぽたぽたと零れ落ちた涙が、床の絨毯に吸い込まれていく。
前髪をぐっと掴まれた。泣き顔に突きつけられる極太肉棒。その醜悪な威容、浅ましい熱気に嫌悪を覚える。
（でも……もう、わたくしは……）
絶望が心を覆い、フィオナの瞳から光が失せた。呆然と、半ば無意識に、唇を寄せていく。
「う……んっ!?　むふぅ……ッ！」
臭い。まるで生魚を突っ込まれているようだ。吐き気を催しながら、それでも必死に、奥まで飲み込む。
「もっとしっかり咥えて、舌を絡めんか。……おおぅっ、そうだ……うっほぉ……やれば、できるではないか」
唇に触れる肉の感触。血管のゴツゴツが気持ち悪い。なのに、なぜか吐き出す気にならなかった。毛深い太腿に手を置き、夢中で口腔に捻り込む。
「うっく……うえっ、むぐぅ……！」
大きく張り出したカリ首に舌先を這わせる。それが気に入ったのか、ギュスターヴは小さく呻きながら、褒美を与えるように髪を撫でた。
（ヒッ――!?）
ざわっと背中が総毛立つ。好きでもない男にされて嬉しいはずがない。なのに、理性では嫌悪しているのに、身体が歓喜で小刻みに震える。
（い、今のは……？）
きっと、虫唾が走ったのを錯覚しただけ。そう自分に言い聞かせ、改めて醜い肉棒に舌を這わせた。
「はぁむっ……ちゅ、ちゅぱっ……」
肉幹に舌で唾液を塗りつける。亀頭を咥えて先走り液を啜る。いつしか奉仕は熱を帯び、相手を悦ばせることで頭がいっぱいになっていく。
だがこんな恥辱の奉仕も、皇帝の企みの、ほんの入口に過ぎなかった。
「ぐふふっ……。ところで客人。先ほどこの者たちが飲んだ酒だが……ちょっとばかり面白い代物でしてな」
皇帝にならってペニスを舐めさせていた男たちが、呼びかけに応じて快感に呆けた顔を上げた。

「四つはただの酒。だが残りのひとつは、排卵をうながし、確実に孕むことのできる、グラマトンの秘薬なのだよ」
愉快そうなギュスターヴに、男も女も動揺でどよめいた。フィオナもペニスを咥えたまま衝撃で目を見開く。
「どうだろう。女どもを一斉に犯し、孕んだ者が勝ちというのは」
「な……何を馬鹿な……っ！」
唾液を飛ばして顔を上げたフィオナを、ギュスターヴは一瞥もくれずに押し戻し、再び肉棒を捻じ込まれた。
「し、しかしギュスターヴ候。女が孕んだなど、見た目ではわかりません」
「心配いらん。むふふっ、この薬には面白い副作用があってな……受精と同時に乳を噴くのだ」
それで、孕んだかどうか一目瞭然というわけだ。
「どうだろう。これで賭けをしてみんか。見事女を孕ませた者には、望むままの褒美をくれてやろう！」
そんな――フィオナは戦慄した。薬で、しかも、そんなふざけたゲームで女を孕ませようなんて。だが二心を抱えた者に、ルールなど関係ない。
「……犯せ」
皇帝の一言が合図になって、男たちは一斉に少女たちに襲いかかった。床に押し倒す者。四つん這いにさせ、背後から挑みかかる者。
「や、やめてっ、挿れないでぇっ！」
その声に答える者はない。無情な肉棒が、女性器にめり込んでいくのみ。
ず……ずずず、ずぶっ、ずぶる！
「いやっ、妊娠いやぁぁっ！」
肉の交わる音。広間に響く、耳を塞ぎたくなるような少女たちの悲鳴。
「お……おやめください！」
フィオナは皇帝の腰にすがり、中止するよう懇願した。もう、女性が嬲られるのを見るのは耐えられない。
「何を勘違いしておる。お前も、ゲームの駒のひとつなのだぞ？」
冷淡な事実に、ゾッとなった。そうだ。妊娠薬を飲んだのは自分かもしれないのだ。まるで、すでに孕んだような錯覚に、身体の奥で子宮が疼く。
「だが、ワシにも慈悲はある。この中で誰よりも早くワシを射精させられれば……ゲームを中断せんでもない」
「そ……そんな……」
「どうした、ん？　早くせぬと、女どもの腹に子種がぶち撒かれるぞ」
彼の言う通り、男たちの腰振りがヒートアップしている。躊躇していられない。フィオナは焦り、愛撫を催促する淫棒に、無我夢中で吸いついた。
「んっ、むぅッ！」
不快な生温かさに眉をひそめる。しかし、胸まで染み込むガマン汁のにおいを吸い込んでいるうち、フィオナの身体に変化が生じ始めた。
「はぁ……あ、はぁぁぁ……ん、ちゅっ、ちゅぱ、じゅぱちゅッ……」
視界がぼやける。ブラに擦れた胸の先も、痛いほど硬くなってくる。
それだけではない。肉棒から唇が離せない。もっと頬張りたい欲求が、もっと気持ちよくさせたい衝動が、脚の間から湧き上がる。処女を奪ったペニスの味が、子宮を切なく疼かせる。
（あ、はぁぁ……わたくし、どうしてしまったの……？）
身体に、何か異変が起きている。その正体を確かめる術もなく、フィオナは被虐の悦びに身悶えした。
（ンふぁぁ……おっぱい、ジンジンして……は、あぁぁ……ンッ！）
まるで、胸の疼きを見透かしたように、男の手がブラを毟り取った。重そうに揺れながら飛び出すむっちりバスト。隠す間も身を捩る間もなく、大きな手のひらに揉みしだかれる。
「ふぉっはは。どうした、こんなに乳首を硬くしおって」
「そ、そんなことは……んンッ!!」
尖った乳首をキュッと抓られた。激痛に背中を仰け反らせる。だがフェラチオはやめられない。フィオナは乳首の痛みを紛らわせるように、夢中でペニスを吸い続けた。
じゅぶ、れろれろ、チュれろん！
胸の甘い痺れに身悶えしながら、唇でペニスを扱く。亀頭の丸みを舌先でなぞる。血管が浮き出た肉幹に、吸いつくようなキスを与える。処女を奪われて以来、心ならずも仕込まれたテクニックを駆使し、憎き男を悦ばせた。
「お……おほぉ、いいぞフィオナっ。だがこの程度では……ワシを射精させられん……ぞ！」
「あ、あぁ……そんな……」
余裕を見せるギュスターヴに、慌てた唇で激しく擦る。しかし焦るほど愛撫は雑になり、射精の気配が遠のいていく。フィオナは唇の端から涎を垂らしながら、周囲に視線を走らせた。
「いやぁっ！　やめてぇぇッ！」
「中で出さないでぇ！」
切迫した少女たちの声。このままでは確実に、誰かが望まぬ子を孕まされてしまう。
「おお、あやつらなど、じきに終わりそうな気配だぞ。お前も、そろそろこちらを使う頃合いではないか、な！」
「はぁぁうッ！」
ギュスターヴの靴先が恥裂に刺さった。恥肉をえぐり、挿入を催促する。
（でも……ああ、でも……！）
確かに、付け焼刃の口唇愛撫ではもう限界。でも肉棒に胎内をまさぐられる、あの屈辱的な感覚は、もう二度と味わいたくない。
――出すぞ、お前の中に！
――やめてぇぇぇぇ！
だが、少女たちの悲鳴がフィオナを急かした。慌ててスカートをたくし上げ、瞬間、獣欲剥き出しの男と目が合い我に返る。
「ふっ、早くせぬと間に合わんぞ？」
「は……はい……」
悲しみに胸を潰されそうになりながら男の腰に跨がる。そそり勃つ肉棒を、震える指で自らの秘裂にあてがう。
「あ……くっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/